御趣法方ノ名初テ設ケラル 郁姫様近衞家御縁組被為済通達 「齊興公御参府御登城通達」

郁姫様近衞家御入輿被為済通達 改元通達

橋民部卿御逝去通達

齊宣公御隠名御届

日録

枚)」の記載あり〕(『元国事鞅掌史料(紙数六五〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数六五

市來四郎編 日 文政 七元 年年

齊

興公史料

久光公種子島藏人養子ニ付通達

(表紙)

重豪公被仰出書

前書ニ対シ齊興公仰出書

齊興公官位御昇進女房奉書到来通達 久光公種子島藏人養子被仰出達書 齊興公官位御昇進ニ付口宣等頂戴通達

齊興公被仰出書

齊宣公大崎へ御引移通達

土井大炊頭様ヨリ被成御渡候御書付

重豪公被仰出

御続料御減少通達

同上ニツキ家老論達 重豪公御介助御辞退ニ付通達 重豪公病気御快復御登城

(ノ通達

花火取締達書 御下国ニ付通達

齊興公月次御登城ノ通達

諸士風俗及財政縮少ニツキ重豪公諭達ノ件

五月

御家老座印

御滞府ニツキ達書

齊與公御夫人賢章院殿略伝(因州池田家寄送) 文政七甲申七月寶島ニ於テ英人ヲ銃殺セシ始末

ニ六八 齊宣公御隠名御届

御隠居様御儀、 被差出候処、 旧臘九日御願ノ通被為済候旨申来候、 御惣髪溪山様ト御改名被遊度御願書 此

典膳 興]

正月

旨奉承知溪ノ字並同唱ノ文字可致遠慮候、

五月

四日文政元年ト改ム

二六九

候段申来候間奉其意、

可相改候

改元通達

今度年号文政ト被相改候旨、 去ル四日ヨリ諸書付等モ文政ト 四日於江戸被 仰渡

去ル

ニせの 郁姫様近衞家御入輿被為済通達

郁姫様御事去ル十五日 近衞様へ御入輿被為在、

進候段御到来候、

向等無御滯被済、

且同日彼御殿ニ於テ郁君様ト若号被

御式

四月

監物(町田久視)

七七 橋民部卿様御事此間ヨリ御所労被為入候処、 (済数) 橋民部卿御逝去通達

差重先月四日被遊御逝去候、 御隠居様御徒弟ノ御続[従カ]

ニテ御忌三日、 御服七日被遊御請候、

右同断ニ付、英姫様

御定式ノ忌服被遊御請候、

右近美

八月

ニモニ 齊興公御参府御登城通達

太守様御参府付、先月廿五日以上使水野出羽守様御懇 ノ被為蒙 上意、 同廿八日御登 城御参府 ノ御礼被仰

漸

々 御 ラル、

三日御納戸奉行、

圖師崎源兵衞超 公ノ御抱守ニ命セ

十一月

十五日御納戸奉行、

伴鐵之助江戸御留守居ニ転ス、

十月

二七四 御趣法方ノ名初テ設ケラル

先格ノ通被為済候段御到来候、 上候処、 御懇ノ被為蒙 上意、 御直御請被仰上諸事御

右近

二七三 郁姫様近衞家御縁組被為済通達

郁姫様御儀

近衞左大臣様御息辰君様へ御縁与御内談

御上京 被為済候付、先月十八日御願書被差出候、右ニ付来春 近衞様へ可被為入旨 大御隠居様御沙汰之由

八月

申来候、

文政元年戊寅四月

一普之進殿種子島藏人養子ニ被仰出候付テハ、+月六日生 久光公種子島藏人養子ニ付通達

以来此殿

文字相用候樣、

文政元年戊寅五月英国ノ商船一艘浦賀ニ漂着ス、

御趣法方調へ掛

勤被 右之通此節勤向ノ名被相究諸御役人之内御見合ヲ以右 仰付候段 別紙申渡通ニ候間、 是迄御趣法方

右調掛御趣法方へ出席掛御用人へ相付、 へ御役々出席御用取扱被仰付置候へトモ、御引取ニテ 御勝手方御用

是迄出席御役々致吟味来候振合ヲ以、 向諸取調方被仰付候、尤此以前吟味度取扱振ニ不抱、「枸タ」 何篇鎖細尽吟味

十一月

聊モ御賞筋無之様可致精勤旨被仰出候、

-139-

二七六 重豪公被仰出書

大御隠居様御筆

並国許へ差下候儀、 此節所帯向至テ難渋ニ付、 畢竟不軽時節ニ相趣キ勤向ニモ 向井十郎太夫・堀殿 衞 大坂 差

大目附へモ其方ヨリ委細可申越候事、 弁繰合相調候様、 国元同席中申談可取計、 尤若年寄·

年来ノ趣意イマタ不到治定候間、

弥其通取扱精々令勘

支候程

ノ事ニ候条、

依テ格外ノ仕向申付越候、

勿論去

監物

二七七

前書ニ対シ齊興公仰出書

程相成候段監物ヨリ申出不容易時節ニ 所帯向連々差迫リ此節別テ難渋成立、 候、 既勤向モ調兼候 先年以 来追

候テハ不叶事候故、 取縮向等尽手ヲ候上ナカラ、猶又格別ノ趣法不相立 今度従 大御隠居様ヨリ被 (衍カ) 仰出

得卜奉承知鎖細遂吟味其詮相 御 老年種 ロ々被尽 御心苦候御事共甚以令心痛候間、 立候様可取計候、 被為及

趣有之、

向井十郎太夫・堀殿衞差下候条、

仰出

趣

召有之是迄御内々ノ御取扱ニテ候得共、

追々御丈夫被

御命 出2 老中ハ不及申其外役々一統申談精々尽吟味、 御趣意相立被遊御安慮候様屹ト可取計候 何 レ

=

Ŧ

三月

家老中

二七八 齊興公官位御昇進ニ付口宣等 頂 戴 通 達

都へ被差越、 太守様御官位御昇進付 御献上物等御先規 П 宣 ノ通被為済 宣旨御頂戴 П ノ御使京 宜

三月

右近

宣旨相渡、先月十九日被遊御頂戴候段申来候

日 英姫君((ハ十五歳) 曩 = 御 逗留

ノ名ナリ

閏四月四

ヲ御入リ名付ケト唱ヘシム、

二七九 久光公種子島藏人養子被仰出達書

去年御出生ノ 御男子様御名普之進様ト 被遊、 然共思

為成候付、此節種子島藏人養子被 三月 仰出候

典膳

齊興公ノ第五男 (生母岡田遊羅子) (同上岡山侯)、 第三壯之助君 第一ハ齊彬公 本

第二治五郎君

夭亡、以上御本腹)、 第四夭亡、 第五普之進君(久

光公御幼名、 鹿児島城ニ生レ玉フ)、

太守様御官位御昇進ニ付 齊興公官位御昇進女房奉書到来通 П 宣 宣旨、 女房奉書、

明廿六日昼時御到来ノ筈候

閏四月

内藏

事ニ候、

此旨屹ト申聞候事、

老初重役ノ面

、々深奉汲受、永久ニ至リ聊忘却致間敷候、

匹 |月廿四

閏四月四 H 英姫君歳 高輪邸ニ御逗留、

茲二五年、此

日芝邸新御殿御住居トナリタリ、

(同

二八二 土井大炊頭様ヨリ被成御渡候御書付

先達テ有馬左兵衞佐ヲ以申来候品有之処、厚ク被聞請 候テ其後追々家政折合穏ノ由及承重畳ノ儀ト一同存候

儀迄モ万端榮翁殿へ相談有之候様ニト存候事ニ候、 従

猶以此上先達テ申伸候趣意相貫キ、

琉球国

存候、 モ関係ノ事ニテ不容易儀候間、 来段々深篤ノ心添畢竟被行届候処、 年令ノ儀被致心痛候程ハ察入候ヘトモ、 此上トモ精々介助立ラ 其詮モ格段 外藩 ノ儀

伸候 レ候様有之度事ニ候、尤入 段ノ儀ト御機嫌ノ事候、 此等ノ趣一同ヨリ無急度申 御内聴ニモ候処心添ノ程

六八 齊興公被仰出

先年大炊頭殿ヨリ御達ノ趣有之、 猶又此節別紙 通御

達有之誠不軽

御沙汰ニ候、

右ニ付テハ

大御隠居様

猶又御自筆ニテ別紙 有次第ニ候、 御介助被成下被立置候規定ノ詮モ有之、於我等別テ難 御老年ノ御事ニテ種々被尽御心根、 ノ通被 仰出候付、 御趣意ノ 今度 程家

土井大炊守様ヨリ 太守様へ御内達ノ趣有之、 四月廿

向 日彼御宅へ被遊御出候処、 ノ儀御達被置候処、 猶以此上先達テ御達有之候御趣意相貫、 其後追々御家政穏ノ由重畳 先年御初入部ノ砌御政事 琉球 一ノ御

内々被達 玉 事候間、 ノ儀迄モ万端 上聞候処、御心添ノ程一段ノ儀ト御機嫌 大御隠居様へ御相談有之候趣、

尤御

テ大崎御屋敷へ御引移、

是迄ノ御茶屋へ御造次等ニテ

難為調候テ、

何篇御心配被為

在白金御屋敷御引払ニ

御事候旨、 年不相緩様屹ト可相守、万一此後御政事向相緩 モ 無之トノ趣 相聞得候儀モ有之候テハ、再応ノ御達薄相成御申訳 御別紙ノ通被仰達候付、 大守様 大御隠居様ヨリ御別紙 是迄ノ御規定到後

々役々等へモ時 々可申含候

下

規定通、 筆ヲ以被

仰出候付、

一統厚奉承知、

夫々被立置候御

書

ノ通御

公辺

永久ニ至リ聊不致忘却無緩疎猶又相守、

支配

府

五月

右近

長門 安房

内藏

三 齊宣公大崎へ御引移通達

儀御国元へ御下向可被遊ノ処、 御所帯方極御難渋成立誠不容易御時節付、 無御拠御訳合有之其儀

御隠居様御

御手細ニ御住居ノ筈候旨申来候、

内藏

閏四月

月ニノミ消光セラレシカ、 齊宣公ハ御退隠後新ニ白金村ニ別邸ヲ創建セラレ、 兎角費途ノ多ヲ御憚リ、

ハ前年内訌ノコトヲ以テ允許セラレス、 ノ如ク御帰国晩年ヲ楽玉ハムト請願セラレシニ、 殊ニ廣大院

殿ヨリ御止メノ御内示アリテ御帰国ヲ停メラレ、尋テ

白金邸ヲモ財政困頓ノ為メ、大崎村ノ別邸内ニ御引越 御手細ニ御住居アラントセラレシモ、 齊興公司 リ御懇

談遂ニ其事モ罷メラレ、 依然白金邸ニ御住居アリテ、

重豪公薨去ノ後高輪邸ニ御転居トハナレ

年差出置候間、

右高ニ応シ候、

所務重出米取合三都借

ノ代ヲ以当時二万石ニ応候続料ノ内、乍纔五百石二ケ

重豪公被仰出書

去ル丑年川々御普請御用金蒙 仰三都借入、又々諸人

出銀等ヲ以テ漸ク金納右相済、 其見当無之付、 領国中重出米ノ儀及再三家老中願ノ趣 五ヶ年ノ約定候ノ処、

来辰年迄二ヶ年引続是迄ノ通、玄出米ノ儀願申出趣細「重ク」 有之難黙止筋合故、去ル丑年其通申付置候、然処又々

々令承知候、右ニ付テハ其砌モ申聞候通、領国中一統

モ安堵可為致積候処、此上又候出米申付候テハ當更及「筒ヵ」 難渋別テ迷惑可存事候付、容易願通難聞済候へトモ、 困窮ノ折柄ニ候得ハ、最早当年ヨリ重出米差免、諸人

引替へ相成程ノ儀不相見得趣ニ付テハ、乍気ノ毒モ此

外ノ儀迄モ、此節ヨリ都テ引請候上ニ候ヘトモ、 候、 節家老中願通申付候条、右出米無滯返金取計候様申付 左候テ当時極々難渋ノ時節候付、是非共入用並其 別段

閏四月

二八五 御続料御減少通達

御前様御方

一金子二千両

右ノ内千両ツ、此節ヨリー往御減少

被究置候、外ニ金五百両別段御内々ヨリー往被進候 右ハ御勝手向連々御難渋成立、 右御婚姻被為整候迄ノ内、年々御入用右之通此節ヨリ 英姫様御方 一金子千両

御所帯立直候様混ラ 統様御身辺ノ儀迄、 公辺御勤ヲモ難被為調程相成不容易御時節ニ付 精々御省略万端御事ヲ被為缺近年 御工夫被為在候、 依之 御前様

御続料ノ内御気之毒ナカラ右通一往被相減′ 大御隠居様被 ニモ御婚姻被為整候迄右員数ニテ可成丈被為済候様 仰出候段申来候、

英姫様

安房

末々迄不残様可申聞候 財聊無相違返金可取計候、 右 ノ趣国元家老中其外一統

同上ニッキ家老論達 年十月

二八六

既二

御隠居様細々被 続金モ相滞、 拠御用金是迄ノ御産物料ニテハ余程及御不足、大坂御 御所帯向極御難渋ニテ御借入金増長、御利払其外無御 当時御勉事モ御調兼被遊候程成立候段、 聞召通、此上万一格段ノ御入価共被

可相守候、此旨無格へ申渡諸与・与力・諸郷

私領 弥以堅

ノ参会等ノ儀迄モ、先年已来申渡置候通

可被申渡旨、

向々へ可申渡候

十月

無益

及御到来候節ハ、礑ト御差支御家ノ御危趣ニモ可相掛、

殊更

次第二候間、 被為尽候趣、 御年限中ニハ是非其詮相見諸人モ安堵仕候様 次第二候、御取縮向儀ニ付テハ先達テヨリ追々被仰付、 御恥辱被 御老年様ナカラ何篇御引受ノ上若其詮不相立候テハ、 思召上候トノ御趣意致、家々何トモ奉恐入 旁御別紙ノ通被 段々申渡置候通掛御役々ハ勿論於諸向 仰出 御深慮ノ程難有 モ

御心ヲ

二八七

重豪公病気御快復御登城ノ通達

典膳

信濃 將監

登

御快腹候ハヽ、御序ヲ以〔復ク〕 書被差出置候処、 此節御老中水野出羽守様ヨリ 先月七日御登 御目見被仰付候様ト 大御隠居様御病 城被遊へキ旨被仰渡 ・ノ御願 気被遊

様 当日四ッ時御登 御目見、青山下野守様御披露 城於 御座之間 公方様 御着座ノ上、格 大御隠居

涯御老中様へ御謁御礼被仰上候段御到来候。 御退去下ノ御休息所へ御引御伺 Ę 於黒鷲

七月

御

に趣意ノ

程末々迄モ奉汲受、

毎物省略ヲ加へ衣服又

被為缺一渥御作略向セリ詰御取調有之事候間、[雖ク]

様成立、

御安慮候様精々可相励候、此節於江戸表モ

御役々等迄モ減少被仰付、

万端御事

別御懇ノ被為蒙

上意下野守様ヨリ御礼御取会有之、

統致和熟、

朝暮掛心頭鎖細ノ儀迄モ細密尽吟味、

何

モ近年中御所帯向立直リ、

諸人モ身分相応致渡世候

猶又御吟味ノ上、

-144 -

付ヲ以被仰達候、且又朔望其外御登 院ニテ御礼被仰上、若菜ノ御礼ニモ御登

城ノ節々、

大廊

城候様御書

始ハ御白書院、

月次ハ御黒書院、五節句・八朔御白書

下上ノ御休息所へ可被遊御座旨、是又出羽守様ヨリ水

安房

二八八 重豪公御介助御辞退ニ付通達

手細ニテ御附御役場御引取等被仰付候旨、 今度 大御隠居様御介助 御辞退二付、格外御省略御 別紙二通ノ

別紙二通略ス、

通申来候

十一月

二八九 齊興公月次御登城 ノ通達

大守様先月十五日月次御登

城被遊候処、

御礼後御居

守様ヨリ御台様兼々厚キ御願ニ付、 御白書院於黒鷲ノ御杉戸涯御老中様御列座、水野出羽 残被成候様大御目附水野主殿頭ヲ以御達有之、 以来御礼席ノ儀年 御礼済

> 御登 御杉戸前ニテ御老中様御列座御礼被仰上、 野主殿頭ヲ以御書付ニテ被仰達候付、 城、 当日ノ御出仕相済候後、前文ノ御礼ヲモ 御伺 直ニ西丸 ノ上黒鷲

十一月

老中松平能登守様へ被謁被仰上候旨、

御到来候、

美濃

監物

二九〇 御下国ニ付通達

御着城 御下国ニ付 御船渡 御道中步行御供 御関所等兼テ被究置候惣御供ノ場所 ノ士着服ノ儀、 御発駕

相勤候者共、長半天・野羽織・丸羽織ノ儀ハ勝手次第 天相用候様被仰付、尤其身内者ノ内自分支度ニテ御供

其外目立候所迄、是迄ノ通旅服ニテ、平日ハ股引・半

十一月

被仰付候旨申来候

監物

二年己卯幕府小判一分金ヲ改鋳ス、

八月

秋九月、 是ヨリ先キ連年五穀大ニ登リ、 米価下落シテ

石価銀三十目ニ至ル、

二九 花火取締達書

大造之花火・流星等建申間敷処、近年相図之火同様之 華火ノ儀、家込之場所ハ不及申海手又ハ川筋ニテモ、

候通大造之儀ハ堅可為無用候、

花火建候者モ有之由、心得違之事ニ候、

前々ヨリ相触

花火建候儀モ相聞如何之事ニ候、 右之通文化二年相触候処、近年又ハ相図之火ニ類シ候 向後左様之儀於有之

及沙汰候品モ可有之事ニ候、 右之趣可被相触候

文政三辰

八月

右之通従

公義被仰渡候条可承向々へ可申渡候、

二九二 諸士 ノ風俗及財政縮少ニツキ重豪公諭達

ノ件

大御隠居様ヨリ此節御役々被召寄

御領国中風俗・言語・容貌其外御政事向、

且御所帯方

太守様被遊御承知御尤ノ事候条、御家老ヲ初御役々ニ 御差迫ニ付、 御勝手方御仕向等ノ儀段々被 仰出候趣

立直永久相居侯様、猶更可致精勤旨御沙汰侯事、

八月

御領国中風俗等ノ儀前々ヨリ度々被

仰出置、

猶又去

至リ御趣意ノ程得ト奉承知、朝暮尽心力鎖細ノ儀迄

門方・御家老・若年寄・大目附へ 筋ヲ以 御趣意モ有之、 ル 酉十一月 公辺へモ御願立ノ赴有之、専御政務ノ一[爨タ] 御下国被遊御ヶ条書ヲ以微細被 右御ヶ条書御役場都テ壁書等ニ仕置 御直被 仰出、 仰出置候 御

不差置申出候様被仰付候、

其上ニテ屹ト思召モ可被

為在候、

何分支配頭人ヨリ等閑ニ打過候得ハ、自然ト

右之通此節猶又被

仰出候、支配下末々ノ儀ハ、

頭人

筋等取扱、 御申立ニテ、 仰出置、 候期無之、 古来ヨリノ風俗不容易事ニテ、 モ 他所向応対等出来可申哉、 候様無之候テハ汲受薄ク可有之候、 ハ不致筈候得共、 ノ思召候条、 乍此上等閑打過候テハ、被及御老年御政務筋 其通可有之儀ナカラ、 畢竟心掛薄処ヨリ直兼候、是迄ノ言語ニテ 第一御家老深ク 御下国ノ詮モ無之不可然事候、 能々心掛候様可致教示候、 日用右御趣意ヲ本ニイタシ、 能々其所致勘弁不通無之様 御趣意ヲ味ヒ、 ヲノレニ相考候付立直 程過候得バ其涯 容貌・言語等ハ、 第一 末々申渡 決テ等閑 プノ様 御用 重御

相聞候不可然事、右体ノ者ハ御家老・大目附気ヲ付時相守致取扱候者ニ相任、他ノ事ノ様存候者モ有之哉ニ事候処、間ニハ不頓着ニ打過候者モ有之、折角御趣意番頭専致教示、時々丁寧ニ申聞、取締向行届候様可致与中年若者言語・容貌・風俗等ノ儀、大番頭・御小姓

役方家柄

ノ面々深加勘弁末々可致教示事候

イタシ、日用取締行居候様可致精勤候、[編ク] [編ク] ま々ニ至リ汲受薄相成事候間、能々心掛右ケ条ヲ本

候、其外末々百姓ニ至リ支配人相心得教育致シ候得共、終ニハ不得心之モノモ有之候、能々頭人ノ心得第一ニ小姓与番頭受持ノ事故、頭人心得薄候得ハ一統行居兼小姫与番頭受持ノ事故、頭人心得薄候得ハ一統行居兼御領国中諸士風俗・言語・容貌等ノ儀ハ、専大番頭・御イタシ、日用取締行居候様可致精勤候、

ト質素可成事ニ候、自然トー 風儀相流事候、 第一ニテ、 食ヲ過酒ニ垂シ及事儀有之候、 布相用候テハ不相応ノ儀故、 行届兼候、譬ハ頭役ノ者綿服相用候ニ、下役トシテ絹 ※相成易キ事ニ候、是又頭人不守ノ処ヨリ末々ニ至リ へ下役召呼候節酒肴ヲ飾候得ハ、ヲノツカラ末々モ其 ハ、頭人ノ心得第一ニ候、 末々ハヲノレト立直候様可有之候 頭人ヨリ質素ニ致候得ハ末々ハヲノレ 諸参会モ右ニ準候、 ニ成行候付、 不申聞候共自然立直可 能々加勘弁頭人ノ心得 不相応ニ酒 頭人宅

諸参会衣服等ノ前々ヨリ毎度被仰出置候得共、[饑脱カ]

セノ

自然ト立直候様可有之事候、

御事ニ候、 自分ノ子ヲ養育同前) 心得ニテ丁寧令教示候様ニトノ

吟味候ハ、、

積年ノ屯速ニ其詮モ不相見得、

被聞召通

テ

九月

二九三 町人等ノ長脇差取締達書

モ有之候処、 候者段々有之由相聞得、 町人其外下人類・寺門前者ノ内、長脇差ヲ帯シ致徘徊 前承届、 依之見聞ヲモ相掛置候条、 帯シ居候脇差取揚屹ト御咎目可申付候 致違背別テ如何ノ至候、 右ニ付テハ先年厳敷申渡置趣 右体ノ者見当候 向後屹ト可相慎 名

五月

二九四 御滞 府 = ッ 、キ達書

此節

御筆ヲ以被

仰出候ハ、

連年無御拠御入価打続

統猶難渋ノ積ト被思召上候処、 御所帯向御難渋成立、 セ差繰モ不都合ニテ猶又御難渋ニ付、 夫故重出米銀ヲモ被仰付 大坂友, 御領国中連々困窮ノ砌、 ノ御操合モ至テ六ケ敷、〔繰カ〕 此両三年ハ大坂御仕登 掛御役々種 々 及

> 慮度、 与中支配中、 違無之様心掛奉安 入次第ニ候条、 事可被相慎、 家柄ノ面々モ自ラ其心得ニテ有之様ト被 国中取締其外諸篇ニイタリ 守ニモ相成候間、 無之候付、 為在候御事故、 年ハ御痛所ニテ御滞府ノ御含ニ候、 誠ニ不容易御時宜ニテ モ、 不可然事候間、 仰出置趣、 朝暮 間ニハ若年ノ向ナト心得違モ有之事故、 御政事向万端行届 其外可承向 御心痛被遊候段分テ被 猶又御下知不被為行居候テハ[編ヵ] 末々迄モ一統右ノ御意深汲受、 聊無忘却相守候様、扨又御一門方ヲ初、 且又去年 御在府御在国ハ無差別勤候テ 尊慮候様可相励候、 御国家ノ御為メ不被為得止事、 公辺御勤向モ往々御滞相成候 大御隠居様御介助御辞退被 へ可致通達候 大守様 両御隠居様被為安 左候へハ長 仰出、 大御隠居様追々 此旨諸大身分 思召上候 御申訳 誠以奉恐 屹度取 猶以万 八々御留 御領 当 尊

۱

被

監物

々

安房

長門

同年辛旦秋七月、 和蘭人駱駝二頭ヲ幕府ニ献ス、

冬十月、幕府松前章廣ノ封ヲ松前ニ復シ、[文政四年] 再ビ東西蝦

夷ヲ鎮定セシム、

六月七日、 今井渚村 ヲ御使番ト ス、 中村黑人義之ニ代

御納戸奉行御抱守ヲ兼ヌ、

九月朔日、 將軍家及御台様へ謁ヲ賜フヲ告ク、 閣老奉書ヲ以テ(海承知)榮翁公ヲ吹上ノ園

二九五 文政七甲申七月寶島ニ於テ英人ヲ銃殺セ

始末

是 内 ノ寶島ニ英国船一艘家スルニ捕渡来、 ョリ先文政七年甲申七月七日、 薩摩国河邊郡七島 牛豚ヲ買ハント

> 恐懼シテ本艦ニ遁逃シ去ル、初メ上陸スルヤ本艦ハ大 砲ヲ発ツコト頻ナリ、上陸ノ輩ヲ声援セシモノ、如シ、 陸シ民家ニ乱入シテ牛一頭ヲ銃殺シ二頭ヲ生捕リ シ去ル、島宰吉村九助英人一名ヲ銃殺ス、其他ノ英人 島吏国禁ヲ示シテ聴サス、 英人数名銃ヲ提 へ上

吉村ハ鹿兒島ノ士ニシテ、 銃殺セシ英人ノ死骸ハ塩漬シテ鹿兒島ニ送リ、 目附職 役ト唱フ ヲ以テ在島 而

私領薩摩国川辺 艘漂来、 橋舟ヨリ異人七・八人程致上陸候ニ付 七島之内寶島沖二、七月八日白帆之

シテ又長崎奉行ノ実検ニ供シタリ、

其顚末左ノ如

無程本船へ乗戻り、 役人共差越渡来之次第相尋候処、 翌九日橋舟二艘ヨリ致上陸牛望 言語・文字不相通

之由手様致候ニ付、

不相成段手様ニテ相答候、

旗印

相分リ候ニ付、 等ハ見分ヶ兼候得共、 乗帰り、 無程又々橋舟三艘ヨリ多人数ノ異人乗来 薪・水・野菜類相与候処相受取本船 「エンゲレス」ト申言葉ノミ

外ニ二匹ヲ奪取リ、加之在番所ニ向ヒ鉄砲打掛ケ、其 上陸致シ諸々徘徊、 海辺ニ繋キ置候牛一匹 打殺シ

候ニ付、為目附役遣置候家来吉村九助ト申者鉄砲ヲ 時分本船ヨリハ石火矢繁ク打放シ候、 以テ異国人一人打留候処、其余之者共ハ不残本船 右次第及狼籍

朝迄ハ遠沖ニ帆影相見得候得共、其後何ッ方へ乗行 逃帰リ即刻出帆、 午未之方ニ向ヒ乗行キ、 同十一日

警固之者相添長崎へ送り越シ彼地奉行へ委曲申達候 警固為致置候、其外領内浦々島々等モ取締厳重申付 国元家老共申越候、此段御届申達候、 右打留候死骸ハ地方地あり通唱スへ差送候ニ付、 以上、

閏八月十一日年甲申

松平大隅守勇

処、

当島ヲ見掛ケ乗来リ申候、

然ル処七ツ時分ニテモ

物頭島津權五郎命 ト申者へ、人数召附ケ彼島へ差渡 キ候哉不相分候旨申来候、依之此後渡来モ難計候間

り、打留メタル異人カ提ヘタル処ノ小銃及弾薬籠等ハ、 村ナル者へ此功蹟ヲ表賞シ、 実検シ、用人喜入多門通 護シテ長崎ニ至リ事実ヲ具申 右ノ如ク死骸ハ塩漬シテ送リ来リシ故、 死骸実検ヲ受ケタリ埋葬地ニ埋メタリト言フ 古の大数実検ヲ受ケタリ同地稲佐唔心寺ト言ヘル外国人、古 禄幾千ヲ与へ役職昇等セ 鹿兒島ニ於テ

吉村ニ下与セラレタリ、

儀・難計御座候間、

木山尻ト申処へ相扣遠見番等手配

寶島在番届

吉村其他報告左ノ如シ、

覚

大船

但 艘

|船成趾先キ分兼申候鱸ヲ言ス 下白ヶ下トハ水際ヨリ下ヲ言フ 相見得、 テ大柱三本、外ニ白小帆柱三本、 上ノ方少シ黒ク 階船階船が 三重白帆

右へ当月八日昼時分、 テ旗印相見得不申候 寶島北方ノ沖へ相見得、

近ク相成候処、見馴不申船ニ御座候間、

御番所ヨリ西之方、足曳道ト申処ヨリ浜へ差越申候処、 右小船漕出候趾ニテ相見得不申、若モ夜中ニ如何様 在番出張趾ニテ、平田伊兵衞其外島ノ者共へ行逢、 処へ乗り付ヶ候段承申候間、 船一艘差遣シ、七人乗リニテ御番所ノ下、 御座候哉、当島西ノ方一里程隔リ乍帆掛ケ留リ、 御番所へ差越申候処、 前籠ト 則小 申 則 当

漸々

位

遠見番付置候

東ニテ中高ク黒キ帽子ヲカブリ候者両人、

頭取ノ者ト

皆々郡司

/名・横目等モ召列差越申候処、

白装

相見得挨拶仕候、

左候テ菓子出シ申候、外ノ者共支度

旅宿 **仕置、** 左候テ万一ノ儀モ有之候ハ、旅宿ヘシラセ候様相達、 申談遠見番等別段申付置、 へ罷帰申候、 御番所ノ様差越申候処、平田淸兵衞罷居申候間、 無程御番所へ差越申候処、 其節ハ夜入過ニテ御座候、 上原市兵

衞ニ モ 罷居申候、 何ソ相替事モ無御座旅宿へ罷帰居申

右小船乗付候節、 張リ申候由、 **処船漕出候由、** 牛貰度手様仕候由、 私ニハ遅ク承申候、 其折尚在番平田清兵衞・上原市兵衞出 同役松元次助、 然共牛ヲ呉侯儀 出張 島横目召列差越申候 ノ節ハ小船前籠 ハ難成相達候

同九日四ッ時分、 相分リ不申候、 申出候間、 島 ノ者共前籠へ遣申候処、 同役中ハ勿論、詰横目「名」吉村九助出 不審ヶ間敷者共トモ及見不申候段申出 小船二艘前籠へ漕キ付ケ申候段遠見 書付一通遣申候、 文字

相見得不申候

眼 ニゴリ髪ハイビ毛ニテ髭ソリ、 思々ニ相替申候、 併赤色勝ニ御座候、 中高キ帽子ニ袖小 何 ν モ 鼻鳥

胴着ボタン掛ニテ腰ヨリ下パツチト相見得申候、 付文字不通、 皮沓ニテ御座候、 汝カ生国ハ阿蘭陀カト書付見セ申候得共 人数十四人ニテ御座候、 遣シ候書 履物

通シ不申候、 「インギリス」ト申候、 旗印古物ニテ相分不申候、手様物語ノ内 阿蘭陀近クノ様「インギリ

ツ呉レト、無左候得ハ落命仕ト申様成ル仕形仕候、パ ス」「ヲランダ」ト相分申候、 左候テ牛ニ指ヲ差シー ッ

遺候間、牛ヲ呉レ候様ニト申様成ル手様仕候得共、 チ・鋏・小刀・通宝ノ金銀又ハ針時計類ヲ出シ是ヲ 4 可

テ過分呉候様手様仕候間、 ヲ与儀ハ難成、 沢山持合候ペシ本書誤が本二手様仕、 米・野菜可遣候ト申シ見セ候得共、 段々在合ノ品見合呉申候、 野菜ハ嬉敷体 米

間、 大間ト申所へ乗入候向ニ相見得候段遠見番ヨリ申出候 取申候間、皆々引取申候、 然ル処暇乞ト相見得、 直ニ同役ノ中九助村、 頭ヲ下ヶ手ヲ握リ都テ船 間モナク小船三艘、 島役召列差越申候処、 島後 ノ様引 折

射殺シ、 存、 浜辺高キ所ニモ遠見ノ様三・四人登居申候、 射殺シ候処へ走集リ、外ニ二匹捕へ、 体 御座候間其節打留可申申談、御番所城戸口へ相集候処、 御座候、 置申候間、 手分ヲ以テ浜辺ヲ走廻リ村ニ登リ来候体ニ相見得申候 此方へハ纔ニ鉄砲七八挺、鑓四五本、 向ヶ鉄砲数箇打申候、本船ニハ間モナク石火矢打申候、 方瀬原へ鉄砲打掛ヶ多クノ人数飛登リ、御番所ノ方へ 3 様運ヒ行キ申候、 御在番所東ノ方拾間程高キ所へ兼テ船見番小屋打 御番所ヨリハ難見分、 リ一町程東ノ方へ三人列立登リ、 私ニハ御番所間戸誤ノ 小高キ所ニ打登リ、 差付相対難仕、 右ノ小屋内ヨリ見廻申候、 船涯ヨ 村へ登り来り候ハ、小路ニテ リモ鉄砲数箇打掛ケ申候、 若シ村後口へ登来儀モ難計 打々鉄砲打諸方見廻申候[折力] 少シ明ヶ見申候処、 右三匹ノ牛ヲ船 拾人計ニテ右牛 繋キ置候牛一匹 外二用立候品無 何ソ村

> 村九助其外罷居、 九助村 一人打留候段為知申候、又一重下リ西ノ方へ吉 候得共、 上畠へ出申候処、 右ニ付西ノ方道ニ出申候処、 趾 処 二二人登来候得共右ニ鷩キ逃行候故、 処在番一人モ不相見得候段承申候間、 扣居候段承申候、 気遣無之ト存、 **箇**ハ私居所一間程高キ処三間程ノ後ノ藪へ落申候 番船水主次郎ト申者罷居候処、間近ク鉄砲一 走廻候故相分不申、然処前田孫市ト申者参リ、 御番所城戸ロニテー人打留候処、 小屋ヨリ西之方一重下リ畠へ出申候 浜辺近ク相見得候間、人数見届申越 右牛急ニ船へ乗セ付漕キ出 横目平田權之進へ行逢候 船涯為見届彼所 不知ト御番所 i 申候、 一箇打、

船中ヨリ鉄砲三箇打申候、本船ニハ石火矢打申候、

々引返シ御番所ノ様差越申候処、

浪荒ク難乗付相見得、

前ノ方へ乗廻リ申候ニ付、

皆

無程前籠

へ乗:

医 東 () () () () ()

二度目ニ差越候節、本船ハ七十人乗り候様成ル手様仕役所執務所ノへ出会仕候、右ノ通り一人打取候ニ付テハ、申候得共、木山越ニテ小船漕付候体相分不申候、郡司ョリ私ニハ拾間程西ノ方高キ所へ本船見届トシテ差越

相改申候処、鉄砲疵左右乳ノ間少シ右ノ方ニ上リ、

方脇ノ下ョリ七・八寸下リ背ノ方ニ射通申候、

夫レ

其間ニモ鉄砲打申候、

打留候死体見届ノ為メ列立差越

島中

ノ者共、

其外ノ者共召寄置申候、

夜明ヶ十二日弥

心仕候、 間 同十一日、 乗り来間切りが通語の候体ニ相見得申候、 出候、 同十日、 候筋、 候間、 安心ニテ引取申候、 見及申候間、 大島ノ方へ乗行申候、暮時分ニ相成候得ハ相見得不申、 申 等難計御座候間、 大木ニテ塞キ扣所等拵用心仕候得共、 候処、 走セ行キ、 皆々出 島中ノ者共、 右様度々相見得申候間、十一日夜迄ハ皆 遠見番ヨリ申出候得共、 此節人数相重乗来べク儀モ難計候間、 何レモ出会仕候処、 四ツ時分又々船相見得候段遠見番ヨリ申 船不相見得候段遠見番ョリ申出候ニ付、 船不相見得候段遠見番ヨリ 会仕候処、 無油断遠見申付、 大形三里程走出候節、 番船• 終夜出会仕居申侯、 然処八ツ時分亦々船相見得候段 九ツ時分道法拾里程乗掛引返シ 水主・遠島人ヲ云 五・六里程差隔島南 九助村並同役島役 風浪無構自由成ル 夜入漸々遠見相成 申出候間、 大島ノ方心差 無程夜入上陸 々出会仕、 迄召寄用 津口詰所 ジ方へ 引取 出 皆 船 こ 勿 候 申 ٢ 々 九助村 南蛮人死体 鉄砲 皮沓 小刀 帽子 早込一ッ 六匁位玉一ッ 三匁位玉一ッ パ 剌刀一刃 カ 一匁玉手銃玉一ツ 角ノトウラン一ツ アトラス ッ チー 一足 刃 頭 挺 ・ノ儀 脚 石

船不相見得候段申出候間皆々引取申候、

塩詰申付可置旨、兼テ被仰渡置候間

九助村 打留候者所持道具並着類等左ノ通御座候! 打留候死体ハ 塩詰仕置候、

五匁位玉一ツ

ッ

胴着 服

右品物ノ儀ハ、九助村方ヨリ差登セ申候、

異国人ヨリ遣シ候書附一

通此書付差上申候、

右ハ寶島へ此節異国船差越右之通御座候間、 此段御披

露申上候、已上、

寶島在番

申七月十三日 貴島助太郎

異国船掛

御用人衆

吉村九助家族へノ書翰

当月八日四ツ時分爰元西之方浜辺へ白帆之大船一艘見

得来相掛居、七ツ時分橋舟一艘、

御番所下前籠

ト中所

見及候へ共、返答不致候処、夫成ニテ本船へ為引取由候 為承候得共音語不相分、然共手様ヲ以テ牛ヲ望候様 水主七・八人位ニテ為参由ニテ、島役共差越生国

船等何カノ次第トモ承候へ共何モ不相分、 然処翌九日四ツ時分右同所へ船二艘、水主七・八人位 ニテ乗来候ニ付、 島中、 其外在番衆抔多人数出会、本 日本トカ申

> 事不相成段申聞ケ、野菜ナト差送呉侯テ早ク引取侯様 事ノミ相分リ、手前ハ「イキリス」ト申事計リ相分、 同所へ又々乗来リ直ニ鉄砲夥数打立、 申聞候処、当日八ツ時分船三艘ヲ仕立多人数乗付、 左候テ牛ヲ呉レ候様手様ヲ以テ再三申出候得共、 専御番所へ差向 遣ル

右

シ海辺野原之牛ヲ射殺シ、或ハ相捕へ及狼籍候得共、 シ、島中ヲ刦ス体ニ相見得、陸ニ上リ候人数ハ手分致 打掛候、又相掛居候本船之儀ハ、時々石火矢ヲ打鳴ラ

乱防スベキ勢ヒ相見得候付、御番所城戸口サルテロトハヘ

小島小人数ニテ心之儘防方不相成、自カラ村へ踏入致

差掛リ防キ方致シ候、

折柄右海賊三人銘々鉄砲ヲ持村

中へ踏入体見受候付、 モノト相見得、 緋羅紗羽織着候モノ一人、三四間計 拙者ニモ鉄砲ニテ、 右頭取立候

所ニテ打留候処、 逃去候形ニ相見得、 跡人数ノ内鉄砲打掛海辺同列 右始終乱妨仕候故中々腹ヲスヘカ ブカ

大概 プ成行申進候、 以上、 ネ候、

甚不快千万之儀共有之候得共筆紙二難申尽候、

申七月

吉村九助

: 五郎二男、生年拾八歳、 右一人自分依願渡海

掛橋桑次郎

足軽三拾人

御兵具所肝煎三人

儀被相尋候処着無之候付、夜白被罷帰、 交代ニテ被罷帰、八月七日山川津へ着ニテ飛舟着ノ 着無之、然処、古在番貴島助右衞門殿・松元次助殿 露被申上候処、海上二百里内外ノ海路別テノ荒浪故 異国船差越及騒動敵一人打留候成行飛舟ヲ以テ御披 別段渡海被仰付被詰居候処、文政七甲申七月八日、 寶島始末記ニ曰ク、七島之内寶島在番之儀ハ一ヶ年 詰ニテ交代被仰付、横目吉村九助儀ハ、御用有之 同八日鹿兒

> 鉄砲 荷方船 五拾挺 四艘

小早船

四

艘

鑓

石火矢 二拾本

塩硝 千五百斤

弓 二拾挺

火縄・矢・玉過分

楯之板

則御手当有之、翌九

味噌・塩過分、 樽ニ入付ケ

白米 薪過分

日左之通被仰付候、

物頭

御番医師

谷

村 巢元 齊藤助五郎 島津權五郎兼

御兵具所書役

島へ着直ニ御披露被申上候処、

山草履 五拾石

三百石 千足、其外入用之品々略ス

真米 物頭兵具之儀ハ、兼テ御手当有之候通、都テ供道具 右ハ御当地米蔵ヨリ積入、米三百石ハ山川両御蔵 異国方御手当御用心米之内ョリ積入有之候、

テ自分物

— 155 —

書役 相成り、 小早船・船頭・水主之儀ハ、 医師・肝煮・足軽着用之鎧御兵具方 不足人数ハ兼テ御手当之通上下町ョ 御舟手ョ 3 ・リ差出 リチ当 IJ 出 サ

荷方船之儀ハ、 ス、 浦船前之濱へ廻船之内ヨリ、 船頭

主慥成者御船奉行ヨリ吟味ニテ御用被申付候、 荷方船二艘ハ、 前之濱廻船之内ョ IJ 直 = 御用船

右 八、請持之御役場町奉行 被申付、二艘八於山川被申付候、 御兵具方・ 御船奉行

三奉行・御舂屋ヨリ云々、

鑓 端下タ会所立宿、 御殿云フョリ大將島津殿佐五郎 朝鮮御渡海ノ節御持セノ金之唐団扇ナリ、 右ハ、申八月九日兼テ御手当ノ通被仰渡、 野羽織・野袴、 上下七拾二人小早船四艘へ乗付、 足軽ハ野羽織・ ハ馬上ニテ繰出、 股引ニテ、下町津 翌々十一日 肝煎役ハ 纏 + 手 ハ

但 朝鮮征伐 琉球征討以後初テノ ,珍事ニテ、 武器

日晩山川へ向ヶ出帆ナリ、

不

及申諸品々向

マヨ

リ持運、兵粮ハ米蔵ヨリ繰出シ、

船

下馬先城下ニョリ津畑迄見物人群集致候

四艘ノ内二艘相届候処、 小島故陸宿無之、 右ハ寶島渡海惣人数水夫迄二百八拾余人ニ相及候処、 足軽抔ハ舟中栖居之由候、 港無之一里計リ沖へ相掛り、 兵粮積船

有之候テハ兵粮難続三拾余日滞在ニテ、 余日滯在為有之由候得共、其後異舟不相見得長々滯島 粮米致卸方、 本舟へ直ニ大島へ相迦候由、寶島へ三拾[※ヵ] 九月中旬惣人

沖中風波強ク、命カラ~~ニテ十四・五日ニシテ渡着、 数引取帰帆有之候、然処島津權五郎供舟一艘着無之於

異国人死体受取方トシテ、御兵具所肝煎一人・足軽五 尤兵粮積舟二艘ハ今ニ行衛不相分候、吉村九助打留候

日鹿府へ着ニテ、 舟取仕建寶島へ被差遣、 異国船御手当掛御用人喜入多門通 九月初山川へ入津、 同六 頭

役ニテ、 領ニテ、 其外唐船改役·御兵具所肝煎 同八日鹿府出立、長崎奉行所へ被送候 足軽多人数字

船漂来橋舟ヨリ多人数致上陸、 吉村九助事、 寶島へ横目勤ニテ渡海候処、「イギリス」 飼牛二・三匹盗取り本

へ乗せ、 猶又方々及狼籍候付、 御番所へ向キ参候ヲ 其後助之丞ニハ働ヨ

p

シキ段申出相成候処、

種子島

太と三・四間汁肓之奏時、九功鉄砲ヲ以テ、「イキリ由、「イキリス」人三人共鉄砲ヲ持チソロソロ参候、哉不相知、右小坂上リロヨリ門柱迄ハ凡九間計有之候見テ、寶島郡司平田平六一人残リ、外ハ何方へ逃去候

ス」人之左ノ乳之上ヲ躵被射候処直ニ倒レ、外二人ハ依之三・四間計有之候時、九助鉄砲ヲ以テ、「イキリ

乗本船へ乗付致出帆候由、其折遠島人タルホサイ本田助之丞声ヲ上ケ逃ケ去リ、外「イキリス」人ハ一所ニ小舟ニ

申老人、屈竟ノ場所へ出張働有之候、

外土人等ハー

ツ時分ノ由、九助被打候鉄砲音一ツ平六聞候由、本田聞不宜、「イキリス」人被打留候、七月九日八ツ半七人モ何方へ居候モ不相知、如何様山々へ隠居候哉ト風

夜雲晴月サヤカナレハ、九助当夜之詠歌ニ、生年五拾都合鉄砲三挺鳴候由、二挺ハ「イキリス」人之由、其

助之丞ニハ少シ隔リ被聞候処、ダン~~ト二ツ鳴り、

右御格之通可申渡候

十月

内藏新納

雲晴て見るめ涼しき夏の夜の

七歳

月の霜おく浜の真砂地

安居候様被仰渡候事云々、以下略ス、島替燕ッル島変彼仰付、新宅ヲ為作丁寧ニモテナシ始終致

吉村ハ右之功ニ依リテ、同年十月十五日左之通被仰付安居候様被仰渡候事云々、以下略ス、

候、

一横目勤是迄之通

一郡奉行

一御役料銀二枚

吉村九助

候付賞祠」思召ヲ以テ、右之通役料銀被下置候、働宜敷奇特之至候、尤 公儀ヨリモ御沙汰ノ儀モ有之右ハ多年当役相勤、其上先達テ寶島へ異国船漂来候節、

如シ、 又褒賞トシテ切米五拾俵ヲ終身下与セラレタリ、左ノ

御切米弐拾俵

御小姓与

吉村平吉

右 ハ養父九助事、 被遺置候処、 異国船漂来段々及狼籍候節手配彼是 去 ル申年七島之内寶島へ為見聞役 察監

仙

旁以乍死後モ難被捨置被 達テ致病死候、 行届候為御褒美、 其場之時宜相当之働故、 其身一世御米五拾俵被下置候処、 思召上候、 依之子孫 島中危難 = 至リ = 逢 先

右御格之通可申渡候、

永続右之通被下置候

九月廿 五日 但 馬川連上

天保五年甲午九月廿五日難有被仰付置、

其後

右之通、

九助卜改名被仰付候間 此段申上候、以上、

七月 吉村九助

以上、 寶島ニ於テ英人乱妨ノ始末ノ概略ナリ

齊興公御夫人賢章院殿略伝 (因州池田家

をや治道朝臣に配せんと思したりしが相模守宗泰ノ室紀伊大納言宗直ノ女 色備ハらせ賢媛のきこえありしに 院伊達夫人ハ、仙台中將重村朝臣ハ従四位侍従相模守治道ノ室 より、) 備前 桂香院へ従四位侍従 息女なり、 の御家と

ことの母君、

やごとなき御すぢなれバ、今世にまさず

家をもこしらへよと信濃守政直と伊達能登守村賢とに家をもこしらへよと信濃守へ備前支封他田信濃守伊達能登守へ仙台支封伊予吉 なしたるうへならてハと、まず備前家をなだめ、 れしにより世々交をたゝらるゝ事なれば、 台とハ、 繼政朝臣の夫人伊達氏故ありて、 両家を和睦 大帰 봔 5

ふに、齊邦朝臣いまだ銀之進殿とて因幡におはしまし 銀之進へ従四位侍従相模守治道ノ長男松平薩摩 をバ行ハれし御入輿ありて、 程なく身重くならせたも 頼ミありて、田藩主

此ふたりして取扱ひ相和ししうへ、

けるが、わきばらなればもしこたびの子男ならハよつ守齊宣朝臣〃女操姫許線〃~雖未幾齊邦逝去〃故『入興ナ》 ぎとなるべし、 銀之進こそいとをしけれとて観世音に

日々普門品を繰返し読み給へるが、果して女の子生れ れ腹の子男ならべいかにもして女に変して給 深く祈誓し、変成男子といふ事もあると聞け ハれと、

だて給ふにより、 く似させ給ひ、仁孝の御聞ハとくより廃し(発カ) 給ひぬ、 母轉心院殿いとをしく思ひ給ふて、轉心院へ治道ノ継室紀伊中納言重倫ノ女 とゝのハずして世をさり給ふ、 御名をいよ子と付け給ひし、 養ひの名をも給へれと乞給へど、 Ļ١ よ子は才色母君によ 生みのごとくに 御産の後御心 給ひ ĸQ, ま 継 地

--- 158 --

あは

名をつがせ給ふがごとくなるハ奇の奇とやいはん、 き御名をつき伊豫守と名乗らせ給ひ、自から母君の御 のこ子にてましまさ、、、因幡の御家をつぎ給ふべきに、(備前)従四位少将上総介齊政朝臣、養子従四位少将伊予守ニ叙任ス 庫頭齊彬朝臣、次は備前家の今の主なり、御母君のを青頭齊彬朝臣、次は備前家の今の主なり、御母君のを をうなにて、他に嫁し給ひ、其御子つひに池田氏にか に嫁し給ひ、男ふたり、女ふたりうミ給ふ、長男ハ兵 の軽重かあるへきそと仰しとなり、薩摩中將齊興朝臣 、らせ、大宗を嗣賜ひたるハ奇特とやいはん、又ふる 右思出草鈔録因幡支封松平縫殿頭定常、 天保壬寅子辰冬所著 号冠山、

とて吾か子にせんハ本意なし、養ひの名ハなくとも何

(表紙)

齊 興公史料

市來四 自 天保 同 保 六二

(扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料 (紙数八九 年年

新曆頒行令

朝鮮人参ニ関スル令

年貢米穀代納ニ関ス

ル

令

諸国廻米船帆印ニ関スル令 諸国産物売買ニ関スル 令

水戸烈公詠草

琉球王謝恩使豐見城王子病死届書

琉球讃儀官ニ関スル届書

御徒方万年記

目録

松前志摩守届書

鼠小僧捕縛書付

遊芸身売ニ関スル取締令 (高田屋金兵衞 件

弐朱判金吹上令 灰吹銀令

一ツ橋御簾中・英姫詠草〕

二九七 松前志摩守届書

私領分東蝦夷地アツケシ場所ノ内ウラヤコタント申所

出立、翌廿一日午上刻ウラヤコタン江到着見分仕候処、 ツケシ勤番所エ届出候ニ付、早速為見届仝所勤番之者 、、去月廿日申下刻異国船壱艘相見へ候趣、 夷人共ア

迄ハ、陸通凡十里余東之方ニテ沖合凡一里半余モ隔!

一千石積位之船ニテ帆柱三本相見へ候、尤ウラヤコタ

異国船ニ相違無御座候、尤アツケシ勤番所ヨリ右場所

迄在所役人共ヨリ申越候、 月朔日昼指立候段、 勤 出 番 崎 先此段御届申上候、 ハ陸通 者共ヨリ在所表へ申越候ニ付、 = 御座候間上陸之儀モ 今十三日夕七ッ半時私旅中 以上、 猶追々申越次第可申上候得 難計 番手· 趣、 粕壁宿 人数当 アツ

三月十三日

松前志摩守

順ニ 仕不残帆ヲ巻揚出帆之様子ニテ**、**澗日乗廻シ候処、 [ママ] 昨十三日旅中ヨリ 勤 江出張仕相固メ罷在候処、 無之哉、 番所江差置候家来共一統、去月廿二日ウラヤ 又々帆ヲ下ケ元ノ所へ澗掛リ仕、 御届申上候異国船之儀三付、 同日未下刻過異国船帆調 夫 アツ 3 コ 風 IJ タ ケ

候間、 橋船ニテ冠物ヲ取、 候ニ付、 度々小筒之音声相聞、 所ウラヤ リ半里程隔ホ 人数共山上へ相揃大小之鉄砲相放候処、 夫々手配仕候内、 コ タン ^ p 乗 <u></u> ነ 廻シ 如何之訳ニ御座候哉、 申 同廿四日未中刻過ウラヤコ 磯辺ョ 所へ 又々橋船へ乗候テ人数出張 橋船 リ二町 一艘ニテ異人上陸 程 相隔鉄砲打掛 右冠物ヲ振 異国人 タン 在

3

ニテ大筒一発相聞へ候得共、[船脱カ] 引取申! 廻シ 鉄砲相放候儀猶予仕候処、 候 |候 間 付、 若引取之相図ニ 人数共ハ備立仕扣居候 モ 可有之哉ト心付、 異国人共鉄砲相止メ親船 闇夜之儀ニ御座候間様子 処、 西下刻頃

相分リ兼、 向大小共鉄砲之音相聞不申、 人数共厳重ニ相固メ罷在候処、 同廿五日巳中刻過出帆 夫限リニ

テ

番手人数翌三日朝仕立仕候旨、 日同刻付ノ注進状去二日丑刻私在所へ申越候ニ付、 不仕侯旨、 ウラヤコタンへ出張仕居候家来共 今昼九時私旅中栗橋宿 ∄ リ、 同

三月十四日

迄在所役人共ヨリ申越候ニ

付

此段御届申上候、以上、 松前志摩守

御座候間、 様子ニ付、 出崎ヲ目当ニ 共橋船四艘ニテ乗出、 廿五日巳中刻頃滯船仕 去ル十三日・ 眼下ニ被打払候テハ防方モ六ケ敷心得、 勤番人数出張所之儀ハ谷間 漕参り、 十四日両度御届申上候異国船之儀、 候処、 夫ョ ウラヤ IJ 上陸 コタン出張所漁小屋 同 廿六日未下刻頃異国 仕 出 崎 ノ小高 山 キ所 相 去月 登候 備 テ IJ

得共、 相分、 ブト ヤ 申所へ人数一 注進ノモノ差置ウラヤコタンヨリ西ノ方ノユリベツト 数モ有之体相見へ候ニ付、 右品取揚船中之樣子猶又勤番之者吟味仕候処、 候処、右蝦夷人之例ニテ何カ相認、 居候内、 親船へ罷帰候由、 懐へ入、橋船ニテホロトト申所へ上陸為仕、 人へ相尋候得共、 テ無体ニ橋船へ乗セ親船へ召連、 相違無御座候、 コタン漁小屋並キイタツフト申放レ島漁小屋焼払候 申場所ニテ、 異国人共橋船ニテ不残親船江引取候節、 右蝦夷人一切食用不仕候処、 勿論兵粮運送之儀等不都合之場所ニ御座候間、 腰ニ提居候刃物ヲ異国人刃物取替、 同引揚相固罷在候処、 且勤番ノ小者利三吉ト申者、 右蝦夷人刃物並書付相添申出候付、 言語相分り兼候付、 イコシャバト申蝦夷人ヲ、 夫々手配仕候内及暮様子不 夜中蝦夷人寝転ビ 翌廿八日蝦夷人ノ 食物並酒等差出候 同廿七日朝、 一言モ相答不申 異国両人 異国人ハ 何 アシヤラ 廿六日 !カ蝦夷 前文之 ウラ

> 付 刻附、 下ヶ不申候、 置候旨、 混雑之節ョリ相見不申候処、 番手、二番手人数共、 同日辰中刻迄追々在所表へ相達候付、 同四日巳刻、 合之家来共ヨリ三月廿七日巳上刻附、 ノ中刻迄滞船仕居候得共、 同日酉ノ上刻附、三月朔日午之中刻附之注進状、 是又右イコシャハ申達候、 同六日申刻、 鉄砲之音モ無之唯滞船仕候趣、 道中差急キ右場所迄可相越旨申 同八日卯中刻、 去月晦日ヨリ一向橋船モ 異国人トモ取押親船 異国船三月朔日午 先達テ差立候 同廿九日辰ノ下 同日辰刻、 右場所詰 此節 へ指 相

相登、

双方半時計鉄砲打合罷在候処、

異国人後詰之人

場繰替相備候処、

追々異国人共凡五拾人程出崎之山

出候両品相添、此段御届申上候、以上、 私旅中野州鍋懸宿迄申越候付、右蝦夷人イコシヤバ差 之一同ニ罷成候段、在所家来共ヨリ今十六日夜八半時、 注進之趣其都度々々飛札ヲ以可申越之処、渡海順風無 在所表出立為仕、猶後詰人数之儀モ手配仕置候由、尤 付、并東蝦夷地場所ニ勤番之者共例年ヨリ早メ、此節

三月十六日 松前志摩守

ル十三日ヨリ追々御届申上候東蝦夷地アツケシ持場

去

見不申候得共、猶又最寄之場所々々へ万一澗掛リ等可[ママ] ゥ 当月三・四日両日之注進状、仝十日ヨリ十二日迄ニ追 追々御届申上候異国船、去ル四日巳下刻戌亥之風ニテ、 三吉へ相渡候品々相添、 郡桑折宿迄在所家来共ヨリ申越候ニ付、異国人ヨ 亥ノ風ニテ、ウラヤコタン澗口ヨリ帆ヲ巻揚卯辰ノ方 江罷帰、右品々差出候由、尤異国船へ同四日已下刻戌 夷船ニテウラヤコタン江漕寄、 利三吉首へ掛、異国人共親船へ罷帰候ニ付、 ツブ浜中へ上陸為仕山道ノ入口迄見送、別紙ノ品々右 月廿六日異国人共親船へ連参候小者利三吉ヲ、 之内、ウラヤコタンへ相見候異国船、去ル朔日以来滞 船仕候処、 々在所表へ相達候段、仝廿日夕七半時私旅中奥州伊達 へ飆去、其後帆影モ相見不申候趣、 ラヤコタン澗口ヨリ卯辰ノ方へ飆去、其後帆影モ相 三月廿日 同三日八時比異国船ョリ橋船壱艘ニテ、 此段御届申上候、以上、 暮六時過ノコヘリベツ 松前志摩守 同所詰合之者 利三吉蝦 キイタ IJ 3 峲 IJ 去 青小玉 草之根 草之実 書付 右之通御座候 菓子様之物 銭様之物 候様申遣候ニ付、 飛脚ヲ以申送候、尤二番手人数之儀ハ、在所表へ引取 為仕人数等相增差置候樣、 為仕、来春迄越年申付、外勤番之場所へモ此節交代不 番所へ差置、当秋ニ相成猶又物頭始メ人数共差遣交代 仕哉モ難計不仕安心候ニ付、一番手人数ハアツケシ動 三月廿日 三月廿日 覚 \equiv 此段申上置候、以上、 私旅中桑折宿

松前志摩守

ョリ在所表

木七兵衞へ引渡、 濱町屋敷門前ニテ取之趣 ノョ

二九八 鼠小僧捕縛書付

天保三辰年夏之頃鼠小僧卜申盗賊被召捕候書付之写

無宿

次郎太夫事

金九両

盗取候金子大概左之通

鼠小僧名

次郎太夫

眞田伊豆守

一弐両弐分

土井大炊頭

之者方々弟子奉公ニ参り居り、十六歳之節親元へ帰り、 新和泉町嘉兵衞店芝居出方稼致シ侯貞次郎悴ニテ、 シ 候処、是迄盗候事隠シ、 リ屋鋪方三十間へ忍入盗賊致シ、已前土屋相模守屋敷 夫ヨリ同職之モノ方へ雇ニ参リ、所々武家方へ鳶之者 人儀四年已前丑年病死致シ、次郎吉事幼年ヨリ木具職 入、右屋敷ニテ被捕、 候由、依之入墨之上追放ニ相成候、 ナリ、部屋入鳶ノ者代リ等致シ、十五年已前寅年ョ 天保三辰年五月四日夜、 同歳以前所々武家へ盗ニ入、金・銀盗取候事夥敷 筒井伊賀守掛リニテ吟味有之 相模守ノミト申並博変数度致 濱町松平宮内少輔於屋鋪 入墨次郎吉 後入墨ヲ消シ紛 同 三両 弐両 三両弐分 四拾両 七両 三拾八両 七两 廿 **弐百両 弐拾弐両** 八十両余 百三十両 歯 松平右京亮 京極長門守 松平周防守 永井肥前守 松平土佐守 井上河内守 水 有馬玄蕃頭 水野越前守 加藤遠江守 水野出羽守 上杉彈正大弼 戸 殿 一廿五両が村屋敷一共不違入ヨシが一共不違入ヨシが 七拾 八拾両 七両 弐拾 拾五両 四拾両 拾七両 廿両 百両 五両 百五拾 両 両 両 松平佐渡守 松平大膳太夫 森 松平伊豫守 細川越中守 石川主殿頭 松浦肥前 松平伊豆 松平陸奥守 松平肥前守 加藤能登守 西尾隱岐守 信濃守

召捕

三相成、

町奉行榊原主計頭へ御届、

同組同心大谷

拾両

青山大膳亮

松平越中守

Λπ	~	04															
一拾両	一六拾両	一五両	一百六拾両	一五両	一弐両	一九両	一拾五両	一八拾両	一三拾両	一百両	一壱両弐分	一三拾五両	一五両	一拾七両	一三拾両	一四百廿両	一百八拾両新
六鄕兵庫頭	酒井左衞門尉	松平大隅守	林 肥後守	阿部山城守	新庄主殿頭	堀 内藏頭	毛利甲斐守	牧野越中守	稻葉備中守	酒井修理大夫	牧野備前守	小笠原佐渡守	稻葉丹後守	松平讚岐守	藤堂和泉守	阿部能登守	松平肥前守
一廿弐両	一拾八両	一三拾両・	一八拾両	一三両	一五両	一廿両	一拾弐両	一百三拾七	一拾両	一拾五両	一百三拾七	一五拾両	一拾両弐分	一弐両	一四拾弐両	一	一廿両
前田大和守	松平甲斐守	小笠原大膳大夫	松平和泉守	松平采女正	松平彈正少弼	石川中務少輔	酒井石見守	拾七両分部左京亮	本多豐前守	榊原式部大輔	拾七両土井金三郎	板倉甲斐守	大久保佐渡守	酒井雅樂頭	溝口伯耆守	戸田采女正	南部信濃守
												物人	一四拾両	一八両	一四拾両	一廿両	一六拾三両
											候金高不 石拾八両	惣メ金三千四百五拾っ	仁賀保孫九郎	小堀織部	田安殿	一ッ橋殿	松平安藝守
内藤丹:	保科彈	木下宮内少輔	松平左京大夫	土屋相	松平出	松平備・	松平大	戸田因	津軽越	井伊掃		八両余	一八拾両	一拾両	一三両	一拾五両	一六両
波守	正忠	少輔	大夫	模守	羽守	中守	學頭	幡守	中守	部頭	之通、		平岡石見守	奥山主税助	增山河内守	松平大和守	松平左兵衞

相 馬 長 門 守

町役人共心掛モ薄故、

右体及不届候モノモ不相止哉ニ

之由、 候金高不相分、其外ハ銘々屋敷ニテ印荒増右之通 メ八拾五軒、右之通調候処、右名前之屋敷ニ盗取

二九九 遊芸身売ニ関スル取締令

天保二卯年十二月

町役人共儀モ触之趣能々相心得、娘妹無拠芸一ト通稼

日懸心頭心付候得ハ、右様之儀モ有之間敷儀故、畢竟 迄夫々咎申付候、右ハ其家主ハ不及申名主・地主共平 町へ為取遣シ、抱宿又ハ料理茶屋・船宿等始町役人共 甚以不届ニ付、此度追々召捕吟味之上、当人共ハ吉原 此節別テ致増長候趣ニ相聞、 可申立候、外ョリ於相聞ハ其名主始可為越度候 候ハ、名主ニ不限地主又ハ町役人成共壱人立奉行所へ 其外入念心付紛敷者無之様可致候、万一不相用者有之 為致候モノニモ、其稼ニテ壱人ヲ限リ可申候間、人別 右之趣文政七申年ニモ触置候処、右体之類兎角不相止、 市中一体之風俗ニモ抱リ

> 町役人共ユルカセニ致置候趣於有之ハ、名主・家主役 右之趣町中不洩様入念可相触候、 儀取放可申候条、 原町之者共ニテモ心カケ如何敷義及見聞次第致封訴筈 不相用者有之候ハ、早速月番之番所へ可申立候、尤吉 立申付、組合・家主共相互ニ吟味致シ合、名主ハ勿論 人別其外相改聊ニテモイフカシク存候モノハ、早々店 相聞、是又不埓之事候、自今家主ハ店々軒別ニ厚心付、 二候間、得其意弥以前々相触候趣相守候樣精々可申付 地主共義モ地面ニ相離レ侯儀ヲ弁へ、常々遂鑿穿万一 ハ、当人・宿抱主等厳格之御仕置申付候ハ勿論之義、 以後吉原町ヨリ触候欤外ヨリ相顕吟味ニ及ヒ候上 其旨一同相心得へキモノナリ、

十二月

不及申借家・店借裏々迄不洩様可相触候、

右之通従町御奉行所被仰渡候間急度相守、

町中家持へ

役所

町年寄

十二月

卡

=00 〔高田屋金兵衞一 件

天保三年辰七月廿五

箱館大町髙田屋金兵衞 一件

泉守殿へ御内覧之上差出候処、 御請取相成候事、

松前志摩守家来用人鈴木百度兵衞ヲ以、

御用番松平和

私領分東在箱館六ケ場所之内、トノホケト申所沖合へ、 候ニ付、 人同所へ上陸仕候趣、 日朝五時頃異国船一艘膼寄、橋船ニテ異国人共六 早速同所ョリ人数差出候段私居所へ申趣、 箱館へ差置候家来共へ注進有之 直

日私居所へ相達候間、 船受取候始末、 共元船へ乗移飆去、 トトホケ村役之者共相糺侯書面今廿五 追々帆形相見不申候ニ付、右異国 右糺書相添此度御届申上候、 以

後詰ノ人数手配仕候処、

同日九時頃右三陸ノ異国人

七月廿五日

土方出雲守、同八月八日評定所一座一件書、

箱館大町

松前志摩守

へ引取候段、

御用番水野出羽守殿へ御届申上候、

吟味可申旨御書付御添、 件吟味仕候之趣申上候書付類品々相添、 家持金兵衞雇船乗組之者共、於沖合異国船へ出会候 松平周防守殿直二大炊頭・主 座二 テ改致

計頭・隼人正へ渡之、

来ル八日、一座掛箱館代町高田屋金兵衞一件吟味ニ付、

隼人正立合相伺候処、 評定所臨時寄合仕候間、 何之通可仕旨御同人被仰聞候、 周防守殿へ大炊頭 ・主計頭

但

右金兵衞・重藏・壽藏大切成罪人ニ付、 九月御預ヶ相成、 御目付牧野中務へモ為心得達之、 随分イタハリ介抱可致旨、尤別ニ囲 柳生但馬

ニ入置可申事

松前志摩守へ御預ヶ可被

今暁土井大炊頭御役宅へ家来呼出、 家来之者へ被成御預候旨相達候ニ付、 仰付処、引合有之ニ付、柳生へハ縁者故ナリト云フ、 別紙名前之者共 途中無異儀居屋

柳生但馬守使者

-- 167 --

守

柳生喜十郎

預ヶ返之事、

松前志摩守領分

箱館大町

家持

金兵衞

右金兵衞雇船

大坂安堂寺町五丁目

平兵衞船

重藏

同所助右衞門橋本詰

右金兵衞遠国住居二付代判

治兵衞方主入

金藏事

德兵衞

右之者儀出羽守殿へ伺之上相預候間、其旨可被心

寄合池田中務へ高三千石高田金兵衞並重藏・徳兵衞共御

一松前住居家持金兵衞落着、松平阿波守へ御預ケニテ 江戸十里四方追放ナリ、妻子へハ船並船具御取上ケ

定成ハ、六十余国何方ニ住居アリテモ勝手次第成へ 家財ハ被下之由、惣十里四方ニテモ追放ハ本国構御

キニ、此者ニ限リ本国、淡路国六名村故、本国へ御

預ケト成事難有迷惑成ヘシ、是ハ万一手放シ差置候

得ハ、何方ヨリ乗船シ異国へ渡行センモ難計、左ア ル時ハ殊之外大事ニ及ヘキヨシニヤ、近年長崎通詞

五・六人岩城伊豫守へ御預ヶ被成シ時モ遠島ニ難被

成故、御預之旨御達有之也、憚追放ニテ大名へ御預

成行シ事成ハ、又一万石程ノ御加増ニ当ルナリト云 ケトハ珍敷御政道ト云、是皆松前家上首尾故存分ニ

々、アヘトロフへ罷越居、金兵衞家来三人ハ可呼旨

松前へ御達有之トナリ、

御仕置申渡書付之次第、

松前志摩守領分

箱館大町

様之儀

ト相心得、

場所

*

p

イツ之外壱ヶ所へ可差送、

家持

候ヲ、 船長 罷在、 代ニ相成候テモ不申立、 候筈申合置候オモムキ、 在持船度々相廻シ候間、沖合ニテ出逢候共乱妨不致様 船 罷越追テ帰国サセ候砌、 並水主金藏・徳兵衞其外者共、 右之者義、 へモ相渡置候処、 ^ } 魯西亞船ニテ見合候ハ、彼船ニテハ赤キ布相立 同 ロツンノイチへ申談、 人ニ 養父嘉兵衞存生中ョリ引続蝦夷地之内請 相続中存付ヲ以、 先年蝦夷地沖合ニオキテ、 其上徳兵衞ハ嘉兵衞手元ニ差 嘉兵衞ヨリ及承候ニ付、 嘉兵衞義、 向後へ高印之小幟相立 魯西亞船二被捕彼国 ^ 高印之小幟手船並 蝦夷地之内請負罷 嘉兵衞 此者 雇 負

> 共ト幟合セ約定致シ候次第、并船々へ幟渡置候儀 出候節、 寺町五丁目平兵衞、 乗抜候由相聞、 為致候段、 右幟相渡候否尋有之候テモ、 沖合ニテ魯西亞船ニ出 領主役場ヨリ呼出有之嘉市ヲ代ニ 沖船頭重藏其外之者共相 逢 **(** 嘉兵衞彼国 右幟 ラ立. 雇積入出 有体 [ノ者

差

申立候テハ不審可請候間、

右様之義ハ申立間鋪旨嘉市

門橋東詰西笹町ヲモ構、 淡州都志本村領主松平阿波守領分之外、 之船其外小幟共取上ケ、 申含、 交易等致シ候義ハ無之候共右始末不届ニ付、 剰奉行所吟味ニ相成候テモ同様押隠罷在候始 江戸十里四方追放申付、 攝州兵庫西出町並大坂助右衞 猥ュ他出 [致間 生国 所

敷旨申渡、 右家来へ引渡之、

置候内

ハ無構帰郷等相願候ハ、

領主・

領内之外猥二他

出不相成旨、

先年箱館役所ニテ申渡有之候上ハ、淡州

都志本村へ嘉兵衞立戻候砌、

德兵衞身分取計其筋

申

立差図可請処、

右金兵衞養子

嘉市

此者召仕候ハ、嘉兵衞手元ニ差置候 大坂表持店等へ差遣、 米・塩等大坂安堂 殊更船請負 入致出帆候処、 其方義、蝦夷地之内養父金兵衞請負場所 大坂安堂寺町五丁目平兵衞船沖船頭重藏其外之者共積 領主役場ヨリ金兵衞呼出シ有之、 へ可相廻米塩

相成罷出候節、

右船沖合ニオヰテ魯西亞船ニ出

成、

同人手船觀世丸嘉兵衞其外之者共一同乗組、

蝦夷

大坂助右衞門橋東詰西笹町

助右衞門橋東詰へモ立入間鋪候、

治兵衞方立入
金兵衞遠国住居ニ付代判

金兵衞事

德兵衞

其方儀、箱館大町金兵衞養父嘉兵衞存生中抱水主ニ相

Œ

之外猥ニ致他出間鋪候、右同人家来へ引渡之、先年箱館役所ニテ申渡候通、領主松平伊豫守領内

大坂安堂寺五丁目

平兵衞船沖船頭

其方共義、 箱館大町家持金兵衞雇船へ乗組、

煩

難乗抜候段、

重藏ハ別テ不埓ニ付一同手鎖申付ル、

置候幟抔ト申成、幟合致シ候義等無之、右小幟ヲ立無 幟相渡候儀無之旨申立引違候テハ如何ト存、久八取扱 所ニテ糺之節、金兵衞代ニ罷在侯同人養子嘉市、

奉行所吟味ニ相成侯テモ同様申紛罷在侯

仁太郎

虎

福

松

清右衞門

ヲ以取扱候次第申立、右ヲ其余ノ者共如何之儀ト相心

乍存重藏ト申ロヲ合罷在、

其上同人へ追テ松前役

右小

藏

好 松

蝦夷地之

表役 重 壽 藏 藏

知工

或

親父役

利

助

水主

伊三郎

藏

内 ホ

p イツミネモ

ㅁ

テ魯西亞船弐艘ニ出逢候砌、

へ向出帆致シ、

重藏義ハ金兵衞養父嘉兵 シ ヤマニ沖合ニ於

相開キ無難着船致シ候得共、右之次第相届吟味ニ相成 船中櫃之内へ入置候へ高印小幟取出候テ相立候処、 衞ヨリ元船頭久八請取、金兵衞代ニ相成候テモ、引続 魯西亞船ニテモ赤キ布ヲ帆桁ト覚敷処へ相立、両船共

り再応糺請候節、右体一同見請候儀ハ押隠シ、

候テハ、手間取ヘシト存不申立、ネモロ会所詰役人中

病気、清右衞門外五人ハ前広ノ働ニテ相休居、

外四人魯西亞船見請、右小幟ヲ建乗抜候趣、重藏存付

— 171 —

大
坂
安
治
Ш
南
弐
1
目

彌助借地

平三郎事

彥右衞門

其方儀不埓之筋モ無之構無之段申渡

右於評定所三奉行立合、御目付大澤主馬立合、脇坂中

一同証文申付ル、 務大輔申渡之、

左衞門·松平志摩守家来遠藤又左衞門右之通申渡候間 同得其意候銘々主人へ可申聞、尤金兵衞ハ權右衞門

松平伊豫守家来山内權右衞門·松平阿波守家来廣岡五

へ、嘉市ハ追テ吟味筋可有之候間、又左衞門へ夫々引

心附、病死等致ナカラ其段申聞候様是又主人へ可申聞 渡遣スニ付、五左衞門ハ金兵衞身分不取締之儀無之様

但証文申付ル

天保四巳二月廿三日 金兵衞所持之船、箱館大町ニテ入札申付、落札之者へ

相払代金左之通、

金三百拾両三朱 壱貫百拾壱文

重孝丸船具共

九百三拾一石八斗七升余積

金弐百九十七両壱朱 壱貫三百拾壱文 九百十七石八斗八升余積 順通丸右同断

金弐百三拾九両壱朱 廣吉丸右同断

壱貫五百拾六文

金四百拾五両弐分 八百八十八石一斗四升余積 大黑丸同断

千三百五十石六斗五升積 浮悦丸同断

千三百五十石六斗五升積

金四百拾五両弐朱

廣運丸同断

金三百三拾五両

千弐百八拾石積

蛙子丸同断

金弐百五拾両弐分

八百六十五石七斗余積

大福丸右同断

金弐百五拾五両

八百五十石四斗弐升積

金弐百五拾五両

順樂丸

八百五十六石五斗三升積

仰付候由、尤三奉行惣評議之由

可申旨、於新部屋被

此者父ハ松平阿波守家来成シカ、天明中故有テ暇出シ、

金百五両

大榮丸同断

三百八十二石八斗積

大神丸同断

卜

金百九拾三両弐分

六百廿一石五斗四升余積

メ金三千七拾両三分三朱ト 銭三貫九百三十八文

此金弐分壱朱ナリ

天保三辰年八月十二日 合金三千七拾壱両弐分ナリ

松前船持

髙田屋

金兵衛

辰五十五

日土井大炊頭、 右辰八月十二日御下知ニ寄目籠ニテ被召捕、来ル十三 御詮義掛脇坂中務大輔存寄次第致心添

> 夫ヨリ淡州須本ニ移船渡世セシ頃、備中国地 乗ト成、 諸国船ニテ乗渡松前へ渡海シ、 数年船乗船頭 浦ニテ

船

中諸御役人追々御渡海有之時、髙橋氏ノ御見出シニテ 様ニ渡世出精追々功者ニ寄家富ケル、其頃松前御仕置 成シカ、其頃或人ノ男子ヲ兄嘉兵衞跡ヲ継、 弟モ同

候テ、其近辺ノ差引全此者壱人ニ帰シケレハ家弥富栄 羽

ネモロ・エトロフ御交易ノ事ヲ、此嘉兵衞へ被

仰付

織袴ヲモ着セス船頭ノ身柄ヲ専トセシトヤ、 候ヨシ、尤父其頃御奉行所ヨリ召サル、時ト雖共、

今ノ金兵衞父兄ノ時ョリモ繁昌シ、此頃ニテハ金壱万 三千両程宛毎年利ヲ得ル程ノ分限者ト成シト ・ナリ、 船

シ召捕レシ共、又抜荷売買トモ云フ、 印山カタニテノ字印ニテ彼境ハ勿論、東海・北海渡船 ノナシト云フ、今度イキリス・魯西亞ト交易ノ事発覚 ノ者委シク是ヲ見知リ、彼地ニテモ此者ノ右ニ出ルモ

金兵衛持

ク ナシリ ネモ 口

朩

Ħ

イツミ

持船八艘

ェ ١

p フ

— 173 —

有金 主孝丸 浮悦丸 五拾万両余 順通 丸丸 大福丸 大神丸 大榮丸

船印

箱館石澗家持

髙田屋

八月八日

安堂寺町五丁目

五十五

八月八日

巳十一月

小伝馬町佐渡屋

久兵衞方へ 手鎖預

清右衞門

水主 伊三郎

親父役 利助

國藏

知 工

壽藏

重藏

煩

好 松

仁三郎

久米藏

攝津国兵庫

高田屋

金兵衞

松前出張所

髙田屋松五郎宅共

凡金拾両付

有米九億壱万石

此俵数四千五百弐十弐万廿七俵余

是ハ唐国へ相送り候分

米九億壱万石 奥行百五十間

但此米四斗入俵二億数

又弐百拾間

七拾五俵積リニ買置候由 代金四拾六億弐千弐百七十万八千両余

此両二八斗八升買

有金百弐拾壱万両

闕所之次第

家財

土藏七拾六ヶ所

七戸前トモ 又惣数三百五十 又弐千両余共

内庭蔵四十三ヶ所

唐物藏五拾ヶ所

右金兵衞義、御法度之儀相背唐国へ米相送候付、

当人、磔ニ申付、悴並番頭其外獄門、船頭共死罪

右大坂町奉行矢部駿河守於役宅吟味之上、右之通申渡

申付之、

巳十一月

但

当時両ニ六斗八升ノ相場ニテ、代金拾弐億六百 弐十弐万千九百廿五両弐匁五分八厘

本文小書之分ハ巳七月之事ト 山有之、高田屋

家内八拾人余

大船百弐拾七艘

漁猟舟三百五十艘

但五万石余

船頭千人余

又四百五十四艘共

龍脳蔵六十四ヶ所 人参蔵六十七ヶ所

之、

間口三拾五間

内召遣ヒノ者弐千人余

又五十七間

金兵衞ハ当二月松平阿波守へ御預ト成御仕置相

済候ナリ、且町方ニテ今年ヨリ去年ヲ安ジ、皆 銀七枚

々相応ノ囲穀ヲ心掛、多分所持候者へ用意手当 右御老中申渡之、

等ヲ専一ニ致旨、筒井伊賀守一時ノ謀計ヲ以有

方モナキ事ヲ写シ、依テ諸人大ヒニ安堵シ、ケ 米沢山成ト申触セシニ、一同安心ノ為ト工夫跡

様ニ沢山成米故程ナク江戸廻米ニ可相成ト沢山

所持ノ者売出シ、富者不買込様ニ可成行トナリ、

巳十一月廿六日

右家持金兵衞取扱候ニ付御誉ノ次第

寺社奉行吟味物調役

御勘定吟味役格

巻物三

久須美六郎左衞門

評定所留役

御勘定組頭

同弐枚宛

銀三枚

市川銀太郎

右於焼火之間相模守申渡之、

九千五百石十万俵

囲穀之内七分通江戸表へ廻米可致旨被

寺社奉行吟味調役

中野又兵衞

井伊 掃 部 頭

仰渡、

御勘定組頭

川路彌吉

— 176 —

評定所留役 御勘定評定所留役 土屋鐵四郎 石川長次郎 都筑金三郎

銀七枚宛

評定所書役 川添三十郎

箱館大町家持金兵衞一件、吟味取扱骨折

候ニ付被下之、

十一月廿六日

七千俵

戸 守

仰付候間、

右歩判金八ツヲ以金壱両之積、

尤銀銭共

相

千五百俵 秋

元 但 馬 守

右之外、四拾壱軒ノ大名へ、囲穀之内七分通皆 石川中務少輔

七百俵

分通リ江戸へ廻シ、町人へ売出シ可申旨被 中国・西国其外数十軒大坂ニテ手切払米之分三

依テ米ハ右二ロ入津多シト雖共、町方ノ直段 出候ナリト行末ヲ頼、今カ~~ト安心ノ体ナリ、 共是等ノ事ハ不存事故、扨ハ髙田屋金兵衞ノ米 渡シカハ、右二口之分毎日々々入津ニ付、

町人

矢張引下ヶ無之、当正月中旬頃モ百文ニ付六合

ナリ、

田 因 幡

右之趣国々へモ可触者也、

心得、是迄ノ弐朱銀ニ取交無滞可致通用候

両替小判・弐步判・壱歩判・壱朱判同様之割合ニ

十月

右之通相触候間可存其趣候、

此度世上通用ノ為吹立被

先達テ相触候通、小判・弐步判・壱步判・弐朱銀 仰付候弐朱金之義、来ル廿四日ヨリ可致通用候、尤

鋪事、

弐朱金両替ニ付切賃之儀、弐步判・壱歩判

弐朱銀

壱朱金銀同様相心得取遣可致事

古金銀・弐朱判・真字弐歩判トモ引替所之儀、当辰十 月迄被差置候段去卯年相触候処、今以引替残有之、

十月迄ハ是迄之通被差置候、且又西国・中国筋 真字弐步判ハ猶更残高多候間、引替所之儀猶又来巳 こ 別

テ古金銀引替残り有之趣相聞候、諸家領分場広ノ土

-177 -

壱朱金銀等取交無差別取引為致候条、通用差滯申間

天保三辰十月廿四日 **弐朱之步判金吹上御触** 公儀ヨリ被 仰出候御触書三通

Ē

弐朱判金吹上令

此度世上通用之為弐朱ノ歩判金吹上被

地抔ハ、オノツカラ引替方手後ニ候場所モ可有之哉

ニ付、領主々々ニテ弥遂穿鑿、最寄引替所へ差出為

引替候樣可致候

真字弐步判之儀、 精出引替可申、並古金銀・弐朱判共所持之者ハ早々 頓テ通用停止被 仰出候間、 此節

引替所へ差出、来ル巳十月ヲ限急度引替可申旨遠国 私領ハ領主地頭ヨリ入念可被申付候、 末々ノ者迄右相心得候様、 国々在々御料ハ御代官、

右之趣可被相触候、

十月

右之通相触候間可存其趣候、

틀 灰吹銀令

灰吹銀御触並大坂表ヨリ白銀御廻シ入

入用之者ハ銀座ニテ買請、他所ニテ売買致間敷旨先達 灰吹銀其外潰銀類銀座並下買之者へ売渡、銀道具下銀 相触候処猥ニ相成、売買致シ候者有之趣相聞不届

候、先達テ相触候通急度相守、銀座並下買之外他所ニ

テ売買致間鋪候、

職人共打立世上へ出候処、 銀箔之儀、 銀座ヨリ株札並箔下銀相渡、京都ニオヰテ 他出所ニテ紛敷下銀ヲ以銀

更、其外国々ニテ銀箔隠打候趣相聞不届之義ニ候、已来 於他所銀箔打立候儀ハ難相成事ニ付一切致間鋪候、右 箔相打候モノ有之趣相聞候、 ハ先年ヨリ度々相触候処、 近年猥ニ相成、北国筋ハ猶 右ハ京都箔方職人共之外

銀箔之儀ハ京都定職人之外他所ニテ一切打立并致間鋪 急度相守灰吹銀其外潰銀之類銀座之外堅売買不相成!

上急度可申付モノナリ、

テ売買致候欤、又ハ銀箔打致候モノ於有之ハ、吟味之

候、若灰吹銀之外潰銀類、

銀座并下買之外売渡他所ニ

五月

六月二日

右之通御書付出候間、

町中不洩様可相触候、

右ノ書付ヲ見聞、

或人古歌ニアルヲ写シテ

|ノ御代栄ヘント東ナル

皇

チノク山ニコカネ花サク

読直シ戯レ侍リケルト云

近年姫君様御引移ニ付、其度毎ニ金銀ノ御品数多御新 且蒔絵梨地金銀箔泥砂子等ニ潰金銀イクハシト云 ノ御代ノ宝ヲイツフシテ又候弐朱ノコ カネ花咲

フ数知レス、 其上

御宮 樹院殿新御霊屋、且今度 小性衆・御小納戸衆へ被下物、又京諸家方へ被遣候物^{〔姓ぇ〕} ノ御品御手遊モノ御縁類様方御音信被進物、 御霊屋上野御本坊等御修復ノ度毎ニ御入用、 二丸御建継箔類、 其外金銀 又女中御 最

等ニ相用候金銀御品ハ筆ニ記候モ難及程ナリ、 用金弐万両程ツ、掛リ候テモ、水ノ下八九町程 上ニ自然ト金銀少ク相成、 尚佐渡ニテモ近年ハ毎年入 去へ世 ラ下へ

被 御細工ハ勿論通銀殊之外御不足ニ及候由ニテ、当七月 仰遣大坂御金蔵ニ御仕込有之白銀凡三万両程ノ分

縊リ入堀出候ニ付、漸々壱万両計ノ金銀出候由ニ付、

壱朱金通用相

壱朱銀吹立追々出来ニ付、

壱朱金相止候間持合候モ

先相廻シ可申旨ニ相成、八月彼ノ方ヨリ相送候由

当時吹直シ金銀引替御用勤居候モ ハ、後藤三右衞門役所並江戸・京・大坂其外在々ニテ、 ノ共之内へ差出、

々引替可申候、尤引替相済候迄ハ是迄之通可致通用之

事

右引替金之儀、

小判

・弐分判・壱分判・弐朱金等ヲ以

引替可遣候、 焼壱朱金ニテモ極印相分候分ハ無代ニテ

七月三日

引替可遣条、

其旨可相心得事

三井 \equiv 郎 助

三井元之 助

竹川 荒木伊左衛門 三井次郎右衞門 彦太 郎

小 野 善 九 郎 奥田仁左衞門

竹原文右衞門 三谷三九郎 次郎

泉

屋

吉

播磨屋新右衞門

井筒屋善次郎

兵

島 屋吉

此度壱朱金引替方被

石

川庄

兵

衞

モノ共、壱朱金引替御用ヲモ可相勤旨被 仰付、是迄金銀引替御用相勤居候間、右之名前之 仰渡、

先年此壱朱金出シ時或モノ、句

七月三日

其上至テ世上多出通用アリ、 損スルナト云シナリ、然共通用金ユヘ子細ナシ、 評判シ、又ハ強ク手荒ニ手扱時ハ、瓦土ノ如ク欠 其訳ハ誰カ手ニ来リ

方ニテモ第一通用セシナリ、

テモ、少シモ早ク先外へ遣シ、内へ残サス分別何

此句ハ、高師直ハ桐ノ紋附判官ノ奥方カホ

3 御前

ンホセシハ人ノ妻ユヘワルイ色事ナリ、

新古今ハ十戒ノ歌

ラヌタニ重キカウヘノ小夜衣

我カ妻ナラヌ妻ナカサネソ

ノ古詠ノ読ミシ忠臣蔵ニ言抜シ切ノ句、奇々妙

表裏ヲヨク含ミシナリ、作者曲亭馬琴ト

々ノ句、

云フ、サモ有ヘシ、

度通用相止候御書付出シカハ、格別ノ御仁慮ト歓候モ ワルイ色桐ニ一朱ノ新コキント人ニ嫌ヒシ壱朱金、今

ノ不少、然処此金一朱三ツョセ弐朱金弐ツ出来ル目方

事ナリ、凡見積百両ニ付廿五両ツ、御徳ニ成候上ハ、 ナリ、サスレハ御取入ニ相成候次第御吹替ニ及候ト申

万両ニ弐千五百両、百万両ニ弐拾五万両ノ御益

二へ如

何サマニモ御入用掛リ候テモ、御引取ニ相成候筈ナリ 算用者申シ、但金ノ性ハ大ニ違トノ事成共、近年小

年中箔ニ致候分凡金千両程ノヨシ、 判・壱歩判・弐朱銀共目方御滅故見苦敷相成候事ナリ、 千両ニテハ二万両

万ノ事ナリ、外泥砂子ニ潰失ス事毎年如何計ニ哉難計! 程ノ箔ニ相成候事、併大切ノ金銀ヲ潰失候段ハ残念千

九(天保五年)

真字弐歩判通用ノ義、当九月ヲ限リ之様ニト去巳年 不行届候哉二付、真字弐步判引替之儀、来未九月 十月相触候処、今以引替残有之趣ニ候、遠国等未タ

限リ不残引替可申候、尤遠国之分ハ、去ル卯年十月

相触候通、引替之金高並道法遠近応道中入用モ被下

付候、来未年十月ヨリ真字弐分判通用弥停止可為候、 厚世話致シ、最寄引替所へ為差出不残引替候様可申 候事ニ候得ハ、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ヨリ

無油断引替ニ差出可申候、尤停止已後通用致シ候モ 、於有之ハ急度可申付候

九月

右之趣可被相触候、

同十月

古金銀・弐朱銀・壱朱金等引替所之儀、当午十月迄 替所之儀、猶又来未十月迄ハ是迄之通被差置候、 被差置候段去巳年相触候処、今以引替残有之候間、 且 引

又西国・中国筋ハ別テ引替残有之趣、先達テモ相触

可申付候、

若此上ニモ貯置不引替モノ於有之ハ、吟味之上急度 寄引替所へ差出、来未十月迄不残為引替候様可致候 領ハ領主地頭ニテ弥遂穿鑿、少分ノ方ニテモ早々最 候得共兎角引替方取揃兼候ニ付、御料ハ御代官、私

<u>=</u> 〔一橋御簾中・英姫詠草〕

一一ツ橋御簾中様御詠

年月なミならぬ深き御めくみを夢らつつにも、た

だわすれやらずかへらぬことのミ思ひつつけられ

起て忍ひ寝てミし夢の面影も 友に残れる春の夜の月

したひてもかひなかりける御影のミ

英姫君様御詠 ただしのはれと袖に露けき

くすしともみくすり奉りて、御かたハらの人々もつ 祖父君のなかき御いたつきにてなやませ給へれへ、

きそひ奉りて、何くれと心のゆくかきりものしはへれと、きさらぎの中の七日と云ふにハ、はやおもらひぬる、はかなきにただむね潰れて涙に袖をしほりひぬる、はかなきにただむね潰れて涙に袖をしほりと思ひしかひもなく、今ハ帰らせし世の御面影の身と思ひしかひもなく、今ハ帰らせし世の御面影の身と思ひしかひもなく、今ハ帰らせし世の御面影の身と思ひしかとなみて、何くれと心にねんし奉る事のの忌日をいとなみて、何くれと心のゆくかきりものしはへきそひ奉りて、いそかぬ日数はやめくり来て、けふは初める。

また袖濡らすけふの春雨 夢の間に過しその日のめくり来て

三O四 朝鮮人参ニ関スル令

段ト違ヒ高料ニモ相聞、末々之モノ相用度存候テモ値一統病用ニモ相用ヒ候趣ニ候処、町方売買直段御払値朝鮮種人参之儀世上御教之タメ御制法被 仰付、当時朝鮮種人参於吹上御役所御払ニ相成候儀ニ付御触

之上厳重之咎可申付、右之通町中不洩様可触知モノナ 方相成候様可致、若不正之売買致候者於相聞ハ、吟味 相認、見世先へ張出置、其日稼之者ニ至迄手軽ニ買取 目壱斤ニ付値段何程、壱両ニ付何程、百文ニ付何程 売捌方之儀引請候モノ一割之売徳ヲ差引、上中下共掛 奉行所へ不及届候間、町役人共差添直ニ同所へ可罷出、 晦日サカff 吹上役所ニオヰテ御払ニ相成候間、 致トノ御趣意ニ付、以来人参之儀毎月八日・十七日 旧冬問屋組合仲ヶ間停止被 売渡候筈ニ候間、勝手次第可買受旨先年相触置候処、 右問屋ヨリ御府内薬種屋共へ御払、元値段ヲ以下値ニ 候之間、御制法人参之分薬種問屋ニ限リ御払ニ相成、 段其外手重ニ相心得、 ハ勿論素人ニテモ望ミノモノハ勝手次第可願出候、尤 買調候儀難成類モ有之哉ニ相聞 仰出、諸品手広ニ売買可 薬種屋

新曆頒行之事御触 三〇五 新曆頒行令

'n

御料ハ御代官、

私領ハ領主地頭ヨリ不洩様猶又急度可

触候之趣堅相守、

不束之筋無之様諸国村々

市町等迄、 弥明和度相

相当之相場書出候場所モ有之哉ニ相聞候、 味之上可被行重科之旨明和七年相触候処、

近年又々不

被申付候、尤近年相場相立候日限改候場所へ右改候日

陣之儀遂行、 寛政暦差錯有之ニ付テ、今度於京都改暦 新曆号天保壬寅元曆ト被定候、 宣下曆号定 依之来ル

右之通可被相触候、

十月

辰年新曆頒行之事候、

증옷 年貢米穀代納ニ 関スル 令

諸国御年貢米並大豆石代金納相用候相場之儀、

毎年十

聞不埓至極ニ付、以来相場立方疑敷趣相聞候ハ、、 国々之内ニハ私之作略ヲ以相場書出候場所モ有之趣相 御代官・領主役人致奥印差出シ、 上相場相極候故、相場之高下ハ自然ト相立候事ニ候処、 月十五日ヨリ同晦日迄、 国々町場市場等之相場書へ、 御勘定所ニテ吟味之 吟

> 之通可被相触候、 急度申付、奥印之者共モ可為不念条其旨可相心得、右 入念可被遂吟味候、 之哉ニ相聞候間、 迄之通相場書へ奥書印形致シ可差出候、若不束之儀於 限相用、 右之通文化十一戌年相触候処、 有之ハ、奥印之者共可為無念候条其旨可相 御代官並領主地頭ニテモ精々入念遂吟味、 御代官所・御預所・領主地頭ニテ弥 向後如何之趣於相聞ハ、吟味之上 近来心得違致候向モ 心得

有

是

十月

트인난 諸国産物売買ニ関 ス ル 令

近来五畿内・中国・西国筋国々 領主地頭ニオヰテ前書惣弊早々改革可有之ハ勿論ニ 謂他所之者ヨリ冥加銀等為差出候哉之趣モ有之候上ハ 依テハ領主地頭之権威ヲ以他之売買へ差障リ、 荷ヲ蔵物ニ引直シ蔵屋敷へ囲置、 国之産物ハ不及申、他之国産ヲモ夫々手段ヲ以買集、売 銘々出入之町人共ニ為売捌メ売同様之取計ニ及ヒ、 領主地頭 相場高直之砌手払又 ニオヰテ、 或ハ無 自 候

得共、万一是迄之仕来ニ因循致シ、不良之取計於不相

止ハ、糺之上急度可被及御沙汰候

右之趣可被相触候

十月

크 諸国廻米船帆印ニ関スル令

近来北国筋其外諸国之廻米等、異国船ニ似寄候帆之立 方相見、既ニ先達テ異国船ト見違候次第モ有之、全ク

有之由、其外遠キ沖合ヲ乗候節、帆之立方異国船ニ似 前トハ相違之趣相聞、 三本帆之儀ハ難相成筋ニ候処、追テ大津ヲ乗候様子以 殊ニ寄朝鮮之地方近ク乗通候 モ

国船ニ紛敷帆之立方致シ並遠キ沖合ヲ乗候儀可為停止 寄候ヲ以テ見違ヒ候儀ニモ至リ可申欤、依之以来ハ異

右之通御領ハ御代官、私領ハ領主地頭ヨリ不洩候様可 若触面之趣於相背ハ、吟味之上急度咎可申付候、

水戸烈公ノ御詠書ヲ、氏ノ曽祖父與淸翁ガ御添削

○本書ハ友人髙田早苗氏ヨリ到来ノ書ニンテ、是ハ

申セシ写ニシテ小山田與淸翁カ真筆ナリ、

宮崎泰辳

宰相中將ノ君ノ御詠書及ヒ御答之写、 天保三年七月、水戸之御通事戸田銀次郎所 仰 伝 之

七月十五日夜

ノ風今モカヨヒツ、文月ノ月モ影明ラケシ

ノ風ニナヒク草葉ハ数見ヘテヨムトモツキシ文月ノ

家 家

ニモジアマリ聞悪ケレト出来タルマ

` =

書ツクル物ソ

心付モ有ラハ通スヘシ、

御詠書カシコマリツ、シミテ拝見ツカウマツリ待 ルニ、イヅレモメデタクコガネノ玉ノ御作ト承リカ」 カンジ奉リヌ、 ハシノ御歌 ハ御カタへ附ノ伝ヘツ

、ヨリモ御本行ニ遊ハシ候カヨヒツ、ノ方マサリ

テ承リ奉リヌ、

三〇九

水戸烈公詠草

被相触候

奥ノ御歌ノニモジ、 更ニクルシカラス、イモジノ 座滞在罷在候内、

右王子病気追々相重ミ死去仕候 九月十六日迄久見崎出帆之都合無

然処其頃汐合悪々、

右

ニ付テハ古来ヨリ使者之儀ハ国王一門之家柄、王子

3 句 モ 雲井 チ 、ビク草バノ数アマタ見ヘワ ュ ノオ 候 ゲ待ルニナシ、[時ヵ] 歌ノ置処御 カ **工**. シ ハン钦、 = ク 通 コ モジアマリモ耳立待ラズ、「俳ヵ」 キヮ タ ٤ ドラン ッ ナザ メ カ ` デ度御作 ヘサ 影スミ渡ル文月ノ月、 = ニ待レド、「侍ヵ」 タメニ アナカショ 乜 遊 = ハシ候てモ、 タル 1 ∄ 1 シ ハデシ カ ナシ事聞 カナ、 サテ家ノ風今 ニゾヤ ノブ 又シ 文月ノカ 家ノ風 ١ モ学 奉 丰 カ ル ル

平小山 田淸與上

琉球王謝恩使豐見城王子病死届

久見崎ヨリ乗船申付、 通、九月朔日発足仕候、定例頒分之内向田迄召連同所 立之比合及遅滞候テハ不都合ニ付、 今度為来聘使従琉球国到着仕候後不快罷在候得 私儀ハ陸地罷通為申儀御座候、 先達テ御届申上候

> 等故障之程合難計、右様之節差支無之様従往古之規定 執行之程合之儀ニ付、万々一旅中病気又ハ依時 之内へ申付差上候へトモ、 ニテ従者一隊之内ニテ、王子へ可成替身柄之モノ兼テ 隔遠海数月ヲ経使者勤方等 宜は

為讃儀官差渡候宇治原親雲上事王子支流ノモノニテ、 王命ヲ伝へ、使節規定ヲモ取整差渡候仕来ニテ、此節モ

候儀ニ御座候、宜御間通聘式無滯相済候様仕度奉存候、 万事ノ作法受継、 正使控為相心得王命相伝、使者作法悉ク王子ヨリ申渡 差渡遣候ニ付、直様宇治原親雲上事豐見城王子ト へ命候旨ヲ以取扱相済、 今般使者無滯相勤候樣副使澤紙親方 則九月十七日久見崎出帆 相改

(段先以申上候、 以上、

共、

出

此

ヨリ飛脚 ヲ以御届ニ及ヒタ 松平大隅守興

リト

此届書

藝州海田駅

琉球讃儀官ニ関 ス ル 届

Ξ

宇治原親雲上跡 新義雲上跡

右ハ宇治原親雲上事豐見城王子ト相改正使相勤候ニ付

久見崎へ召呼、右役目申付為出帆候段旅中ヨリ申越候、 跡讃儀官之儀ハ城下へ罷在候琉球人之内ヨリ右之モノ

此段御届申上候、以上、

松平大隅守内

猪飼央敞

辰十月十二日

防守様御登城之上御同席様被成御評議、追テ何分御差 留守半田嘉藤次ヨリ差出候処、御先例モ無之事故、 右辰十月十二日琉球人御掛御老中松平周防守様へ、 周 御

人ヨリ別段御差図無之、御落手被成候段被仰渡候 図可有之段、御用人ヲ以被聞召置候処、同日夕方御用

御徒方萬年記

天保四年正月廿九日(御徒方万年記)

御奏者番

上使堀田相模守

大隅守祖父隠居 松平樂翁

> 天保四年正月廿九日 (御徒方万年記)

右病気ニ付為御尋被遣之、

御目付大澤主馬達

来月三日京都ヨリ

勅額下向ノ節、

御玄関ヨリ上リ、

艮日御黒畵院奥メリニテ被遊〔ママ〕 候節御玄関ヨリ相廻候事、 上覧、直ニ上野へ被遣

同断ノ節 勅額出向トシテ、大御番頭壱人・御目付壱

御差支無之哉、此段及御掛合候、否早々御申聞可有之 人御玄関迄罷出候ニ付、其節御徒御番所ニ控居候テモ

候、

答下ヶ札

御書面ノ趣致承知候、御徒御番所ニ御控有之候テ モ御差支ノ儀無御座候、依之及御答候!

正月廿九日

御徒頭

御奏者番

天保四年二月二日(御徒方万年記)

上使内藤大和守

大隅守祖父隠居

被為 請候事、

御台様今日ヨリ御定式ノ通五十日、十三ヶ月ノ御忌服

右病気ニ付為 御尋被遣之、

> 松平榮 翁

生于鱚一

天保四年二月三日(御徒方万年記)

大御番

弐種壱荷

永井信濃守組与頭 鈴木主税

同人組

水野帶刀

勅額下向ニ付差添罷越、今朝到着

右は此度京都ヨリ

ニ付、於大広間四

ノ間御老中松平周防守殿御謁有之、

於御黒書院 勅額被遊 上覧候、

天保四年二月二日(御徒方万年記)

御老中松平周防守殿御渡、御目付土岐主膳達

松平大隅守祖父榮翁卒去二付

右御暇被

仰出候ニ付今朝被遣之、

天保四年二月十一日 (御徒方万年記)

御老中

御使松平和泉守

德川民部卿殿

右ハ前髪被執候ニ付被遣之、

御座之間

徳川民部卿殿

御対顔 御手自御熨斗蚫御刀

右同断ニ付御登

城、

被遣之、

天保四年二月廿三日(御徒方万年記)

御老中

御使大久保加賀守

水戸宰相殿

御座ノ間

御暇

水戸宰相殿

御対顔

右

天保四年三月廿八日(御徒方万年記) 五八 反丈島

林肥後守

右二丸ノ内 御殿向其外新規御普請御用取扱候ニ付、

於奥拝領之、

天保四年四月朔日 (御徒方万年記

若年寄增山河内守殿御渡、 御目付牧野中務達

奉行所吟味引合等ニテ在方ノ者呼出候節ノ差紙

江江

戸宿へ相渡、江戸宿ヨリ飛脚ヲ以村々へ遣相附、 近来 右

者有之趣相聞、村々難儀之事候、依之以来ハ於其所 **贋差紙持参江戸宿飛脚ノ由申偽、** 差紙ヲ請候者ヨリ飛脚賃銭於其所受取来候処、 飛脚賃銭ヲ語取候

> 江戸宿へ掛合、 於御当地賃銭可相渡

賃銭不相渡、差紙請候者江戸着ノ上、

右差紙取次候

右之趣ハ江戸宿共ヘモ申渡置候条可得其意候、

右之通天明七未年、文化十二亥年相触候処、 但全怪敷差紙ト心得候者 ニ留置其筋へ可訴出候、 二、 差紙持参ノ者ヲ其所

村方ノ者トモ油断ヨリノ事ニ候、 候贋差紙取扱賃銭語取候者有之趣相聞候、 贋差紙ヲ実事ト心 右ハ畢竟

近来又

得賃銭相渡候者ハ、吟味ノ上咎申付候条、 自今差紙

心得候、

縦令相対ニテモ金銭不貸渡、

先年相触候趣急度可相

持参ノ者、

路用差支候等申候共於其所決テ不相渡、

右之趣御料 私領·寺社領共不洩様可触知者

天保四年四月十一日(御徒方万年記)

南部信濃守

右於御白書院御掾頗御老中御列座、[緣ヵ] 此度上ヶ金仕御用途ニモ 相成候三付、御鞍鐙被下之、 松平和泉守殿被仰

右於

御前被

仰付之、

宿所深川海辺橋通り高千石

羽太左京跡 御徒頭

渡之、

天保四年五月九日(御徒方万年記)

御老中

水野出羽守

右病気ニ付御役 御聴ニ候処、未格別ノ日数ニモ無之聊心遣ニ不及寛 御免、 隠居家督相願度内願 ジル趣入

汰ニ候、

々養生仕、

快候ハ何レニモ致登

城候様ニト

・ノ御沙

嫡子大和守へ御老中松平周防守殿被仰

渡之、 右於芙蓉ノ間、

一ノ間 御役替 御小姓

御座

天保四年五月十二日(御徒方万年記)

松平兵庫頭

松平兵庫頭

天保四年五月十四日(御徒方万年記)

溜詰

松平刑部大輔

隱岐守養子

右於御白書院、溜御老中御列座松平周防守殿被仰渡之、

天保四年五月廿六日(御徒方万年記)

御勘定奉行曽我豊後守 達大目付佐野肥前守

去辰年琉球人参府帰国共、道中筋人馬継立方諸入用ノ

儀、武藏・相模・伊豆・駿河・遠江・三河・美濃・近 江都合八ヶ国御料・私領共国役金取立候積、御老中松

平周防守殿被仰渡候間、右八ヶ国各様御知行所有之分

御申聞候様存候、 国役金御納有之候様存候、尤知行所有之分ハ御名前被 則別紙書付弐通相添此段御達申候?

天保四年六月四日 (御徒方万年記

若年寄林肥後守殿御渡、御目付土岐主膳達 小判金ノ儀、

瑕ノ患無之タメ厚メニ吹直被 仰付候

得共、 瑕・ヘケ瑕無構可致通用候、 此上年ヲ経候ニ随切金若瑕金等有之候共、 軽目金ノ儀モ小判ハ 四 切

無滯可致通用候、 厘迄軽キ分通用致シ、 弐歩判・壱歩判モ右分量ヲ以

右之趣向々へ不洩様、 御料ハ御代官、 私領ハ領主地頭

灰吹銀其外潰銀類、 ヨリ可触知者也、

入用ノ者ハ、銀座ニテ買請他所ニテ売買致間敷旨、 銀座並下買ノ者へ売渡銀道具下銀 先

達テ相触候通急度相守、銀座並下売ノ外他所ニテ売買 達テ相触候処、 猥:売買致者有之趣相聞不届:候、先

致間敷候

共打立世上へ売出候処、他国ニテ紛敷下金ヲ以銀箔打 銀箔ノ儀ハ、 銀座ヨリ株札並箔下金相渡、於京都職人

箔打立候儀ハ、 立候者有之由相聞候、右ハ京都箔方職人ノ外於他所銀 難儀ノ事ニ付一切致間敷候、右ノ趣先

年 リ度々相触候処、近来又々猥ニ相成、北国筋ハ尚 其外国々ニ テ モ銀箔隠シ打致候趣相聞不届 三候、

以来急度相守、

灰吹銀其外潰銀ノ類銀座ノ外堅ク売買

不致、 売不渡他所ニテ致売買候欤、又ハ銀箔隠シ打等致候者 致間敷候、若灰吹銀其外潰銀ノ類、 銀箔ノ儀モ京都定職ノ外他所ニテ打立候儀一切 銀座並下売ノ者へ

於有之ハ、吟味之上急度咎可申付者也、

天保四年六月九日(御徒方万年記)

御座ノ間

御老中 水野出羽守

八丈島十反

右二丸 御殿向 ノ内新規御普請御用取扱候ニ付、 於御

前拝領之、

天保四年六月十一日(御徒方万年記)

御座ノ間

勅額 ノ御礼

京都へ御使

高家

宮原攝津守

天保四年八月三日

(御徒方万年記

若年寄林肥後守殿御渡、御目付村瀨平四郎達

右御暇ニ付 御目見、

|拝領物ハ於羽目ノ間御老中御出席頂戴之、

御座ノ間

(御徒方万年記)

天保四年七月十七日

勅額 ノ御礼

京都へ御使

高家

宮原攝津守

右就帰府 御目見、

天保四年七月廿九日(御徒方万年記)

越中守嫡子

松平近江守

被仰付之、

右於御黒書院溜御老中御列座、松平周防守殿被仰渡之、

ハ、後藤三右衞門役所並江戸・京・大坂其外在々ニ

壱朱銀吹立追々出来ニ付、壱朱金相止候間持合候者

テ、当時吹直金銀引替御用勤居候者共ノ内へ差出

段々引替可申候、尤引替相済候迄ハ是迄ノ通無滞可

致通用事、

右引替銀ノ儀、 以引替可遣候、焼壱朱金ニテモ極印相分候分ハ、無 小判・弐歩判・壱分判・弐朱金等ヲ

代ニテ引替可遣候条、 其旨可相心得事、

天保四年九月九日(御徒方万年記)

若年寄林肥後守殿御渡、御目付大久保讚岐守達 近年諸国違作ノ国柄多米穀払底ニ付、酒造人共当巳

年ノ儀ハ、銘々造来米高ノ三分「相減三分二酒造可

致候、若隠造等イタスニオヒテハ、其者ハ勿論其所 ノ役人迄、吟味ノ上急度可申付候条、心得違無之様

可致候、

右之通御領・ 私領 ・寺社領共不洩様早々可触知者也、

天保四年九月十七日(御徒方万年記)

江戸川筋洗関ヨリ船河原橋迄ノ内、漁猟留川ニ 若年寄增山河内守殿御渡、御目付堀小四郎達 相成候、

若魚ヲ取候者於有之ハ急度可申付候

右之通向々へ可被相触候、

天保四年九月廿二日(御徒方万年記)

若年寄林肥後守殿御渡、御目付村瀨平四郎達

先年米直段格別下直ニ候間、相場ノ障ニモ相成候ニ 付

追テ及沙汰候迄ハ都テ白米ニテ江戸表へ引請候儀、 八不及申、 縦令問屋共二候共一切引受申間敷旨文化

相触候処、 此節江戸表米払底ニテ米価高直ニ付、 市

奥筋並関八州御領・私領・寺社領へ

三寅年町触有之、

モ

手次第売捌可申候、 午三月中ヲ限江戸内へ積送、 中及難儀候間、 在方ニテ米所持ノ者共ハ白米ニ春立来 尤同年四月ニ至リ候ハ是迄ノ通可 問屋ハ勿論、 素人迄モ勝

右之通奥筋並関八州御領 私領 • 寺社領共不洩様可相 相心得候、

天保四年十月十四日(御徒方万年記)

若年寄林肥後守殿御渡、御目付堀小四郎達 古金銀・弐朱銀・真字弐分判共引替ノ儀、当巳十月

引替所ノ儀来午十月迄ハ是迄ノ通被差置候、古金銀 迄被差置候段去辰年相触候処、今以引替残有之候間 弐朱銀・真字弐歩判共持合候者、少分ノ高ニテモ

早々差出引替可申候、

真字弐分判通用ノ儀来午九月迄、只今迄ノ通草字弐

停止タルヘク候間、真字弐步判所持ノ者ハ無油断早 分判ト一様ニ可致通用候、其以後ハ真字弐分判通用

り申付、 国並渡海等ニテ引替不都合ノ場所ハ、 々引替可申候、尤御料ハ御代官、 遠国ニ至迄不残様ニ引替サセ可申候、 私領ハ領主地頭 其御代官·

主・地頭ニテ弥致世話、 最寄引替所へ差出候様可致

候

右之通可被相触候

入用

ノ油絞方第一ノ備ニ候間、

同国村々ニオヒテ油

絞カタ十分ニ調候上、全余計ノ菜種有之候ハ大坂町

十月

天保四年十月十九日(御徒方万年記)

四ヶ国在町水車人力油絞稼ノモノ共、絞草買口・絞京都・奈良・伏見・大津並山城・大和・近江・丹波若年寄林肥後守殿御渡、御目付堀小四郎達

其旨ヲモ可相心得候

油売捌方等ノ儀、向後左之通申付、

物問屋 河内 弐ヶ国油絞余計ノ菜種ハ、大坂・堺・灘目並攝津・ 四ヶ国在町水車人力油絞株ノ者、絞草買口其外口銭 京都・奈良・伏見・大津並山城・大和・近江 請取方等ノ儀ハ、是迄ノ通可相心得、 ノ内水車新田水車油稼ノ者へ売渡、綿実ハ大坂 灘目並 便利ニ寄候テハ菜種・綿実共大坂・堺・兵庫両種 ・和泉・播磨四ヶ国在町人力油絞株ノ者並灘目 へ勝手次第可売捌候、山城国菜種 右四ヶ国在町水車人力稼無差別売渡、 且山城・大和 ノ儀ハ京都 運送 丹波 · 堺

絞油株人共ヨリモ、糶買等堅致間敷旨為触知候条、大坂・堺・灘目其外攝津・河内・和泉・播磨四ヶ国兵庫三ヶ国両種物問屋へ可売払候、尤両種物問屋並儀モ国中絞油ニ相用候外、余計ノ絞草ハ大坂・堺・奉行支配ノ絞油屋両種物問屋等へ売捌、丹波ノ国ノ

菜種五千石ヲ限リ直買為致候筈、右新田水車稼人城・大和・河内・和泉・播磨五ヶ国ニオヒテハ、種買口ノ儀、住国攝州ニテハ勝手次第直買致、山但攝津攤目ノ内、水車新田一村、水車油稼人共菜

モ弁、猶余計有之候ハ大坂油問屋へ売渡、尤近江国右之外出情絞増候油ヲ以、領主用途並一国限日用ヲノ儀ハ、京都入用ノ備第一ニ心得同所ヨリ売出シ、一山城・大和・近江・丹波四ヶ国在町菜種・綿実絞油

絞残全余計ノ分有之候ハ売捌候儀ト可相心得候、共へ為触知候得共、山城・大和国ハ、本文ノ通其国

ハ勿論、京都町奉行支配国ノ内油不足ニテ、是迄売ノ儀ハ京都入用ノ油融通専ノ国柄ニ付、同所廻シ方

捌来ル場所モ有之候ハ、其分ヘモ無差支様売渡候上

ニ限リ絞候義ト相心得候、又ハ其最寄水車人力油稼、京都町奉行定メ株ノ者但領主用油之儀、無株ノ者絞候義ハ不相成、領内

ノ油有之候ハ、売捌方ノ儀前条同様可相心得候、様取計、右絞油ハ京都へ売出並国用ヲモ相弁、余計来候分ハ、絞油屋共手広ニ引受、在々元方不及難儀菜種・綿実ノ外油絞候草木ノ実モ、在々ヨリ売出シ

冥加銀、向後免除申付候条其旨可存候、屋等惣テ油商売ニ携候モノ共、是迄 公儀へ納来候四ヶ国在町水車人力絞油屋其外問屋・仲買・小売油京都・奈良・伏見・大津並山城・大和・近江・丹波

之

正路ニ売買可致候、且在ニオヒテモ絞草隠売又ハ持ノ融通ニ基キ相互ニ勤合、弥油絞増直段引下ケ候様油商売ニ携候者共一分ノ利益ノミニ不抱、世上一統右之趣此度改テ相触、冥加銀ヲモ免除申付候上ハ、

背ノモノ有之ニオヒテハ、遂吟味曲事ニ可申付候条、合、絞草豊凶ニ随ヒ相当ノ直段ヲ以可売出候、若違囲置、無故直段引上不埓ノ売捌方不致様一村限リ申Ⅱ監ニヲ買ロ至修ニ臣イニオヒラコ糸直腐テスノ丼

国々一同急度可相守候、

右之通御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ可触知者

也

同道 田沼中務少輔

柳生但馬守

免相願候得共、未間モ無之後々養生可致旨被(仰出大納言様御側御用人田沼玄蕃頭病気ニ付、御役)御

右於芙蓉ノ間御老中御列座、大久保加賀守殿被 仰渡

色々御世話有之候得共、

追々米価高直ニ相成候義

此節江戸表有米払底ニ付諸人及難儀候ニ付、

公儀ニモ

武家方ニ寄囲米等イタシ候向モ有之候哉ニ相聞候、

釭

之

天保四年十一月三日(御徒方万年記)

若年寄永井肥前守殿御渡、 於在々盗賊悪党者有之候節捕押候様、村役人・穢多非 御目付村瀨平四郎達

申立可任差図儀ニテ、自己ノ取扱ハ致間敷事ニ候、

然ルヲ盗悪事等ヲ相聞候トテ百姓等へ縄ヲ掛相糺候類

番非人茂助外二人村役人等迄、夫々御仕置被仰付候、 モ有之不届ノ至ニ候、既此度右及不届ニ候濃州領下村

領 以来右体ノ儀決テ致間敷候、 ハ領主・地頭ヨリ不洩様急度可申渡候 右ノ趣御料ハ御代官、 私

人共へ申付置候上ハ、無宿ノ者捕押候共、早速村役人 天保四年十一月十八日(御徒方万年記)

被致候、

溜詰

右於

御前被

仰付之、

御座ノ間

酒井左衞門尉

天保四年十二月四日 (御徒方万年記)

御座ノ間

位三位中将 御称号御名乗

天保四年十一月十五日(御徒方万年記)

若年寄林肥後守殿御渡、

御目付村瀬平四郎達

銀三拾枚

右御元服

御官位被

仰付之、

巻物十 御馬壱疋 御刀備前国祐光+枚1

松平恒之丞殿

家・寺社・町方共一同教合候心得ニテ、 其家々 ノ飯米

置早々江戸廻シ致シ、 可成ニ間ニ合候ハ、 余分ハ勿論、 問屋並脇店米屋共へ売捌候様可 **違作無之国柄ハ不貯**

德川宮内卿殿

右之通被献之、 御礼被申上之 御盃頂戴 御脇差 国山 信城

天保四年十二月廿二日(御徒方万年記)

近年引続御倹約被 若年寄林肥後守殿御渡、御目付堀小四郎達 仰出候得共、累年御入用相嵩、 殊

是不時ノ御物入莫大ニ付、御用途差湊御勝手向御繰合 御用途相重候二付、当巳年迄厳敷御省略有之候処、 御縁辺向御慶事其外御普請御修復等ニテ、不時

々被 間、 猶又御倹約被 仰出ノ通可被相心得候、且右年限中ハ不依何事 仰出候間、諸事文化八未年以来度 納方へモ相響可申候、依之来午年ヨリ戌年迄五ヶ年 不被行届、其上当年ノ儀ハ関東並北国筋不作ニテ御収

シ都テ臨時御入用ニ抱リ候諸願筋ハ被差控、[拘ク] 無拠申上ヲ以拝借相願候共被及御沙汰間敷候、右ニ準 面々ニモ

弥倹約相用候様可被致候!

大信院様御逝去ニ付掛被仰付相勤、

天保六年未二月江

下国御供被仰付罷下候、

大坂へ被差越江戸へ罷登り相詰、 同八年酉三月 戸詰被仰付、

中途調所笑右衞門殿へ被召付、

長崎並京

御

--- 196 ---

大判貯ノ儀ニ付御触ノ件 食物見世家数ノ儀ニ付触ノ件

上納金ニ関スル達書 辻切盗賊ニ関スル記事 水野越前守以下ノ褒賞 諸国人別改方之令達

枚)」の記載あり)「足国事鞅掌史料(紙数一三二年に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数一三二 齊 興公史料 在 有 有 天 保 年 天 保 八七 年年

同上

仙石家変事ニ関スル 廻状

蒲生郷右衞門書翰

七月十七日五両金新吹布令

町奉行以下褒賞ノ件 古金銀引替布令

丁酉豊作記事

鍋島様ヨリ御用番水野越前守殿へ御届書之写

目録

伝習セシムン

□藩士鳥居平八兄弟ニ西洋新式ノ砲術ヲ高島四郎太夫ニ

(天保八年山川港ニ英艦渡来ノ事実)

瀨川采女妻文

〔表紙〕

米穀直下ニ関スル令書 松平周防守家領没収ノ件 竹島へ渡海一件

齊昭ヨリ郡奉行並町奉行へ与フル親書 齊藤彌九郎書翰

〔封内沿海之守備〕

候処、同日候ニ付、此方ヨリ相渡置候関札ヲ以、本陣ヨリ相建置候ニ付、此方ヨリ相渡置候関札ヲ以、本陣ヨリ相建置肥前守儀此節為帰国去ル十三日当地発足川崎宿止宿仕

ヲ以本陣へ申聞候得共、関札之儀ハ本陣限リ取込難相小人目附當麻午兵衞組下田中熊八外五六人ョリ宿役人右関札 御目障ニ相成候間早々取込候様、御同勢之内民部卿殿川崎大師へ 御参詣懸ヶ 御通跡、

上囲ヲ破リ関札ヲ打倒候ニ付、番之者脇へ載セ置候ヲ者ヲ、手傘ヲ以打擲致シ刀ニ手ヲ掛候モノモ有之、其処、熊八外五六人ニテ、右関札へ本陣ヨリ付置候番之

成、

肥前守掛役人へ其段相届候上御挨拶可仕旨相答候

付、言語同断無是非次第ニ候、迄本陣ヨリ申越、家来之者ニモ右駅到着不仕前之儀ニ土足ニ掛ケ、且家来宿札迄モ引破申候段、肥前守途中

可申請旨肥前守申入候、尤肥前守御返相待、「專嘅↑」

御称号ヲモ不憚法外至極之致方ニ付、

右之人々此方へ

川崎駅

農之儀申諭、

成丈ヶ人別不減様取計、

且職分ニ付当分

候、右之始末ハ一橋殿ニテ御取調之処、名前其外相違逗留可罷在之処、長崎表御役向之儀ニ付無其儀旅行仕

仕候ニ付、御吟味之儀

右之段肥前守旅中ヨリ申越候ニ付、此段申上候、以上、相成罷在候ニ付、趣意相立候様乍恐幾重ニモ奉願候、肥前守ハ勿論、家来一同恥辱之限リ、何分其儘堪忍難

松平肥前守家来

三月十七日 羽室平右衞門

右ニ付此頃 一橋様御遠慮之由御座候、

三一四 諸国人別改方ノ令達

一被仰渡之御書付

候間、領分・知行所・役場等ニ罷在候家来ヨリ精々勧在方之モノ身上相仕舞、江戸人別ニ入候儀決テ不相成諸国人別改方之儀此度被「仰出候ニ付テハ、自今以後

印之願書為差出、右願之趣承届侯旨右役場ニ相詰侯家出稼之モノ並奉公稼ニ出府致シ候者共ハ、村役人共連

遠国ニテ当地へ願等手重之向ハ、割元役之者奥印致シ来奥書印形致シ相渡、小高之分知行所ニ家来不差置、

代官へ相断可任其意旨、寛文五年諸宗へ御条目ヲ以被届猥ニ不可令出家、若無拠子細於有之ハ、其所之領主、候様、其外出家致シ候者之儀ハ、無由緒者雖有弟子之

得ト吟味之上寺社奉行へ申断、聞置之挨拶有之上ニテ来ハ出家相願候モノハ、人柄並子細等領主・地頭ニテ仰渡候処、近年糺方等閑之向モ有之哉ニ相聞候間、以

候向ハ其通ニ可致、諸藩中無拠子細ニテ致出家候分ハ出稼之モノ同様取計、尤出家願等仕来ニテ添簡等致シ可差免、並廻国修行六十六部順礼等ニ罷出候者、前書

願書へ奥書致シ可被相渡候事、夫等ヨリ許状申請候モノ共モ、其度々添簡又ハ前同様是又寺社奉行へ可相断、且吉田白川陰陽師、神事舞太

ハ、一期之住同様之モノモ可有之、左様之類ハ呼戻シ近来御府内へ入込妻子等モ無之、表店借受候者之内ニ

在方人別不相減様取計可申事、

右之趣、在所ニ罷在候家来へ精々可被申付候、

三月

右之通可被相触候、

念慮ヲ絶、其儘人別ニ加リ候モノ、追年相増不可然儀在方之モノ御当地へ出居馴候ニ随ヒ、故郷へ立戻リ候

妻子等持候者モ可有之処、一般ニ御差返シニ相成候テニ付、今般悉相改不残帰郷可被仰付処、商売等相始メ

ハ難渋可致筋ニ付、格別之

御仁慮ヲ以、是迄年来人別ニ加リ居候分ハ帰農之

大工・左官・木挽杣其外諸職人等当分出稼之者へ、期在方ヨリ新ニ江戸人別ニ入候義以後決テ不相成事、御沙汰ニ不被及、以後取締方左之通被仰出候、

付ヲ目当ニ同居為致又ハ店貸遣可申候、役人奥書印形有之免許状ヲ持出府致シ候筈ニ付、右書月ヲ以御代官・領主・地頭役場ニテ承届、村役人連印

但右免許状へ家主方へ預り置、

人別帳へい不書入当

分出稼之者仮人別帳へ記置、期月ニ至リ村方へ立戻

|候ハ、其節免許状相返可申候|

奉公稼ニ罷出候モノハ、前書同様免許状ヲ持出府イタ シ候筈ニ付、右書付ヲ目当ニ受人ニ相立奉公済為致、

免許状ハ主人方へ差置暇取候節受取可申候

但右之通出稼之義御取締相附候迚、奉公人少ク趣 ヺ

以給書等セリ上候義ハ決テ不相成、武家方中間、町(釜タ) 儀ハ金壱両弐分ヨリ弐両ヲ限リ、若輩徴弱之モノハ 方下男共給金弐両弐分ヨリ金三両迄ヲ限リ、下女之

右限リ之外ニ取極、万一定給金高ヨリ余分ヲ望候 其段奉行所へ可申立候、若余分之給金申受候ニ

モ無念タルヘク候 オイテハ、奉公人・請人共夫々咎申付、召抱候主人

市中人別之儀毎年四月相改、右帳面ハ名主方ニ預リ置 翌年四月迄之内ハ出入人別ト唱、家主限リ人別記置候 故、其間之出入ニ付種々紛敷取計イタシ置候之趣相聞 候処、改方疎漏ニテ年附印形等相違致シ、且四月 3 IJ

不埓之至リニ候、自今已後年々四月両御役所へ一通リ

向後右改方之儀、家主方ニテ店子並家族召仕同居之モ ツ、差出、名主共方ニー通リ控ニ取置可申候、

両御役所之分共町年寄へ可差出候、 猶壱人別名主方へ呼寄、判元見届人別帳調印為致候上、 ノニ至ル迄、生国菩提所年附等迄巨細ニ相記名主差出

候者有之候ハ、、其段断書イタシ調印為致置、不時 増減ハ勿論、同居人之出入等迄委細留置、判形相改 但名主方へ取置候人別帳へハ、改後之存亡、嫁娶之

一年々九月ニ至リ、四月差出置侯人別帳名主共へ下ヶ遣 候之間、増減共断書致シ可差出候!

ニ奉行所ヨリ尋有之候節、聊差支無之様可致候、

一向後四月入別帳差出候得ハ、奉行所ニテ前年人別へ突 合セ年附・印形等迄取調候間、少シモ油断致ス間敷候、

町方之者共出家致シ候欤、又ハ頭ヲ剃リ道者願人等ニ 相成並吉田・白川陰陽師・神事舞太夫新規門下ニ相成、

吟味之上夫々可申付候、 身分相応之許状交候モノハ、町役人共町奉行へ可申出

御当地市中之モノ店借致シ候節ハ、是迄人別送リ無之

候得ハ、以来之元住宅支配之名主へ、転宅先キ支配名

主ョリ達書可差出候、

内ニハ、一期住同様之者モ可有之、左様之類ハ早々帰 近年御当地ニ入込妻子等モ無之、 裏店借受居候モノ之

郷為致候様取計可申候'

閑之取計致スニオヰテハ、名主・家主トモ役義取放之 テ、 右之趣厳重ニ相心得、 聊タリ共等閑之儀有之候テハ不相済儀ニ付、 別テ人別之儀ハ町役人共主役 若等

右之趣町中不洩様可触知モ ノ也、

上急度咎可申付候?

三月廿六日

四月七日御褒美三一五 水野越前守以下褒賞

水野越前 守

西丸火事ノ節早速罷出 山里御 多門其外所々火近ノ処

精出防セ、 御門々等エ Æ 諸事差図行届候段達

御聴候、 上意候、 此段可申聞旨

太田備後守

並御裏門火近ノ処精出防セ候段達 西丸火事ノ節諸事差図モ行届、 紅葉山芝方 御聴候、 此段可 御霊屋

申聞旨

上意候、

御霊屋火近ノ処精出防セ候段達 西丸火事ノ節早速罷出諸事差図モ行届、 御聴候、 紅葉山芝方 此段可申

脇坂中務大輔

聞旨

上意候、

西丸火事 ノ節諸事差図モ行届、 紅葉山芝方 御霊屋

增山河内守

並御裏門御太鼓換火近ノ処精出防セ候処達

御聴候

上意候、

此段可申聞旨

ノ節諸事差図 御聴候、 Ŧ. 行届、 堀 御 此段可申聞旨 裏門並御寿屋火近 大和守

西丸火事

所精出防セ候段達

小笠原相模守

御霊屋

火近ノ処精出防セ候段達 西丸火事ノ節諸事差図モ行届、紅葉山芝方 御聴候、此段可申聞旨

永井信濃守

処精出防セ候段達 御聴此段可申聞旨

西丸火事ノ節差図モ行届、御書院番所御多門火近ノ

右於奧被 仰渡之、

四月七日

一六月十九日

松平三河守

人数被差出候段達 御

西丸火事ノ節在邑ニモ候処、

松平大和守

松平大藏大輔名代

御聴候、

西丸火事ノ節人数差出候段達

松平右近將監

西丸火事ノ節人数差出候旨相達候処、早速人数召連 罷出精出、殊ニ下火鎮方等ノ儀モ骨折候段達 松平上總介

御聴

候、此段可申聞旨

上意候、

右ノ者共精出、殊ニ下火鎮方等ノ儀モ骨折候段達

西丸火事ノ節人数差出候旨相達候処、早速人数差出

松平兵部大輔

松平左兵衞督

御聴候、此段可申聞旨

松平周防守

牧野遠江守

松平肥後守

松平隠岐守

松平伊豫守

松平出羽守

候儀達

御聴候、

此段可申聞旨

西丸火事ノ節在国ニモ候処、

人数差出右ノ者共精出

名代 黑田甲斐守

松平美濃守

上意候

保 科 弾 正 忠

人数差出右之者精出候

西丸火事ノ節在邑ニモ候処、 此段可申聞旨

儀達 御聴候、

酒 井 左 衞

小笠原大膳大夫

御聴、

西丸火事ノ節為御機嫌伺罷出候処、

右於御黒書院溜御老中列座、

和泉守申渡之、

門尉

人数モ差出候段

西丸火事ノ節人数差出候処、

右ノ者共格別精出下火

名代 土屋采女正

土屋相模守

御聴、

此段可申聞旨

鎮方迄モ骨折候趣達

御聴候、

此段可申聞旨

西丸火事ノ節火消道具早速差出、

消防ノ儀骨折候趣

松平丹後守 松平右京亮

上意候、

岡部内膳正

名代 岡部主税 永井飛彈守

西丸火事ノ節在国ニモ候処、 人数差出候段達 御聴

候

右於御白書院縁頰老中列座、 和泉守申渡之、

牧野越中守

西丸火事ノ節人数召連罷出、 格別精出下火鎮方迄モ

骨折候段達 御聴候、此段可申聞旨

上意候

松平紀伊守

井伊右京亮 名代

毛利山城守

毛利左京亮 名代

久留島采女

松平壹岐守

土井能登守

御聞候、

西丸火事ノ節罷出人数繰入候段達

名代

木下大和守 黑田豐前守

御聴候、此段可申聞旨

西丸火事ノ節人数召連罷出候趣達

平野兵庫介

上意候、

板倉周防守

御聴、此段可申聞旨 西丸火事ノ節人数召連罷出精出候趣達

上意候、

右於仝席仝前仝人申渡之、

井上河内守

#上左太夫 名代

寺社奉行勤役中、 西丸火事ノ節紅葉山へ罷出消防差

御聴候、此段可申聞旨

上意候、

図骨折候趣達

牧野備前守

紅葉山へ罷出消防差図骨折候趣達

御聴候、此段可申聞旨 西丸火事ノ節、

- 204 --

上意候、

青山因幡守

西丸火事ノ節早速紅葉山へ 罷出消防致差図最初 3 IJ

格別骨折候趣達 御聴候、 此段可申聞旨

松平甲斐守

格別精出候段達 御聴候、 此段可申聞旨 西丸火事ノ節父甲斐守病気ニ付其方儀人数召連罷出

右於御白書院緣頰老中列座、 備後守申渡之、

上意候、

太田備後守

西丸火事ノ節早速人数差出 御霊屋消防格別相働候

御聴候、 此段可申聞旨

段達

上意候、

右於奥被 仰付之、

町奉行

筒井紀伊守

時服三宛

西丸火事ノ節早速組之者召連骨折候ニ付、

大草安房守

拝領物被

仰付之、

全

若林市左衞門 名代

之候御預ノ諸品並諸書物・絵図面等持退、 西丸火事ノ節早速西丸へ罷出夫々致差図、 彼是骨折 詰所ニ有

候ニ付、 拝領物被 仰付之、

村瀨長門守小普請奉行

西丸火事ノ節紅葉山 御霊屋へ相詰、 御山内人数繰

全

入差引等致骨折候ニ付、

拝領物被

仰付之、

全断

野田下總守

西丸火事ノ節早速西丸へ罷出夫々致差図彼是骨折候

酒 井 **矗** 之 助

大久保彦八郎

酒井八十之丞

坪 内 左 京

羅紗二切間

時服三

宛

酒 女

室 賀 兵 庫

藤惠之助

内

在組ノ者へ差引仕候ニ付、拝領物被

西丸火事ノ節忌中ニ候故、

西丸大手御門外二相詰罷

仰付之、

近 部

西丸火事ノ節精出骨折候ニ付、拝領物被

仰付之、

御目付

全火消役 能勢 帶 刀

時服三宛

時服三

西丸火事ノ節場所へ罷出骨折候ニ付、拝領物被 仰

付之、

但火事場見廻之節相勤ニ付

長谷川能登守 大御台様御用人

時服三

但火消役之節相勤候ニ付

時服三

御先手

但火消役之節相勤候ニ付 羅姆 但四 門 三 切

一 三枝宗四郎 二枝宗四郎

全宛

西丸仝

サ六日被下之、 忌中ニ付六月 水野采女 池田修理 大澤主馬

候節、 西丸御目付勤 一色主水 三枝左兵衞 松 井 Ш

平

玄

戸大内

藏 蕃

П

内

匠

松平早次郎

時服二宛

拝領物被 西丸火事ノ節場所へ相越消防差図ノ儀骨折候ニ付、 仰付之、 御使番 西丸御目付 福 中川半左衞門 長田六左衛門 大島久左衞門 伊丹三郎右衞門 仁賀保右京 花房長右衛門 島左衞門

> 西丸火事ノ節場所へ罷出骨折候ニ付、拝領物被 松平善太 土 屋 兵 夫 部

付之、

商井平右衞門西丸御表御門番ノ頭

仰

松平兵庫頭

西丸火事ノ節御裏御門並御番所消防致シ、 時服三 御門固等

和泉守申渡之、 右於芙蓉之間老中伯耆守列座、若年寄中西丸共侍座、 モ 宜敷諸事行届候ニ付、被下之、

時服二

火事場見廻 堀 鍋 田

主

大 小笠原彌八郎 岡 島 兵 内 税 庫 匠

西丸火事ノ節場所へ罷出骨折候ニ付、被下之、 西丸切手御門番ノ頭

堀

田

彈

Œ

銀十枚

大河内善右衞門

西丸火事ノ節組ノ者共へ差図行届、御道具並御老中 ノ判鑑・諸書物等不残持退骨折候段、常々心掛厚故

ノ儀候ニ付、被下之、

時服二 宛

金二枚

件 東右衛門西丸御腰物方

小坂 力五郎

西丸火事ノ節役所向一円火移候処、 持出格別骨折候故、心懸宜敷故ノ儀ニ付、被下之、 御差御道具不残

吉田猪左衞門小普請方

候ニ付、被下之、

西丸火事ノ節紅葉山へ罷出

御霊屋へ相詰彼是骨折

銀十枚

소

石倉小三郎

全断

西丸火事ノ節西丸へ罷出彼是骨折候ニ付、 被下之、

水見六郎右衞門 大御所様御用達

銀十枚

ニ付、被下之、

西丸火事ノ節御預ノ品々御焼失無之趣

取計骨折候

侍座、 右於御右筆部屋縁頰老中伯耆守列座、若年寄中西丸共 和泉守申渡之、

銀三枚

長坂果之進 小普請方改役

被下之、

西丸火事ノ節紅葉山

御霊屋へ相詰彼是骨折候ニ付

銀三枚

宮澤金左衞門

西丸火事ノ節早速西丸へ罷出骨折候ニ付、被下之、

右於躑躅之間若年寄中出座、林肥後守申渡之、

新村登八郎 御腰物奉行

川副勝三郎

不残持出候段、 西丸火事ノ節、 兼而申付方行届候儀ト相聞 西丸御腰物方泊ノ者共、御差御道具 一段ノ事

三 鈴 稻

> 垣 木

藤

樂

助 郎

橋貫之進

右於御右筆部屋縁頰和泉守申渡之、

銀五枚宛

/ 前田又三郎西丸御徒目付組頭

大久保熊次郎

近藤新十郎全組頭格

√阿久澤彌平治 御徒目付 御目見持格

西 全三枚宛

近

藤

孫

市

西丸火事ノ節骨折候ニ付、

被下之、

 \equiv 加 滿 浦 田 伴次 作 郎 藏 内

仝断宛

山

與

石

田 田

欣

次 四

郎 郎

| 齊藤彌左衞門西丸仝 堀 加 田 昌 啓 \equiv 郎 助

岸 北條 井狩 田 石 今 淺沼三郎兵衞 堀 戸 行 田中甚左衞門 鈴木分左衛門 中 川 本 越 田 方 Щ 樂之 誠 雄 嘉 兵 + 嘉 源 要 \equiv 五. + 太 兵 兵 丞 郎 郎 作 郎 郎 衞

全並

前

田

傳

次

郎

矢 Щ 原 土

場

《爲之助

一井口 善十郎大御台様御広敷添番 手 黑田源左衞門 島冨之

| 上村九左衞門 生 福 尾 岡半十郎 島三十郎 駒 藤 藏

茂呂八右衞門

本 田 方清三郎 々 | 芳 兵 茂 勇之丞 + 郎 衞

杉 淺

本鉞之

助

山六之助

助

百

瀧 榎 增田作右衞門 原 赤 佐 小 石 原 小 松崎惣兵 諏訪源四郎 久保田英次郎 高橋次郎三郎 加藤治左衞門 千種半右衞門 神谷曻大夫 齊藤宗左衞門 佐 藤愼兵衞 川九十 本圓兵 田 森宇源太 野傳之丞 田 寛 爾十郎 與三郎 次 郎 郎 衞 藏 衞

西丸火事ノ節早速罷出西丸ニテ骨折候ニ付、被下之、 西丸火事ノ節御供揃方並御道具取片付等之儀骨折候 西丸火事ノ節骨折候ニ付、 二付、被下之、 銀三枚宛 **全五枚宛** 全二枚ツ、 御/藤 田 ← 全見習 浦 全断 五十嵐榮之亟 小普請方仮役 ✓山田勝右衞門 大御台様御待 |山崎 又兵御掃除ノ者頭 被下之、 木村隆 柴 渥 本 津 美又兵 田 多 田 勝太郎 五 善 傳 之進 禮 郎 兵 助 衞 衞 藏 助 衞 十二月十日 火消役十組、与力同心共迄御金被下置: 右於焼火之間永井肥前守申渡之、 付、被下之、 西丸火事ノ節紅葉山 時服二 全二枚 銀五枚宛 全五枚 銀十枚宛 全三枚 御霊屋へ相詰、 ~ 堀田儀八郎御勘定役 大工棟梁 大工棟梁 **松崎彌十郎** 御目見持格仮役 **一 土岐丹波守御作事奉行** 馬場泰之助 館 大竹源 尾國桂次郎 鉉 郎 彼是骨折候ニ \equiv

銀壱枚 仝五枚ツ、 全五枚宛 同十枚ツ、 一甲 良 若 「エ脱ヵ」 仮役 | 山口榮之進|| 御披官 一豐田省吾御奥奉行格御作事下奉行 一和泉久兵衞全見習 (福永卯太夫) 福手大工組頭 生田 丈助 全小役ノ節取扱候ニ付 安西久次郎 山田午右衞門 長谷川藤四郎 金井嘉大夫 松永善之助 狹 被下之、 西丸炎上跡取片付方並惣体板囲其外骨折相勤候ニ付 銀十枚宛 時服三 仝五枚ッ、 ✓ 長坂閑之進 人見傳兵衞 吟味役同格 ┌五十嵐榮之丞 全仮役 一宮澤金左衞門全改役 ↑石倉小三郎 小普請方 野田下總守 小普請奉行

全一枚

城

白井金之進 彦右衞門

/ 荒井精兵衞

銀五枚宛

一平尾 良小普請方勤 良 助

一栗原次郎兵衛仝吟味役

全大工**棟梁**

全三枚ツ、

村松伊勢

右仝断大奥向所《仮板囲其外骨折相勤候二付、被下之、

先年火事ノ沙汰見合書

臺德院様御代

寛永十一甲戌年七月、 今度

將軍家御上洛ニ付、酒井雅樂頭忠世西丸御留守ノ処、

閏七月廿三日既ノ辺ョリ煙上リ、

西丸

御殿向不残炎上也居みト云

同十六己卯年八月十一日巳刻、 火事出来 御城中不残御焼失、 其時御天守ハ無御別条 御本丸奥御台所ョリ

其外御櫓向ハ少々残り有之、依之西丸へ渡御、

同十四日、今度 同十三日、 諸大名ヨリ品々進献有之、 御本丸御作事ノ儀被

仰付

松平伊豆守、伊丹順齋、曾根源左衞門右両人ヲ相

加、御作事四人ニテ蒙相談可申付旨、下略

松平越中守・松平美作守・松平能登守・青山大藏大 同十六日、水戸黄門公・井伊掃部頭・松平隱岐守

輔・本多下總守

右御作事御手伝被仰付之、

藤堂大學頭ニハ石垣御普請ノ儀奉書被差遣之、

被遣之、

同廿五日、

御本丸御作事ニ付、

御材木為見分所々へ

州・駿河・蒲原・ 但名前略之、尤両人宛駿州·両利根並安濃山 與田橋筋 ・下總・佐倉林並常州 甲甲

十一月三日、 江戸崎ノ林・伊豆国山中、 西丸仮御殿出来ニ付、今度御亭

へ可相

詰旨兼テ被 仰出ヨリ各登 城卜云、

建被 仰付之、

同廿二日、今日就吉日

御本城ノ御櫓多門等ノ御柱

閏十一月朔日、藤堂大學頭ョリ 御本城石垣出来ニ

付、於御広間御小袖銀等被下之、並家来七人へモ

御目見被 仰付被下物有之、名前略之、

十二月三日、今日依吉日 御本城御殿御柱建、

仝十七年四月五日 印御投鞘ノ御鑓御先へ持参、遠侍前ニ立置之、 御本城御移徙二付、巳上刻御馬

仝日巳后刻、二丸 付候面々、一同御目見永々苦労ノ旨 御黒書院御次ニテ、今度御作事御手伝御普請被 出御 御本丸へ 入御御半袴袖 御諚也、

仝六日御移徙ノ御祝儀御礼太刀目録ヲ以申上之御次

御次第略之、

第略之、

巖有院様御代

明曆三年丁酉正月十八日江戸大火、

但十八日、十九日西北風強、午ノ刻比新鷹匠町辺 \equiv

リ出火、

十九日午ノ下刻御天守へ飛火入 同夕申上刻西丸へ 御本丸並二丸不残炎

渡御

一五月九日、今日吉日ニ付 一八月十五日、二丸御普請手伝出来ニ付阿部備中守 御本丸御普請初、

九月廿七日、御天守石垣松平加賀守、

御目見上意有之、家来共迄時服、白銀被下之、

寺沢養違両所御普請始ル、細川越中守い 五月五日、御天守御普請始

銅御門中御門丹羽左京大夫、

右所々石垣手伝被仰付之、

前後 仰

相馬長門守・内藤豐前守・水谷伊勢守、 右来年御普請ノ方手伝被仰付之、

九月十三日牧野飛彈守石垣御普請出来二付、 御小袖

銀被下之、不相知

垣手伝被 仰付候処、両度ノ火事ニ逢候ニ付 御免

萬治元年二月五日、戸田采女正事、切手中仕切御門石

為代中川山城守被 仰付之、

三月廿五日、 伊豆·相模両国御材木為見分両人被遣

脇坂中務大輔

全断御化粧之間 七月十日、来年 銀被下之被仰付候月、 九月朔日、 同月十四日、 御方様 翌年二月十一日初 同十一日、来年御普請時節手伝 来正月下旬参府候様奉書伝之、尤一万五千人充ノ積 ニテ召連之、 全断 御黒書院 全断御対面所 御台所 御守殿 御 広 間翌年二月御普請始 御客之間 御座之間 遠侍 御本城御普請出来ニ付、 御本丸御普請手伝 御本丸御作事手伝於御広間 後日向守 松平山城守 松平 後代ニ亀井能登守北條出羽守 伊達大膳大夫 九鬼孫八郎 松平伊賀守 松平備後守 脇坂中務太輔 眞田左衞門 植村右衞門佐 大和 家来共へ御小袖 守 萬治二年四月晦日明曆 **仝年正月十一日御鋸初、** 御普請手伝或ハ前廉御材木又ハ石垣手伝ノ面 九月五日御移徙可被遊旨ノ由同朔日被 松平越後守 物不上之、 以上ノ諸大名ヨリ御道具進上ノ御本丸百人組御番所 水野伊勢守 九鬼孫八郎 松平伊賀守 中川山城守 松平大和守 松平阿波守 松平右衞門佐 松平安藝守 納之、彼使ハ酒井日向守名前御品略之、 知行合六十万七千石 松平新太郎 佐竹修理大夫 龜井能登守 津輕越中守 小笠原信濃守 本多内記 伊達大膳大夫 細川越中守 御本城炎上二付、 惣奉行久世大和守 御普請惣奉行御普請受取十 松平周防守 森 松平大隅守 相馬長門守 植村右衞門佐 松平備後守 眞田右衞門佐 丹羽左京大夫 松平對馬守 内記 御普請有之、 仰出、 々

進

万石

久世大和守

以上二十八人ョリハ進物不差上

九月三日、於東叡山御安鎮ノ御祈禱有之、

御本丸御普請出来ニ付、御手伝ノ面々今日登城、所 々引渡有之、

同四日五日、 日巳刻西丸ヨリ御本丸へ御移徙御熨斗目[ママ] 六半時、右ニ付御家門並在江戸ノ諸大名登 御本丸へ御移徙ニ付、御供ノ面々揃 城、同五

御移徙ニ付同七日三千石以上ノ面々御太刀目録御礼

有之、御次第略之、

惇信院様御代 一同廿一日、今度御移徙ニ付 勅使院使参向

奥ヨリ出火 延享四年丁卯四月十六日今九半時頃、東風強ク二丸大 御殿向並御舞台迄不残炎上、同夕八半時

一同十八日、右炎上ニ付為伺御機嫌惣出仕有之、

頃鎮火、

辻切盗賊ニ関スル記事

天保七年四月十日

辻切並乞食共盗賊之次第

疵壱ヶ所、都合三十ヶ所程深手負倒相果居候、脇ニ弓 リ肩ヘカケ八寸程、同所ニ五寸程、面体ニ五寸程、 張挑灯紋所抱キ茗荷、前ニ万長印有之候挑灯捨有之候 絹小紋羽織ヲ着シ衣類木綿、竪縞花色帯ヲシテ、襟ヨ 右衞門屋敷下水際ニ、三十歳余ニ相見候町人体之男、 四月十日芝新門前松平大隅守辻番廻り場之内、千村平 切

此節右様毎夜所々ニテ刃撃沙汰多ニ付、町方へ厳敷御 昨夜四時見出候由

御茶ノ水下乞食小屋ヨリ相知レ壱人被召捕、此モノ実 触、且又岡部隼人別ニ加役増被 仰付候処、 四月十日

目付村上大和守、御小納戸大河内善十郎其外三十八軒 八二丸御留守居勤隠居致シ岸彦十郎次男ニテ、当春大

へ入候モノ、由、夫故死罪被

仰付候処、五月十九日又候右弟被召捕、是ハ人ヲ八人 キ者ノ由、 殺セシモノ、由、此兄弟七人之内三人出奔、外ハニブ 併出奔故両人共御茶ノ水無宿トノミニテ、

思召之品モ被為

在候二付難被及御沙汰候得共、

折角

旨

兄ハ西丸御小姓組勤居候得共御構無之由

此時乞食両人同類有之候処、 彈左衞門へ引渡諸小屋

ヲ胸元ヨリ剝、 取払ヒニ相成候由、 赤身へ塩ヲ付ケ、 右引渡シ候盗賊ハ、惣身ノ皮 棒ニテ敲キ殺シ候

由、又壱人ハ小刀ニテ顔中ヲズブ~~ト突立々々、

置無之故、 夫ヨリ胸へモ突立殺ト云フ、穢多ニハ刎首ナト云仕 多分盜賊筋之者有之節ハ、右之通之仕置

イフ由ニ候

三七 上納金ニ関スル達書 (齊興公へ)

天保七年四月十六日 薩州上納金之事

松平大隅守

其方儀、 祖父以来別テ蒙

御移替ニ付、御用途之内へ上納金仕度旨内願之趣達 御仁恵候ニ付、 何欤御用向 相勤申度、 就テハ来酉年

聴、 尤之儀御機嫌候、 然共右御用途之儀

> 御移替且当時所々御普請等モ有之候間、右之御用途ニ 存付候故、 金拾万両上納之儀御聴届被遊候、

四月十六日

モ

可被差加候旨被

仰出之、

右於御黒書院溜掃部頭老中列座、 伯耆守申渡之、

三八

食物見世家数ノ儀ニ付触

ノ件

天保七年五月八日

食物見世家数之儀三付触之事 御府内町々食物商人共、文化元子年相改候軒数六千百

候分ハ減切ニ申渡候処、年限中同三寅年芝牛町ヨリ出 六拾五軒之内、六千軒之目当ニ致シ、五ヶ年之内減シ

同八未年中調之上題帳為差出、 火ニテ人数相増、一時ニ商売差止候テモ難渋之趣ヲ以、 家業譲渡之儀親子・兄

之積リ減シ方取計候之様、五ヶ年ツ、追々年延申渡、 弟・養子之外不為致、右寅年ヨリ相始候分寄々商売替

去未年限:付取調候処、当時金五千五百七拾五軒有之 今般右軒数ヲ元高ニ相定、 以来取扱方左之通

不依何品食類商人之義、新規ハ勿論、 縦令似寄之品取

相続之儀、已来親子・兄弟・養子之外ニテモ差障無之

扱候者ニテモ、

食物商売等一切不相成事

テ是迄之通当人・町役人連印、 分承届候条、老衰又ハ病死跡等引受相続申出 其組合肝煎世話掛リ年 候節、 都

所替是迄之通差支無之分、当人双方・町役人連印之上、 番名主共之内致加印可申出事、

モ 前条同様加印ニテ可申出、名前替・家々替ハ印形改等 同断之事

病死後差当り相続人無之後家娘姉妹等之名前等ニ致候 タシ、是迄之通前同断連印可申出事 続申出候分ハ、 後見ヲ附可申出、 家持ハ新類地借・店借・地受人印形 並当人養子ニテ離縁ニ及 ۲ 跡 相

欠落等致シ欠所ニ相成候分ハ減シ 御仕置被 仰付減シ切ニ相成候モノ、其時々可申出事、 셋 家財妻子へ被下

候分ハ相続是迄之通前同断連印ヲ以可申出事、 人共、右申渡之外ニ候事、 但是迄之通堺町 葺屋町・ 新吉原町出稼之食物商

> 持場ハ不洩之様壱人別得ト可申聞、 合之名目、或ハ行事等相立候之様、 数不相増トノ 食物渡世之モノ譲式差定候分ハ無之、 右之通相心得、 御趣意ニ候間、 以後共尚又無依怙厳重ニ可取計候、尤 売買ニ紛敷儀並最寄似 名主配限リ月行事 右之趣ハ 右渡世柄之者人 町 御奉行

同之上申渡候儀ニ候条、 申四月 可被得其意候

天保七申年四月廿五日

Ļ

右之通被仰渡奉畏候、

為御請御帳ニ印形致シ置候、

以

右之通館市右衞門殿ニテ被申渡候、

天保七年 三九 大判貯 1 儀 = 付 御触

屋共へ勿論其外共貯置候者モ可有之哉、 近頃大判金相場格別高值ニ相成如何之事ニ侯、

致間敷候、

両替屋ニ無之町人大判取遣リ致シ候儀並

右様之義

大判貯之儀:付御触之事

両替

ノ件

ŀ

ル

筆

涙

流 =

ル

Э.

ク 水 墨

二数書

IJ

・モハ ν

カ

ナキ

ハ

思ハヌ人ヲ思フ

思

遠国へ 遣シ候儀 先年モ相触候通難成事ニ 候

右之通相触候条、 大判貯置候 モノモ有之ニオヰテハ、

吟味之上急度可申付候、 五月十六日

右之通松平和泉守殿ョリ 大目付 御書付御渡候、

===0 瀬川采女妻文

嫁ス、 此文ハ島津家小野攝津守娘、 閤秀吉ノ御覧ニ入ル、 采女朝鮮へ征伐ニ行シヲ慕テ贈リシ 不便ニオホシ召采女帰陳仰[陣ル] 同家中瀬川采女方へ 二、太

便リ 7 シ候ハネドモ、 ノ船ヲ待得テ、 立別レ ソ ` ㅁ 進候ヨリ後人知ラス、 ニ筆ノタテトモオホ ۲ ヲ

ソ ナ ラ ١ シ ス 思ノ ラ セ参ラセ度、 ャ フシ沈 ウツ、更ニ弁ヘス、 露ノ身ノ消果ヌ間 硯ニムカヒ 夢計 IJ

コ

カ

ル

胸

煙リハル、間モナク、

涙ノ

酮

٤

ŀ

カ

Ħ

ア 丰

シ

付

ラレ、

此文奥平家ニ残リ今ニ有トカ

ヤ

入ル

= 麗

ハ

ナ IJ

読置和歌ノ古事モ我身ノ上ト哀ニテ、

中

々

ソ

٤

7

1

ラ

御引合ニテカ ヌ昔ノ恋シキ、 カル浅ハカナル契リニ成マイラセ 只御オシ計給へ候へ、 1 カ ナ 候、 ル 神 会

セ

成参ラセ候、 者定離之習今更驚ヘキニ、 ヒ入進候、 中々浮世ニカキリナキ海山ヲ隔テナ 互ニ生レ逢 ハン 女ノ身ナカラロオ ・後ノ世 ノ風 ノ便リノ音信 シ キ身ト クオ モ

ヲ、 世ニ頼 唐土トヤラン モシ ク噂ニモ聞マイラセス候へハ、 御渡リ候半ト、 今一入ノ思ヒ 是ハ高 ノ身

立カネテ、 唯カリ染ニ引合給ヒシ中立ヲサ ヘウ ラミ

タリサ ヌ/ 計ニテ候 ヘス鏡 Ի 成 明カタハ身ハカクテサスラヘ 1 カケ 過シ夜モス ハ ナ ĺ, カ ラカ ウラミテハ身ヲカ タリ 尽シノ手枕 ネ、 君

チ古歌ノハシ是ヲ記念ト涙モウカミナカラ、 ウチモ カタミ、 才 誠ニ コ レヌ物カラ夢ニサへ見進候セヌ身ノカ 袖ョ IJ 外 = モ ラス間 モナク、 残シ置給 朝 デナタ

シ +}-=

ナ ٢

= シ

۲ ツ、 ヌ V ハ ヤ人ニミエツラン 夢ト知 ij セ #

サラマシヲ 小町 カヨミシ言ノ葉モ誰イタツラノ

ウキ世ソカシ、

カ 今一度逢マイセント思フニツケテ、アサカ露ノ玉 命ナリケリ キリトテワカ ルル、 誠ヤミツカラモ甲斐ナキ命ナカラへ 頃ノカナシキニ イカ 7 ホ シ 丰

召下候ハヽ、嬉シクオハシマシ候、申度事トモハ四方 我身ニイカテマサルヘキヤ、 ノ緒モナカレト計祈ルフミ、 余ル計リニ候 ハ、残リ多書トシテ進候、 露ニモ承リ候半ヤ、アマリ人メモハツカシク、 クリ返シ其後 ノ御ユカシサハ、イカナル折フシニカ へトモ、アハタ、シク出船 目出度カシク、 何事モー~アハレト思シ 松浦佐世姫カ思ヒモ今ノ ノヨシ申侯

牛 我物ナカラナツカシク侘ヲ出ヤラヌ、 ・オモヒノフチト成計ニテ候' 、ノ恋衣、 君ユヘニカクソトオモヒ進候ヘハ、 ネヤノウチ深

タラン

カクアラン行衛モ知ラテ頼ツル

我心ヲモ誰

ニカ

山ヲヘタテ明暮心細ク、

我身ノ命露トモキへ候ハヽ、

ム涙

ノコホル、ヲオソフル袖ノクチハテ、、

ヤツル

ッ、

ト思へい

書オクル我手ナカラモウラヤマシ

恋シキ人ノ見

此歌ミツカラコカレシ心ノウチョリ筆ニマ

カ

セ参ラ

ソモシサマ御植置ナシ、花、

ノ御事ニ候ヘハ、ウツクシク咲ミタレ参ラセ候、 今ホトハ弥生ノ中頃 ソモ

ハ華ヲチラス嵐ヲウラミ、暮ニ閨ノ内ニ入枕ニフシ、 リニ心ヲナクサメ候半トウチナケキ、ヤウ~~ シサマノ御カタミト明暮詠進候、 散ナン後ハ何ヲタヨ 明ヌレ

御スモシ給リ候へ、先々申候半ハ出船ニテ急候ユヘ、 カラ月ヲ友トシ、ヒトリ心ヲスマシ物カナシキ事ニ候、

更ニ目モアヒマイラセス、人メヲ忍ヒ華園ニ立出夜ス

文ノ次第違ヒ参ラセ候、古年二月モウチ過イ、ヤヨ

ソ モスカラ肌ヲハナサスソモシサマニ添イ進候心地ニテ 十八日ニウツクシキ姫ヲマフケ進候、 タテ 進候、 扨モく一同シ世ニ住ナシカヤウニ遠キ海 昼ハ膝ノウへ夜

頓テ御帰陳ノ折フシニハ姫ヲミツカラ忘レ[囃カ] 覧下サレ、 カタミト御

アハレー~ニ互ノ玉ノ緒モ長クオハシマシ

-220-

竹島へ渡海一件 三トセニモ成リ候ハテカヨウニ引ワカレ進候、イカナ 朝鮮国持地竹島へ致渡海候一件、尤携有之モノ共名前 出度カシク、 申度候、十四歳ニイトカリソメニ枕ヲナラヘ、イマタ 候ハ、、今一度御目ニカ、リ積ル御事トモカタリ尽シ 申度候へトモ筆紙ニモ書尽シカタク筆ヲトメ進候、 ルムクヒソト科ナキ神仏ヲモ Ξ 入牢 今般大坂町奉行ヨリ引渡相成候モノ 竹島へ渡海一件 松平隱岐守御預リ所 松平右近將監領分 石州那賀郡濱田松原浦 金津屋きく方ニ無人別ニテ罷在候、 当時無宿 カコチ申計リニ候、細 金津屋八右衞門 目 々 左之者トモ引合候迄ニテ不致渡海、引渡ハ無之者共故、 此モノ共六月十日引渡相成候、 入牢 前書同断小豆島 松平安藝守領分 讚州草賀郡小豆島馬木村 大坂安治川南弐丁目 藝州豐田郡諸江島瀨戸田川西町 播摩屋善右衞門借家 船乗 淡路屋 船乗 同六十二歳平右衞門 局七十歳 善兵衞 新兵衛 新兵衛 同四十九歳 重助

本屋宇兵衞支配借家 中國屋庄助 中島町

長門屋 傳兵衞借家 長門屋傳兵衞借家 江ノ子島東町

大和屋喜兵衞借家橘町

大津屋茂兵衞支配借家 大津屋町屋町

海辺堀川町 伊勢屋與兵衞

右携有之趣相聞候、

松平周防守家来

賴 母

置候間、

為冥加濱田沖竹島ト申方ニテ魚沢山ニ付漁被

六月十四日夜

此度呼出シ

橋本三兵衞岡田賴母召仕

ト通リ尋之上 高弐百五十石大谷作兵衞

松平周防守家来

揚リ屋入

高弐百石

三澤五郎右衞門 村井萩右衞門

石州濱田廻船問屋淸助悴金津屋八右衞門当時入牢、 右於井上河内守宅申渡之、

親

助ハ死去家名絶候処、六ヶ年前ニ悴八右衞門江戸屋敷 満助ト申モノ、先年濱田屋敷へ大金之損毛ヲ掛ケ、 願出候ハ、 年来親御厚恩ヲ請ヶ其上多之御損毛ヲ懸 淸

年 寄 松役

井 圖

書

此度呼出シ

島崎梅五郎 林品右衞門

楢崎百八郎

役人へモ其段被 仰付候ハ、、 年 々御運上奉差上候、 仰渡、 八右衞門モ濱田へ差戻シニ 御聞済無之濱田御 相

成候処、

押テ取計候由

右竹島ト申ハ濱田領沖合之島ニテ、 込候テ、 寄之島ニ候処、 漁船之姿ニテ異国人之交易致シ候シ 右島ニテ日本之刀剣之類ヲ魚猟船 無人島ニテ朝鮮向 电 刀剣 積

江戸並諸方買集、 道中筋 ハ 濱田用物之給府ヲ用 ۲ 候

七月十日

六万石

松平周

大谷作右衞門 局防守家来

石川日向守家来へ御預ヶ

三澤五郎右衞門 村井萩右

[衛門

石川松原浦宿

之由之一件、

右於井上 一河内守宅的藤隼人正 立 合、 河内守申渡之、

私家来八十郎、 七月十日 隠居岡田秋齋・松井圖書・林品右衞門

申 用意仕候処、 立之積御座候処、秋齋義廿五日夜中ヨ ∄ 同廿六日夜ヨリ腹痛熱気強ク、 IJ 日濱田表へ相達、 島崎梅五郎・ E 家来之モノ相達候付、 ノ品々呼寄着次第可申聞旨、去月九日井上河内守 去月廿八日夜半頃秋齋儀自殺仕相果、 楢崎百八郎、 則夫々出府之義申付、 急飛脚ヲ以申遣候処、 八十郎召仕橋本三兵衞 両人共出立之積夫 リ中暑、 同廿七日出 圖書義 同 圖

役人ト 書義ハ同廿九日暁是亦自殺仕相果候旨申出候付、 田表役人トモ急飛脚ヲ以申越昨午刻相達候間、 ŧ 差遣相改候処、 自殺ニ 相違無御座候之旨、 秋齋 早速 濱

之御届申上候、 以上、

依

口 量

上書、

医師共差出候書付相添、河内守方へ相届申候,

書疵所改書付、

岡 田

八十郎並圖書実父隠居松井遊山

安善治

| | 右衛門借記 | 川南弐丁日

八右衞門

· 善兵衞

壱万石

伊 東播摩守家来へ御預

松平周防守

七月十九日

申七月廿七日

右ニ付濱田表へ為検使罷越候モ

町奉行

筒井伊賀守組

与力 吉田百助

軍里權八郎 年寄同心

物同心 森本與三郎

榊原主計頭組

服部嘉太夫 年寄同心 後藤三郎兵衞

大芦五郎右衞門 物同心

右へ此度松平周防守家来岡田賴母・松井圖書儀、 於石

州濱田自害致シ候ニ付、右疵為見分罷越見届候様申渡

同

七月廿六日

吟味中石川日向守家来へ御預ケ

亘

元大坂蔵屋敷留守居同人家来用人格馬廻り

同

ト通り尋之上同人へ預ケ差返ス

勘定頭

齋藤與左衞門

同

足軽

足軽ト申席ニ相成候由、百八郎儀ハ町人ニテ帯刀差免差当百八郎

同

周防守御届書ニハ秋齋ト有之、右ハ一件起リ候付俄

之、

ニ隠居致シ候由、 右ニ付名前同人ニテ違申候由、

組

見分ニ参リ侯付、右死骸石灰ニテ埋置候事之由、見

分ニ参リ候与力・同心トモハ殊之外歓候由トイフ、

物語覚聞之、

松平周防守家来

大坂勘定役

吟味中酒井修理大夫家来へ御預ケ 島崎梅 五郎

岡 田 橋本三兵衞田八十郎召仕

吟味中石川日向守家来へ御預ケ

石州濱田松原浦 和濱田松原浦

ト通り御尋之上入牢八月三日宿屋預ケ申六十壱歳 きく

右きくへ差添

同所浦 岩國屋善九郎

きくニ差添罷出候ノミ

守宅同人申渡之

右井上河内守・内藤隼人正・筒井伊賀守立合、

於河内

リ候哉、右又藏儀出奔之由ト申儀候事、

之通り、

有金八百弐拾七万八千両余

土蔵三百七拾ヶ所 此内

船四百五拾四艘

但船乗共九百八拾人余

但此外御呼出シ出府之モノモ無之、

播州姫路浦ニ罷在候高田又藏ト申モノ、所持之品々左

米拾九億八千石 唐船積送り候 由

百三十三ヶ所唐物入

居宅間口九拾七間、奥行弐百七拾壱間 有米三拾九億壱万石余

此米四斗俵二直

九拾七億壱万俵余

右之通有之候由

申六月

右へ此度竹島一件差起候所、 ハ候得共、石川濱田無宿金津屋八右衞門召捕候風聞承(無か) 米穀之引合モ致シ候付、井上河内守殿掛ニテ吟味中ニ 七島へ渡朝鮮國ト及通路

七月廿七日

松平周防守家来八十郎父隠居岡田秋齋·松井圖書儀, 井上河内守殿ヨリ早々御呼、着次第可申出旨御達有之

候処、右秋齋・圖書儀御呼出之身分ニテ、右両人トモ

自殺之始末ニ至候ニ付、

周防守差控之儀御用番御老中

様方へ御先手衆ヲ以相伺候処、先不及差控旨御差図有

六月十九日頃、井上河内守家来津田紋右衞門ョリ岩淵

之候段奉札ヲ以申来、

文右衞門へ咄候由承候処、 河内守殿宅へ御呼出シ御吟

味有之候所、 三四人相揃不申候故御吟味昼頃ヨリ初リ

終夜相懸リ、 人揚屋入ニ相成候由、尤周防守殿家来濱田表ニ罷在候 漸翌日昼頃迄モ相掛リ、 大谷作兵衞初三

加賀守殿へ河内守ヨリ被相達候事、 呼下シ相成候由、 無程出府可致旨御掛リ御老中大久保 所替ハイツニ可相成哉 右大変差起井上家

家老岡田賴母・松井圖書ト申モノ両人外ニ両三人モ御

向相分カネ、 当惑之由トイフ、

モ早々館林へ引越度候得共、

大坂表ニテ船頭トモ三四人被召捕吟味候処、不似合之

品々売払、其外所持モ有之由不審掛リ猶又相尋候処、 差下シ候旨、尤当月十六日頃松平周防守家来江戸表 交易致シ候様申付、 石州濱田ヨリ朝鮮國地内竹島へ相渡、 大坂町奉行ヨリ右船頭共江戸表 北海中之島ニテ

河内守家来津田紋右衞門申聞之、 罷在候、元メ役其外三四人有之趣追々被相尋候筈之旨、

周防守父隠居松平下野守へ、去ル二日大久保加賀守ヲ

御尋之義相伺候処、月次出仕遠慮之様ニ可相心得旨、

十一月七日

越加賀守申渡之、右書付豐後守相渡之、 右大久保加賀守宅オイテ、 神尾豐後守・榊原主計頭罷

売薬製家業 松平出雲守領分越中国馬山町人

備中屋理兵衞老病ニ付、

家業悴へ 相譲候、

当時

売捌 긼

薬製

次男 亭太郎

理兵衞

十二月廿三日

申渡

周防守父隠居

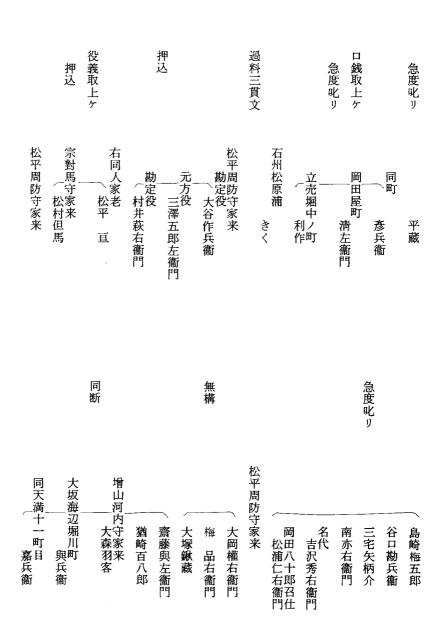
阿部能登守

其方元領分石州松原浦ニ罷在候八右衞門、竹島へ渡海

共、 目論見之儀家来共聞受、 無其儀既ニ八右衞門其外之モノ共致渡海、 重キ御役中之儀、領分取締向等別テ厳重可申付処、 彼是取計候儀ハ不存由ニ候得 右体家来共

申聞旨 思召候、 守申渡之、 對馬守記録書抜一覧ニ差出候節、 右今曉於松平和泉守宅、大目付榊原主計頭相越、 発足以前於在所致自殺候段、 相達候ハ、無卒爾様可被申付処、 其方家来松井圖書・岡田秋齋共尋之儀、 ٤ 不東之取計致シ候ヲ更ニ不存罷在、 候哉之段相糺候心得モ無之、不束之事ニ被 下野守永蟄居被 達之、 御目通差控之格ニテ可有之候、 但右ニ付差控相伺候処、 依之永蟄居被 御沙汰ニ 十二月廿三日 候 仰付候付 仰付モノナリ、 名代 千村彈正少弼松平周防守 此義ニ付テハ差控不及旨 不行届之事二候、 何故右島穿鑿 無其儀既ニ両 家来御咎被 殊ニ松平亘 寺社奉行 此段可 人トモ = ∄ 仰付 和泉 ヲヨ IJ 宗 IJ 同 封廻状写 軽追放 死罪 候 候付、 預り置候本品取上ケ 酒代銀取上 大坂へ差返シ永牢 中追放 猶亦差控相伺候処、 / 橋本三兵衞 岡田八十郎召仕 松平周防守家来 松原浦無宿 大坂安倍川南弐丁目 橋町江之子島末町 中橋町 新戎町 新戎町 橘町 此義 定七 源藏 庄助 ニ付テハ 八右衞門

不及差控



申者也 天保七申十二月廿三日

右於評定所井上河内守・ 榊原主計頭 水野采女立

右申渡之次第

河内守申渡之、

十二月廿三日

今度松平周防守元領分石州濱田松原浦ニ 右衞門、竹島へ致渡海候一件吟味之上、右八右衞門其 罷在候無宿 冗

来渡海停止被 魚漁等致候トイヘトモ、元禄之度朝鮮国御渡相成候以 外夫々厳科ニ被行、右島往古ハ伯州米子領之者共渡海

仰出候御場所之有之、都テ異国渡海之義ハ重キ御製禁〔暢ク〕 = 候条、向後右島之義モ同様相心得渡海致間敷旨、 勿

論国々之廻シ船等海上ニオイテ異国船ニ不出会様ニ乗 カケ可申旨、先年モ相触候通弥相守、已来ハ可成

丈遠沖乗船不致様乗廻り可申候、

洩様可触知候、 石之趣御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ヨリ浦方村町共不 **尤触書之趣板札ニ認メ高札場所へ懸置可**

石州濱田松原浦無宿

其方儀石州松原浦ニテ船乗渡世中、 北海筋渡海之節ニ

島ハ人家無之空島ニテ良材有之、海岸魚類モ多、魚業・ 見請、竹島ヲ朝鮮国附属之地面トハ不弁旨後申立、右

材木等取出スナラハ助成被存付、村井萩右衞門へ便リ

作兵衞へ申立置、 領主益筋ニモ可相成由ヲ以同島へ渡海志願之儀、 帰村後右之趣濱田脇ニ罷在候内、 大谷 同

ョリ尋請、必定作兵衞外弐人へ申立候次第通達有之義 家老岡田賴母初秋齋聞込之由ト、 同人召仕橋本三兵衞

ト 存**、** 地トモ不差極、手入等之義ハ可存止旨、萩右衞門ヨリ申 益地ニ相違無之旨噺聞セ、追テ右島ハ何レ之国

最寄之松島へ渡海之名目ヲ以竹島へ渡稼方見極候上、 越サセ候モ不取用、再応執成之儀三兵衞へ相頼候砌、右

来松井圖書へ心得居候趣三兵衞申聞迚、於大坂表銀主 弥益筋有之ナラハ取計方モ可有之由ニテ、秋齋並同家

— 229 —

衞 其趣聞請、 ョリ願書状申請、 同所周防守蔵屋敷詰家来島崎梅五郎へ三兵 中橋町庄助等ヲ申勧銀 主ニ引込、

善兵衞其外之者共乗組竹島へ致渡海、 殊ニ右目論見外ニ不届有之、 相成候身分ニテ、 元住所ニ罷在大坂安倍川 領主ヨリ濱田入津留所払 絵図面相仕立亦 南弐丁目

間敷旨、

秋齋内意之趣三兵衞ョリ承、

右筋之儀ハ乍心

秋齋並同家

異国人ニ出逢通路等致ス義ハ無之筈、 立木ヲ伐採、 既ニ徳分ト見込紛鋪草根等持帰候上、 素ヨリ国堺不分

既 Ŧ 明之地ト乍心得、 成就可致哉等相心得、秋齋其外之者トモヘモ申立、 ニ異国之属島へ渡海立木等伐採持帰リ候始末、 畢竟元領主先代ハ重キ御役柄故志願

国へ不軽儀不届ニ

付死罪申付

対

善若衞門借家 大坂安倍川弐丁目

ハ不相弁候 ŀ そ、

引請吳候後、 江之子島東町藤三郎銀主ニ 州松原浦ニ罷在候八右衞門、 其方儀竹島ヲ朝鮮国附属之地ト 藤三郎任願八右衞門ト 加 候間 右島へ渡海各目論見大坂 中合、 八右衞門 右目論見中 へ懸合向 元石

松原浦

= 罷在

候

八右衞門、

領主家来 ハ 不

3

IJ

同 Ի

意請、

右島方 同人 其方儀、

竹島ヲ朝鮮國附属ト

-相弁候

そ、

元石州

倶ニ大坂安倍川南弐丁目善兵衞致渡海由ニテ、

代二 モ濱田役筋ヨリ 差図之儀有之、 仕橋本三兵衞へ引合、殊ニ沖中ニテ外船ヨリ尋請候 同人へ不届有之領主ヨリ所払ニ相成候、 相成、 右領主松平周防守家老岡田賴母事、 勿論石州船之由モ 以来八右衞門 秋齋召 申

ヲ

相願、 助伊村藤右衞門へ右之趣咄聞セ、 追テ沙汰有之由之積請候義、 同人並新戎町源藏其 藤三郎俱 々阿州

来松井圖書へモ差出、猶又表方渡海差免有之度ト執成

得右島へ相渡持参候品等同人方へ致持参、

又ハ三兵衞へ申聞候上渡海可致抔、 外之モノ共同様渡海相企候節モ、藤三郎ョリ手 不届ニ付大坂へ差遣永牢申付 彼是致世話遣シ

借 家

次新戎町休兵衞#

船貸請、 - 230 —

ヲ持帰リ売払候始末不届ニ付、 申聞候之段、致承知乍心得渡海イタシ、伐木並草根等 老召仕橋本三兵衞渡海之趣相届候節、 漁又ハ伐木致シ、 既ニ出帆之節重助ヨリ松平周防守家 大坂へ差遣永牢申付、 表立難及差図旨

門承リ、

右衞門船ニ乗組罷越芸州瀨戸田町新兵衞外壱人ヲ案内 頼、類船證州馬木村重助外弐人一同右島へ渡越、

魚

兼テ雇人置水主阿州鞆浦加兵衞外弐人並其以前

同様渡海イタスナラハ徳分モ可有之旨同人申

之様子善兵衞外壱人ョリ承リ、

阿州下助

住伊村藤

若

衞

大坂中島町宗兵衞支配借· 家

同江之子島傳藏借家

主家来トモ承知之上ハ無子細義ト心得候共、 竹島渡海御制禁之儀不相弁、 |橘町喜兵衞借家 石州濱田元領 格別国

地

其方共儀、

ヲ離候場所へ猥ニ罷越候之段、如何之義ト心得候哉、其

村藤右衞門へ竹島咄聞候故、[伊脱ヵ] 定七ハ軽追放申付、 船貸遺、同人右島ョリ持越候材木類、定七売払候世話致 シ候次第ニ至リ、殊ニ其節讃州馬木村重助へ所持之手 帰帆後銘々承知之上、藤三郎ハ善兵衞俱々阿州下助 家来トモ表方難致差図筋之旨申聞候由ニ候共、 門差添為渡海、 目論見無覚束改及断、藤三郎ハ手先善兵衞ヲ以八右 ニ住居ヲ頼、八右衞門へモ引合向引請、 用出銀イタシ、又ハ右島へ之廻船造立、定七ハ半三郎 国道八尾町半三郎ヲモ申勧、 節松原浦ニ罷在候八右衞門勧ニ 遺候始末不届ニ付、藤三郎ハ預置候木品取上中追放 島方ヨリ持越候木品等預り置、 庄助ハ大坂三郷ヲ構江戸払申付 銘々之徳用ニ沈ミ渡海入 同人其外之者トモ渡海致 随ヒ、 庄助・ 庄助ハ追テ右 藤三郎 善兵 既二 住 同

大坂新戎町

平 藏

何人下男 作兵衞代

テ源藏へ売渡シ置酒代請取候始末不埓ニ付、 作兵衞市売致シ遣シ、 所モ不相糺、右島方ヨリ持帰リ、基伐木平藏口入ヲ以 平藏・作兵衞儀、 へ渡海之上伐木致シ候義ハ不存トモ、同人任申得 町内源藏其外之者トモ朝鮮國付竹島 口銭貰請、平蔵ハ右材木代銀兼 平藏 トに出 酒

其方儀、

椊八右衞門竹島へ渡海致ス義ハ不存共、

武兵衞支配借家 大坂冨田屋町

作兵衞ハロ銭取上、

両人共急度叱リ置

利兵衞借家 同立売堀中之町

右衞門其外大坂橋町定七任申、 竹島へ渡海致シ候上、 其方共儀、 市売イタシ 遣、 阿州下助住村藤右 \Box 銭貰請候始末不埓ニ付、 持越材木トハ不存之トモ、 福門並 得ト出所モ不相糺銘 讃州馬木村 利作 右口銭取上 重 右藤 莇

当時松平右近將監領分松平周防守領分

急度叱リ置

石州那賀郡松原村

致候始末不埒ニ付、 過料銭三貫文申付

主於役場濱田入津差留所払ニ相成候後、

折

々 止

宿等為 元領

松平周防守家来

三澤五郎右衞門 勘 定 大役 谷 作 兵 衞

村井萩右衞門勘定役

請 卑賤之者ト申儀ヲ猥ニ取用ヒ、 右領分ニ元罷在候八右衞門、兼テ渡海願之旨申立候節、 ニ テ**、** 其方共儀、 候ト 作兵衞へ 魚漁・ ハ乍申、 吹挙致シ、 主人元領分石州遠海之竹島 伐木イタスナラハ益筋モ可有之由ヲ以、 其筋御役人へ問合、 同人ハ 重役堀作大夫へ申聞 五郎右衞門・萩右衞門 殊ニ五郎右衞門 八人跡絶候空島 定不致迚猶穿鑿之儀、

在所ニ

罷在候同役岡田賴母事秋

儘心得ヲ以竹島之義承候処、

申立候程之儀ニ有之処、

齌ョ

IJ

申越共、

右体之筋ニオヰテハ、

挨拶之趣モ有之

得内々為致渡海、 八右 彼地オヰテ秋齋其外松井圖書へ便リ、 萩右衞門へ一応申遣迄ニテ一同儘打過候故、 リ五郎右衞門へ及文通、同人へ右之趣與左衞門へ申通、 衞門並岡田 差留可申処、 極手入等如何之由之旨、 衞門モ夫々在所へ罷帰候儀、 賴母事秋齋へモ為心得申聞候様、 右挨拶之趣其節主人旧領ニ罷在齋藤與左 国禁ヲ犯ス次第ニ至リ候始末一 挨拶有之上ハ不容易儀厳 右 八何 右之モノ共以心 モ 作兵衞 猶亦同人 国 地 同不 重 難 差

同家来家老 松井 亘

蛶

= 付、

押込申付、

衞へ申 之国地共難差極、手入等ハ不可然旨申聞、 其方儀、 立 主人元領分二罷在候八右衞門出府之上竹 同人ヨリ其筋御役人へ 同家来三澤五郎右衞門外壱人ヲ以大谷作兵 問合候処、 挨拶之趣治 右ハ何レ 島

> 過候段、 鮮國へ御渡ニ相成候節、 助可致処、 迄ハ不容易儀ト心得、 モ、 右始末不埒ニ付、 八右衞門等右島 宗對馬守家来杉村但 其旨主人へ申聞、 宗家記録書抜等申請其儘ニ 役義取上ヶ押込申付、 へ渡海為致候計ニ馴合筋無之 馬二 引合、 取締方ヲモ 彼島 先年 打 朝 勘

V

宗對馬守家来家 但家 馬老

ハ

不洩間鋪儀ニ付、 主家規格ナレトモ異国へ抱り候義ハ重キ事ニテ、『キカゥ』 尋候節ハ、 申立候仕来リニテ、 其方儀、 是迄御尋等有之節ハ、御老中方へ家老共ヨ 朝鮮國ニ抱リ候儀 右仕来リ之趣ヲ以兼テ之心得方相伺、 既ニ今般竹島之儀モ奉行所 家来ヨリ 重 丰 御 IJ 用 IJ 直 筋 相 =

公儀モ仕来リ通リト被差置、

相勤候身分不埒二付、 不束之心得ヲ以主人へ 相成候砌之記録等ヲ書抜、 役義取上ヶ押込申付 モ不申聞、 亘へ差遣候段、 右島先年彼国へ 重役ヲ以 御 渡

橋本三兵衛 岡田賴母召仕 松平周防守家老 衞

其方儀、松平周防守元領分ニ罷在候八右衞門出府之上、

之抔致密談、其節周防守先代重キ御役柄、 ケ間鋪哉、 来上ハ、松島之名目ニテ風之模様ニ寄竹島へ渡海 ニ差留秋齋へモ諫言可致処、執成之義八右衞門 通有之旨、八右衞門申聞候上ハ不容易筋ト心得、 目論見可存止旨、江戸表ニ罷在候周防守家来共 段秋齋申付有之共、追テ右島ハ国界不分明ニ付、 賴母事秋齋承込由ニテ島方之様子ハ八右衞門へ相尋侯 右領分ヨリ竹島へ渡海之内願申立候趣、主人隠居岡田 秋齋オヰテモ渡海為致度様子ニテ、 旁追テ表向差留之手当モ有之、右体申聞儀 右へ其方差働ヲ以八右衞門へ申聞方 竹島 秋齋モ ノミ ŧ 9 3 家老 厳重 リ文 差留 渡海 可 IJ ハ 苦 願 有

> 相察、 是以推量ノミ之儀モ、秋齋・圖書心得居候間、 内意之趣ニ潤色致シ、 八右衞門ヨリ銀主等為引合候ナラハ程能取合呉候様、 渡海之上及露顕ナラハ漂着之姿ニ可申成ト、 人松井圖書へモ及内談体見請、 成就致スナラハ往々身之為ニ可相成 八右衞門へ申含又ハ秋齋ヨ 全ク両人申合差含義 ト存、 猶大坂表 聢ト秋齋 リ 内 딥

州下 儀ニ至候始末、 付有之トハ乍申、 由申 **申聞候故、** 同所蔵屋敷ニ相詰候周防守家来ト -聞候節モ、 助住村藤右衞門其外之者共モ、〔伊脱ク〕 一己之存寄ヲ以紛敷挨拶オヨ 八右衞門其外之者トモ不軽 不届ニ付死罪申付 差図ハ難成ナレ 素ヨリ表立候筋 ۲ ٤ Æ ١ モ モ難申、 勝手次第二可相越 渡海致ス之様子之 へ致文通、 元来秋齋ヨリ 御国禁ヲ犯ス仕 彼是執 或八阿 成 申

松平周防守家来: 五郎役

ニ在勤中、 竹島ヲ朝鮮国属島 主人元領分ニ罷在候八右衞門右島渡海ヲ ì ハ 不 弁トモ、 大坂蔵屋敷 相

其方儀、

勤中故、

体、 庄助ト八右衞門同道罷越候砌、 三兵衞 銀主トモ問合候節ハ程能及挨拶呉候様、秋齋召仕橋本 目論見、 ヨリ申越候迚、得ト子細モ不相糺、 家老岡田賴母事秋齋並松井圖書モ厚ク差含居 右目論見兼テ心得居候 同所中橋町

取合次第兼テ右渡海之儀同家来ト申合候義 ハ無之

右始末不埒 二付押込、

同 谷口勘兵衞

同 年寄 三宅矢柄介

其方共儀、 所ョリ呼出シニ相成候上ハ不軽儀ニ付、右両人親類等 傍輩岡田賴母秋齋外壱人、吟味筋有之奉行

之由ニテ発足延引之段申立候節其儘承置、既ニ右両人 心附之義ヲモ不申談故、外壱人一ト通申渡、 差図有之迄ハ、変死之場所其儘可差置所等閑ニイタシ 共致自殺、殊ニ右死骸手当致シ置、 其筋へ申立候義モ 銘々病気

> 付 両人共押込申付:

松平周防守家来馬廻り

又左衞門義、 親類松井圖書奉行所ョリ、 吉口秀右衞門 吟味筋有之呼

違、検使以前自殺之場所取片付等致タス始末不束ニ付、 役共ヨリ申渡有之処、右之通取計迄ハ無子細義ト心得 出シ請候後、 自殺致ス節、遠国之義故死骸手当トフ重

急度叱リ置

同人家来 杉浦仁右衞門日八十郎召仕

ナラハ、万端其筋之差図請候様八十郎へ可申聞所、 同人祖父秋齋義奉行所ヨリ呼出シ請候後、 其方儀、主人八十郎幼年ニ付、 家事向引請取扱上ハ、 自殺イタス

始末不東ニ付、急度叱リ置

役申渡候通死骸手当致置迄ニテ、

検使前卒爾之致方候

重

取片付候次第、重役身分取計不行届候、右始末不埓ニ

|候故、検使以前右之モノ共親類召仕差略ヲ以其場ヲ

松平周 防守家来

大岡權右衞門

其以前八右衞門船ニ乗組罷越、

藝州瀬戸田町新兵衞外

渡海申合、

兼テ雇入置候水主阿州鞆浦嘉兵衞外弐人並

林 品右衞門

齋藤與左衞門

大

塚

鐵

矢刋方

楢島 百八 郎

增山河内守家来 羽 客

大坂海邊堀川町 兵 衞

同天滿町十丁目

兵 衞

其方共儀、 不埓之筋モ不相聞候間 同無構、

阿州下助住村藤右衞門義、竹島ヲ朝鮮国附属之地ト〔伊殿ク〕

不相弁共、石州松原浦ニ罷在候八右衞門領主家来ョ

IJ

内意請、 ス由ニテ、右島方之様子善兵衞外壱人ヨリ承リ同様 同人俱々大坂安倍川南弐丁目善兵衞等渡海

> 松平周防守家老召仕橋本三兵衞へ渡海之趣相届候節、 島へ渡海魚漁又ハ伐木イタシ、 弐人ヲ案内ニ頼、 類船讚州馬木村重助外弐人一同、右 既ニ出帆之節重助コ

IJ

材木並草根等持帰売払候不始末不届ニ付、存命ナラハ 表方難及差図旨申聞候段致承知、 如何ト乍存渡海致シ

馬木村仲藏ハ吟味中以前病死、 永牢可申付処病去致シ、右之外石州外ト浦安元、 同村重助・與左衞門、 讃州

郎・利五郎・榮藏ハ吟味中是亦致病死候間、一同其旨

藝州瀨戸田町新兵衞、

阿州鞆ウラ嘉兵衞、馬木村貞次

可存取ナリ、

右申渡之、

右申渡上ハ請書並証文申付之、

宗對馬守家来

松平右近將監家来

次郎兵衞 八請書申付

但

聞之、

松平阿

主人領分阿州下助住村船乗藤右衞門義、[牌號か] 年堂小平-作波守家来 太

山 根 佐 平

属之地ト

ハ不相弁トモ、

元石州松原浦

ニ罷在候

濵

(南弐丁 八右衞

ラ 水

日向 松守 井家な 久 兵 衞

石川

村家村来 鼎

伊

東

播 摩稻守

付、 間敷並無宿八右衞門其外之者共右体御制禁ヲ犯ス段、 右之通申渡候間得其意銘々主人へ可申聞 御咎ニ相成候上ハ、 對馬守家来杉村但馬儀、 以来右御用筋 朝鮮国御用向取扱役筋 ニ携役義 候、 且 八申付 次郎兵

吟味之上可被及御沙汰之処、 被相聞、右ハ苟モ 畢竟松平周防守家来岡田賴母事秋齋・ 御国体へ抱り不容易筋ニ付、[拘タ] 両 人上 モ濱田 ニヲイ 松平圖書等不届 厳敷 ・テ自

殺致シ候ニ付不被及其義候間、 右之趣是又主人へ可申

> 阿州鞆浦嘉兵衞外弐人並其已前八右衞門船 徳分モ有之哉ト大坂新戎町源藏申合、兼テ雇入置 目善兵衞ヨリ外壱人ヨリモ承リ、 領主家来ョリ内意請、 同人共ニ大坂安倍 同様渡海致スナ

藝州瀬戸田町新兵衞外壱人ヲ案内ニ頼、 村重助外弐人、 同右島へ渡海魚漁亦 ハ 伐 類船讃州馬木 木イ タシ、

加二乗組

罷

越 主

根等持帰リ売払候始末不届ニ 旨申聞候段承知イタシ、 既ニ出帆之節重助ヨリ松平周防守家来岡田 召仕橋本三兵衞へ渡海之趣相届候節、 如何卜乍心附致渡海材木並草 付、 永牢可申付所致病死 表立難及差図之 賴母事秋齋

但右請書申付之、

候

Ŧ

可為難儀間、

右之趣申渡候趣主人へ可申聞候

其旨可存候段、村役人共呼出シ可申渡之処、

遠路罷

H

申十二月廿三日

天保八酉年三月二日 竹島一件取扱候付御褒美被下筋

竹島朝鮮国

附

写、

御勘定吟味役

朝鮮国竹島一

銀七枚

御勘定組頭 評定所留役 評定所留役

同銀五枚充

专社奉行吟味物調役

都

筑

平

巻物三

件

石州那賀郡濱田松原浦松平右近將監領分

当時無宿金清事

兼兵衞方ニ無人別ニ罷在候

八右衞門

藝州豐田郡生島瀨戸町松平安藝守領分

舟乗 新藏

福州兵庫築島 [vv]

其方共儀、松原浦無宿八右衞門等竹島へ渡海イタシ候

山本新十郎

同五枚充

件、吟味取扱候付被下之、

米百礼九億八千石余

天保四年八月五日ヨリ彼地

へ積送り候、

右金八百廿七万八千両余 土蔵三百七ヶ所

船四百四拾艘

内百廿三所唐物蔵

船頭

九百八十人

Ξ 松平周防守家領没収ノ件

松平周防守殿石州濱田城主ナリシカト、仙石家一条ニ 付奥州棚倉へ当夏国替ナリケル 処、 異国へ米穀通商之

仰 付、 義当夏露顕ニヨツテ、家領被召上没収改易之上切腹被

家老・用人之分不残死罪ノヨシ、其姓名書附

— 238 —

家作間 九十間

弐百七拾間

奥行

有米三十九億一万石余

奥州棚倉領主

伊勢屋七兵藏 同海部堀川町

防守家来

賴 母

九拾七億一万俵余

此米四斗俵ニ直シ

代金拾両ニ付弐拾俵買へノ積リニシテ

此金四拾八億七千五百廿四両余

四拾八億八百廿八万五千五百廿四両ナリ、 松平隱岐守殿御預リ所

金都合

八十右衞門

船頭 十藏

播摩屋善右衞門大坂安治川弐丁目

萬屋宇兵衞同中之島

長門屋彌兵衞 長門屋彌兵衞 藤兵衞 四十三才

右

三津五右衞門

早右衞門

申六月二日入牢

米穀直下ニ関スル令書

成丈精々下直ニ売渡候様市中米屋共申渡候条、其旨相 当夏以来雨天続二付米榖其外食用之諸品払底二付、 可

松本三太郎

村井藤右衞門

当時萬八郎 島崎梅五郎 松中團右衞門

大谷作兵衞

候、若右之趣不相用米穀貯置シカ、買メ又ハメ売致候諸品々俵モー己利潤ニ不抱、成丈下直ニ売渡候様可致取入次第、京都米商人之内へ直段相対之上随分下直ニ取入次第、京都米商人之内へ直段相対之上随分下直ニ取入次第、

八月廿一日

者於有之ハ急度咎可申付旨、

洛中洛外へ可申通事、

三四同上

近七米直没高直ニ 甘戎蛏キ度世之者共可改雑歩!一九月廿二日御触書写

体之儀ヲ遠慮致シ候者モ可有之哉、銘々志ヲ以テ教遣困窮之者共へ教抔トラセ候義ハ奇特成事ニ候、自然右々ニテ心ヲ付助合取続候様取計可遺候、町方志有之者近比米直段高直ニ相成軽キ渡世之者共可致難渋間、町

米高値ニ付テハ末々軽キ者共ハ勿論、身上柄相応之者候、

共ニテモ、粥或ハ麦等取交食用イタシ候者有之趣ニ候、

長等文で高合変子矣テモ、也己又、立二十女ヲ己意、右ニ付身上柄宜多人数相暮候者共、其店々ニテ粥或ハ心ヲ用ヒ麦其外何ニテモ食用ニ可成品取交食用可致候右様心掛候得ハオノツカラ余米出来候得ハ、此上厚ク

助ケニ相成候得ハ、聊無遠慮何トモ食用ニ可相成品取ハ心得違之事ニ候、多人数相暮シ候内、弥食用余米之遠慮イタシ候向モ可有之哉、大体之義遠慮イタシ候義麦等取交為給度存候テモ、他見又ハ互ニ外並ヲ見競へ右ニ付身上柄宜多人数相暮候者共、其店々ニテ発或ハ

米穀ハ食用第一之義ニ付精々下直ニ売候様市中交給候様可致候、

、申渡、其外食用之品モ成丈下直ニ売渡候様、

相成候テハ下々及難渋候間、格別心ヲ付下直ニ可売渡論之事ニ候得共、米穀小売之分相場違高直ニ売出候様申通置候得ハ、銘々其趣相弁成丈下直ニ可売渡義ハ勿

申し引右之趣洛中洛外へ不洩様可申通候事:

候事、

申九月

三二五 仙石家変事ニ関スル廻状

先達テ-米屋共

依之急度可被為

仰付候得共、若輩之儀ニモ候間格別

之思召ヲ以テ、高五万八千八拾八石余之内、城知ハ其

但州出石大変;付当天保未年十二月九日被 仰渡封

廻

儘被

差置、

弐万八千八拾八石余被

召上三万石高

状

仙石道之助

名代能勢惣右衞門

玉虫十左衞門

有之者ニ付捕渡之儀筒井伊賀守奉行町 へ申越之間召捕

虚無僧友鶖儀不届

其方元家来ニテ出奔致候神谷轉事、

被蒙御詮儀候処、家老仙石左京義、其方家政ヲ取乱シ 其方家政向不正其外不容易儀共相聞へ、依之於評定所 候、然ル処他之引合有之ニ付寺社奉行ニテ及吟味之処、

為詰死罪其外之仕置申付、且又字野甚介等左京ニ合同 計ヲ以テ主人為筋ヲ申立候家来共ヲ讒訴之趣ニ、 吟味

身分不相応奢多ク起過致シ、殊ニ其身之非ヲ取隠、

意不軽不届之取計致候始末及白状候二付、夫々御仕置

家政取乱候ヲ、其心得モ無之段不調法ニ被 仰付候、政事向之儀ハ第一之儀ニ候処、家来共 思召侯、

> 被 成候、

且又閉門被 野河内守、御目附大澤主馬·羽太庄右衞門罷越' 右於伯耆守松平。宅老中列座同人申渡之、大目附初鹿 仰付之、

封廻状

獄門

死罪

仙石道之助家来

仙石左京

宇野甚助

年寄

岩田靜馬

年寄見習 仙石小太郎

遠島

私ニ日、 防守殿舎弟松平主税子トシテ左京へ養子ト云、 実へ御老中松平周防守殿妾腹実子、周

年寄

叛逆ノ発端此小太郎ニ初ルトイフ、

杉原官兵衛

重追放

— 241 ·

大 森 定内父隠居 居 青木彈右衞門

渡遣ス介家来河野丹次へ引の家来河野丹次へ引可申付ニテ仙石道之主人方ニテ相応之咎

医師

鷹

取

巳

百

軽 **追放**

町 奉 惠行 帯

糖奉行本本行 又左衞門

者頭

無役

早

开

保 輔 勘定奉行 岩田丹太夫

山本耕兵衞勘定奉行

登

中追放

松間寺宿主上總国三黑村普化宗元仙石道之介家来神谷轉事

揚屋

私ニ日、永入牢カ

右評定所ニ於テ脇坂中務大輔

神尾豐後守・榊原主計

中務大輔申渡之、

申渡之覚

頭

内藤隼人正・村瀨平四郎立合、

御老中

へ遣ス

年 寄 台所 西 園

斧

七

山 H 八左衞門

同 荒 酒勾清兵衞 木 玄

同

蕃

生駒主計

友鶖

松平周防守 石州濱田城主

千村彈正少弼

追テ所替可被

仰付候、

急度慎可罷在旨被

仰出候、家督無相違其方へ被下之、

父周防守事、勤役中不埓之儀有之候間、隠居被

仰付

仙石道之介元家来河野瀨兵衞並同家来仙石主[助力]

之義有之、並ニ片口之吟味ヲ遂如何トモ不心附、瀨兵 税ヲ以テ承リ合候節、道之助家来差出候書面事実相違 計外ニ三人仕置ニ当リ之儀、道之助家来ヨリ弟松平主

其方儀、

又問合之節モ他へ洩間敷、宝暦之評定所一座ヨリ之伺 播摩守致病死忌中ニ相成候ニ付、右仕置等申付日間猶 衞其外之者共仕置当リ夫々及挨拶、其上道之助養祖父

済書面写取書面相添、内々主税へ差遣シ候故、同人コ リ道之助家来へ相達候次第ニ至リ候段、重キ御役ヲ相

之、急度慎可被在候;

勤候節之儀別テ不埓ニ被

思召候、依之隠居被

仰付

計外ニ三人不届之義有之由ヲ以テ、科之次第相認メ獺 其方儀、仙石道之助元家来河野瀨兵衞並同家来生駒主

周防守嫡子 松平左近將監

名代

本多主

税

右於伯耆守宅老中列座同人申渡之、大目附初鹿野河

内守相越、

十二月九日

申渡覚

寄合

松平 主 稅

能勢惣右衞門

兵衞ハ引廻シ之上獄門又ハ打首、主計外ニ三人ハ切腹 承合呉候様家来岩田靜馬外壱人ヨリ頼ミ受候節、書付 或ハ永座敷牢ニ申付可然哉、仕置当リ之儀兄周防守へ 共周防守へ及致内見分候処、瀨兵衞ハ軽キ死罪、其余 軽キ方ト申聞候ヲ、其方存付ヲ以テ主計外三人ハ剃

髪之上囲場へ入置可然旨及挨拶、且右之者共仕置等三

問合ニ不及段強テ申聞、其上道之助忌中ニ相成候ニ付 処、乍内々モ周防守ヨリ差図之儀ニ付相違無之、外へ 奉行之内へ問合可申哉之段、道之助家来押返シ申聞候

モ 問防守へ 申聞、 同人ョリ宝暦之度評定所一座伺済之

仕置申付候日間之義、猶又道之助家来ヨリ承リ合候節

殊ニ仙石左京ハ間柄ニ候共、道之助家政向ニ可携筋ハ 書面写モ書取相添差越候ヲ、其儘道之助家来へ差遣シ、

可罷在候

無之旁以不埓之至ニ候、依之隠居被

仰付候、急度慎

松平軍次郎

玉虫十左衞門

父主税不埓之儀有之候ニ付、隠居被 仰付候、家督無相違其方へ被 下之候、追テ 仰付急度慎可罷

知行引替可被

下候、

在旨被

御勘定奉行

大久保源右衞門

石道之助元家来河野瀬兵衞ヲ、同家来共踏込捕押引連 候義ニ付、西村貞太郎ヨリ取計方相伺候節、道之助家

其方儀、但州銀山付地役人渡部角太夫別宅ニ罷在候仙

御料所地内へ踏込候次第等ハ相除、角太夫方ヨリ瀬兵 来ョリ、右ハ在所詰家来共心得違之旨申立候迚、遠路多 衞ヲ差置候趣、貞太郎承込致吟味候姿ニ調直シ、道之 人数呼下及吟味候テハ難儀可致之ノミ之存寄ヲ以テ、

図致候、事実相違之書面ヲ以テ松平周防守へ相伺、道 助方へ可引渡哉之段、伺書へ認込可相伺旨貞太郎へ差

越候上ハ、月番之取扱之品ニ候処、同人へ不為致披見 太郎ヨリ伺書差越候砌、内藤隼人正連名宛内状ヲモ差 之介方へ瀨兵衞ヲ及引渡之段後闇取計方、殊ニ最初貞

始末不東之至リ、依之御役御免差控被 右井上河内守宅ニ於テ若年寄中列座、河内守申渡之、

仰付者ナリ、

同落首狂歌

目付曲淵勝次郎・本多左内罷越

十二月九日

右天保七年申正月、京二条御城番頭松平市右衞門様家

来近藤丹造殿ヨリ借写之、

付」 IJ, 介義幼主ニ付脇坂〔動カ〕 右仙石家藩中善悪トモ不残三ヶ年御暇、 登城参勤之砌ハ両家ノ藩中ヲ以テ為相勤被申 ・中川 ノ両家へ養育成人迄相預 城主道之

天保七年申春、 石州濱田城主松平周防守義、 此度

Γ紙

奥州棚倉へ、 城主ハ濱田へ所替被 仰付之事、 カハリ之事、 」申八月国ガへ入

棚倉城主井上河内守義武州忍

へ、忍

同風評柳樽

今ン度のて丸に無し字のなそかけ

薬から鷹取焼の尻がわれ

仙石医師鷹取已百 沙留であらへへはげるすをう染腸坂中務大輔殿 千石も残れ權兵衞か蒔た種

先祖太閤時分の人

周 【防守殿舎弟松平主税・仙石左京荷担人ナリ

オ

生の主税を出して此節は

仙石道之介忠臣神谷轉事虚無僧友鵞 周 防へへと人の悪評

虚無僧の思ひの竹を吹ならは

はひ御無用といへはよひのに

出る石とまた見る石と重ては

仙石

の国

ハ但馬出石

周防守本国ハ石見濱田

そふて主税ハよわるはづなり

書付写シナリ、

右ハ去年末十一月、

諸司代元メ八木喜八郎殿ヨリ恵投

三六 蒲生郡郷右衞門書 翰

御手前様御出立、 廿四日之夜薩仁ヨリ左之通私方へ之

手紙写

今朝ハ拝顔大慶仕候、 然ハ河州八尾方角之山際田畑之

中二、 ハ百姓原集勢之内ニモ可有之哉ト奉存侯但両人自殺之者ハ何者トモ不相知如何浪人欤又ヽ ヨヒ候様子ニ倒居候ヨシ注進有之、尤大将体之者ニ 剃髪之者腹巻ヲ致シ自殺致シ、 其脇ニ両人自殺 外ニ拾人計殺害

リ死居候ヨシ、今朝伏見へ便ト申、最早皆々如斯之次八尾ヨリ南東恩地之山林ニモ又手当致シ候男、首ヲツヨシ、夕刻見分被遣候ニ付明朝モ出候テハ承度、且又テハ有之間鋪候得共、近藤アタリノ類之者共ト相察候テハ有之間

第少シ安心之筋候、前条之次第段々之聞次ニ候得共無

二月廿四日

相違相聞候ニ付、早々申上候、以上、

仕候、以上、尚々、昨日ヨリ公事訴訟モ有之、平生体ニ相成大慶

成義承知申遣候、手紙裏書ニ左之通、侍居候得共、何分不申越候トモ、翌廿六日私方ヨリ慥

右之通申遣、翌廿五日ニハ尚又取究候義相知可申儀

トハ相分兼候、前書弐人ハ違ナキ様ニ承候、助モ和州ニテ打取申候ト欤申候得共、風説イマタ聢追々余党モ手ニ入、死骸モ右之外ニモ有之候、格之申候、御救小屋等之事ニ付甚タ取込何モ大略御免、大取込中同紙御免、自縊ハ瀬田、自殺ハ渡邊ト相聞

廿六日大取込罷在裏封二申上候、御免可被下候

白井幸左衞門生捕ニ相成、是ニテ委細訳モ相分申候骸有之候ハ、平八郎之外ハ先皆々片付候様ニ被相考、瀬田自縊、渡邊自害無相違、国分越ト申辺ニ三人死右之通返答承置候、然ル処同晩又々左之通手紙遣シ候、

不申、尤手掛リハ追々有之候、渡邊自殺ハ平八郎様不相見候、何分自滅ニハ可有之候、今少シ其便相聞

ニ付テハ、平八郎モ迚モ姿ヲ顕シ候テ死候様子ニハ

ここまり目录、正、、「間幸、ひここをできっし!ハ候得共、何レ可死事ハ孝左衞門白状ニテ相分候様子見届候上之事ニモ無之、平八ノミ跡ニ残候様子ニ

以来之事追々承候趣罷出可申上候、格之助モ儀左衞ニモ承リ申候、聢トハ不聞候、少モ手透次第十九日

格之助ハ郡山之手ニ被討取候抔風説モ有之候、以上、門モ右国分之様子ニテ相分可申候、承次第可申上候、

二月廿七日夜

尚々、明日ハ大体成行相分可申ト存候、以上、

今日モ聞ニ遣置候得トモイマタ返答相達不申候、ト存居候処、又々彼方ヨリ如何成義モ無御座候ニ付、右之通一昨夜私方へ手紙遣シ候付、昨日何分相分可申

々謹言

二月廿八日

蒲生鄉右衞門

田直之進様

ハ孝右衞門ト相見申候得共、イツレ井辻へ直ニ承リ不 分ニモ逆徒之内ニテハ宗徒之者ト相見申候、 評判致シ居候ニ付守口庄屋ニ相違御座有間敷候哉、 モノハ守口庄屋ト大鹽家来ト両人ニテ候由、 不申段ハ御存知之通御座候、右ニ付宇治ニテ被召捕候 宿ニテ永井休太郎為見合候所、 玉造与力ト有之候ニ付、大坂袖武鑑ニ即御手前様御旅 差越候ヨシ、右之通之事相見申候、尤車台之名前写ニ 人大鹽家来之者於宇治被召捕、伏見奉行ヨリ爰元へ被 炮車台ニ記付有之候名前書之内、白井孝右衞門ト外壱 本文伏見之便有之ハ、 八、玉造与力大井釗一郎、 御手前様御出立前 次ニ相記大井雇書、 右名前両人ト 御写取 且名書 ŧ 何 右之通 相見 ∄ 何 IJ

申上、先ハ御着府之御祝詞モ相混早々如斯御座候、恐被下候義偏奉頼候、尚追々治平之御左右重テ目出度可欤ト奉存候故、近頃乍憚前文之趣トモ万々宜御取合置

前文両人被召捕被次第ハ、

十九日淡路町取合候

両人共剃髪致シ僧衣ヲ着シ居候由依テ青道心之不善ヲ離散致シ響峠越ニテ奈良へ出、夫ヨリ宇治之方へ趣キ、

申候テハ委細之儀ハ相分兼申候

御座候得トモ、仕置候故、井辻

此便宜相達候時分ハ御地御出立モ候半

御留守居ヨリ別段御届モ不申上越、右之外ニ何モ可申

上儀辺ハ御座ナク候得共追々委敷可申上候、分テ承諾

井辻往復紙面写等相糺、

此段巨細申上候筈

照宮抔逆徒之一炬ニ灰塵ト相成、其外万人当時柄之上

一入愁苦一段悪シミモ相増申候、今日便へ右筋之儀モ

共可仕出向ニモ覚不申候、

昨日モ晩景ヨリ焼跡見物ナ

最早宗徒之者死亡イタシ候付テハ、此末何モサセル事

尚又付人安堵相違御座有間敷、

前文之通

カラ差越見申候処、

誠ニ以言語同断狼籍、

天満宮

東

始末相片付、

是ノミ残多、万人此落着之程一左右日夜待兼罷在候、

右之通当地御出立以後之成行ニテ、追々致静謐外ニ何

無御座、乍然張本平八郎儀、生死之程一向相分不申、

イツレ天之網逃ル、ニ所有間敷、両三日之内ニハ決テ

-- 247 --

風説右之通ニ御座候、本文ハ八尾辺ニテ自殺之者モ剃 リ召捕ニ相成侯ヨシ、是ハ井辻ヨリ承侯筋ニテハ無之、

髪ト相見へ、青道心タラケノ賊徒御一笑々々、

御城代土井大炊頭殿ヨリ御届四月三日着 去月十九日徒党之内行衛不相知モノ、家来共へ密々市

申者裏隠居所ニ、大鹽平八郎父子ニテモ可有之哉、 中近在為相探候処、昨夜当表油掛町美吉屋五郎兵衞ト 隠

レ居候趣家来共内密承之候所、其通へ致通達、遅々ニ

得トモ差急候儀故、 候共手延ニ相成逃去可申モ難計、且見知人モ無御座候 不取敢伊賀守組与力内山彦次郎へ

来共九人一同申合、今晚右五郎兵衞店前後ョリ召捕候

家来ヨリ申遣候所、

同組同心四人程同道罷越候付、

家

破押詰候処、如何仕候哉、 丈夫ニテ難踏込候得共、何レ生捕ニ可仕ト入口メリ打 手筈ニ仕候所、裏之方通路至テ狭ク、隠居所双方入口 俄二火気相発甚敷煙立、 平

> 段御届申上候、以上、 来共ヨリ前文之趣申達請差図引取候段申聞候ニ付、

> > 此

三月廿七日 土井大炊頭

大炊頭殿書取ヲ以番頭衆へ達左之通

合召捕可申致手筈候所、 両人共居所へ火ヲ掛ヶ自刃焼 ヒ居候趣ニ付、昨廿七日拙者家来並堀伊賀守組之者申 去月十九日及徒党候張本人大鹽平八郎父子油掛町ニ忍

致シ候間、為御心得無急度御達申候事、

三月廿八日

但人相書之内大井正一郎ニモ四月朔日大坂於市中被

召捕候由、場所不相知河合鄉左衞門壱人残居候得共、

是ハ当正月出奔之者ニテ、敢テ此度之一揆之内ニモ 無之哉、序ニ人相書出シ候義ニ付、大鹽平八郎父子

右正一郎サへ被召捕候得ハ、一揆之者共不残被召捕

並自殺等相済候ヨシ、

大坂御城代始へ相達候趣 従江戸表ヨリ宿次奉書ヲ以被

仰出候写、

四月八

日大坂へ到着之由

詰見分仕候得共、父子ニ相違無御座趣申聞候ニ付、

立寄付兼候内、

両町奉行出火ニ付相

八郎父子之由剃髪之者自殺仕火中ニ入、煙強 両人共焼死仕候、

一時ニ焼

其地町奉行跡部山城守組与力格之助父隠居大鹽平八郎 不容易不届之企致シ及乱妨候節、

候段、

先可被申聞候、

恐惶謹言、 御沙汰ニ付、

不取敢此段可申達旨

組之者共彼是骨折

御城内外警衛防禦之儀万端手筈宜敷ョシ、 畢竟差図行

届候故之儀ト一段之事ニ思召候、右之趣不取敢可相 達

上意候、 依之如斯候、 恐惶謹言、

旨

松平伯耆守 水野越前守

四月朔日

松平和泉守

土井大炊頭殿

其地町奉行跡部山城守組与力格之助父隠居大鹽平八郎

御城内外警衛防

且.

遠藤但馬守殿

四月朔日

連判

其地町奉行跡部山城守組与力格之助父隠居大鹽平八郎 同相働、 不容易致不届之企及乱妨候節、 右之内ニモ石川彦兵衞儀、堀伊賀守先立 為加勢組与力同心

以上、

致シ雑舎打払彼是骨折候事ニ候、

四月朔日

米倉丹後守殿

連判

跡部山城守

伊賀守

届之企放火及乱妨候節、 山城守組与力格之助父隠居大鹽平八郎儀、 早速出馬致シ消防並召捕方夫 不容易致不

— 249 —

右之趣先々可被申聞

又為加勢遺候組与力同心モー同相働、 右之内ニモ与力

所近相進討取候者モ有之故、悪徒共及散乱候次第ニ

禦之儀万端手筈宜由、畢竟申談行届候儀ニ可有之、 不容易不届之企致シ及乱妨候節、

坂本鉉之助儀ハ、山城守出馬之節鉄炮打掛候一揆トモ

至リ一段之事ニ候、其方兼テ申付方宜敷故ト

及差図、悪徒共速ニ散乱鎮候次第、

思召候、

々

彼是骨折候故之

儀一段之事ニ候、此旨可申聞トノ御沙汰ニ候

大鹽平八郎家族其外徒党之者共、其地町奉行並奈良奉

行組之者共出精召捕候趣ニ候、夫々不取敢相応ニ賞置

候様可被致候、尤右之者共骨折之軽重依テ猶又一件落

着之上ハ

御賞之御沙汰モ可有之候間、 名前等委細相調可被申越

四月朔日

連判

松平伊豆守殿

齋藤彌九郎書翰

三月十一日、同十四日目豆州韮山到来

一齋藤彌九郎ヨリ赤井東海へ之書状 不順之気候ニ御座候処、益御安静被為入奉拝賀候、

通其外書付共箱入不思議ニ太郎左衞門手ニ入、甚以驚 被下候、然ハ大坂表一件ニ付実ニロ外難致、平八郎文

入奉存候、尤近々其筋へ上達相成可申ト奉存候、委細

テ小子義去ル九日夕韮山へ無滞着仕候、乍憚御休意可

御座候、御覧後御火中堅御他言御免可被下候、尤荆妻(蓋) 之樣子內糺仕度奉存候、若出船ニ相違無之候ハ、大害 間々アタリ可有之、志士之心痛此節飲食モ不通之儀ニ 申上候、右一件之内明十二日出立大坂表へ相越、 出立之儀申遣置候、又々追々可申上候、早々頓首、 退口

申上度候得共憚之儀ニ御座候付認兼申候、帰宅之節可

三月十一日

齋藤彌九郎

赤井先生

尚々、折角時候御厭可被成候、

希候、已上、

敷奉頼候、恐入候得共留守中病人並其外共御心添奉

うろたゆる人に見せはや津の国の難波わたりの春

のけふりを

五畿内といへと一揆の大騒き火矢々々ものて逃る

随

また

ゆるさじ 矢をこめて土井のつらさむ計りとも何大坂の敵は

乍憚御惣容様へモ宜

流行唄

加番何する天満の火事にヤレコレサ鎧兜や火事具

もこまるノウコレサ火はもゆるしんくい~~大坂

新軍人

こうやく売

大塩先だつ今の間ニかく平八がこう焼ハあれやこ

れやじや消なんだ跡部なんぞが夜を日につぐそう

んばかりうる三ずいに酉のとしとて酒やめはつくりへなしにへ

流行しんぐいぶし

も上帯〆るヤレコリヤナ、死かゝる新軍〳〵大坂新軍跡部何をする大手のかためノウコレサ、こわいなから

かヤレコリヤナ、焼かゝる新軍~~大坂新軍~~年力同心乱妨過るノウコレサ、上を下へと騒動させる

かヤレコリヤナ、焼かゝる新軍!~大坂新軍~~

大塩先代今の間に跡部伊賀か災難ハあれや是やニ

狂歌に

大塩に土井が崩て堀埋れ気も火矢~~と跡部まこ

ヤきかないか米切れなんぞにやよふきくそうだ

つく

〜いにしへの勇士は本多この度ハ鉄鉋かいなととん大塩が大坂中を焼払ひ切支丹やらなにしたんやら

だ平八

↑ 大坂にすきたるものかふたつあり火矢の頭にとん

だ平八

大塩が出てさハくや難波あし

小人隠居為||不善|。其名、大塩平八郎。 天満火起,夜如」(大塩がおゝきく本を売払ひ今ハ無本の大将となる

昼。乱妨狼籍有¸誰防。分限長者家忽燃。橋々焼落。

殿様各潰、胆。 奥方聞及癩更強。 上意之趣大名畏。実"周章。東西南北人騒動。老若男女迷」戦場。在番

出張用意人馬忙。

獄門懸。欲ゝ輝1,関東御威光?君不¸見天草与;正雪?天罰不¸遁無¸程亡。早斬;張本

よもの海長閑なる世を難波かたなによしあしにあ

た浪ハたつ

見立角力取組番附

丸焼 慢ヶ嶽 大塩 火威

早馬 、岸和田

/手柄山

、尼ヶ崎

コ

縄張 高直

> 車次 石火矢

陣幕

のたれ松

頂

御救

焼跡

材木

大平方

くえらひ目 が捌き兼 御番所

新作ヘンダ

啌 ハズトモ夫トシレカシ引龍ノ。 ハアルマシ幕 ノカケ。 大鹽平八反逆ハ。大坂中ノ騒 紋ハ日頃ノ風説モ。

1

押寄テ。 焼打レタル堀跡部。折ヲ得兼シ奉行職ク、ウ、

トツト兜ノヲ、緒ヲメテ。

兼テ仕組テ

旗 ヲ

=

モ早フスルハツヲ。

世上ノサタモナンノソノ。首刎

揚タル出陣ニ。

天満タヨ

ラヌ。

火事旗アケ。

鉄炮ノ火ふたもよしや筒

۲

Ħ

~~モノテイサミクル。ユヘン 罷出タルモ

動

<u>۱</u>

皆人コトニ夕ベカラ。今朝四時ノ天満橋。

党ノ打手ヲセィ逃フトモ〳〵。先跡部ノ宅ノ合戦 ノハ。中川半太大塚ト申御目付ニテ候。何カ身共ニ徒

サル程ニワツカナ藩中甲冑ナキニ玄関オヲソフセキ

ル。 セテ押寄ル。其時山城オモフヨウ火事場ハ近シ伊賀ハ ス。 徒党ノ勢ハ唯百騎。 独リ火元見高名セント。 渡邊近藤両大将。石火矢ヲ打

百姓与力皆徒党。 適敵ヨノカスナト。 壱揆カ中ニ ۲

火事場ノカタヲ目当ニテ。

天満ノ橋へ。

サシカ、ル。

供サヘツレス只壱騎。

込ラレ。 御供御馬モ打倒レ。大笑ヒノ姿トナリ。 ツイ

フト。 ナダ、ミ是ナンゾイノ跡サン。オマイヲイツタイ殺ソ 逃入ノ御城内。待モフケタル平八ハ。 並大テイナ事カイナ。堺以来トキメタ事。 夫ト見ルヨ トフ IJ

ミバカラシヒ。与力冥加ニ尽シタト。 脇ヘシノバセテ。奉行ヘタテヲツク身サヘ。命ヲオシ ラリヤウト儘ニシテ。親子テ邪智ナ悪タクミ。妻子モ クルシモワシカ

トテ。柔弱御方ト追ツケバ。ワツト飛ノキ大音アケ。 打トラテ。逃テ御城へ行フトハナンボ御奉行サンジヤ

ヤア

ヌカツタル犬侍。其手テ是マテ焼立ラレ。

7

ジメ

一字津木ねれ

難波江ノアシニマシラヌウキフシヲケフミツクキ

ノ跡ソカナシキ

死出ノ山越クル鳥モ啼ヌ間ニウツ木ノ花ソ散ハテ

一落話

ケリ

出顕マシー〜ケレハ難有平伏セシ処・勅ニハ其方此度ノ宮へ詣通夜仕候処、深更ニオヨヒ、仁徳天皇ノ神霊大塩敗軍後身ヲ忍ビ行先ノ事ヲ神ニ祈願セント、高津

都会ニテハ難出来事ニ御座候、下略 シ、御国ニテ異名ヲ天狗ト申モノ、余程費用ヲ懸候テ 述作仕候、 重ネタナト 小子 未タ一覧ハ不仕候、此書ヲ内々所々ニテ講シ候由、 右之書写参候、何卒売候様諸人ヨリ請求テ売不申候由 フ事ニイタサン為ニ候ト申、其次イト尋玉フ、 竈ハ賑ハヒニケリト申上ル所ニテ、夫デハ下ノ句 賑ヒニケリト申上ル、 挙ハ如何ノ事ニ候哉ト尋玉フ、大鹽答テ私ノ存念 叡慮ノコトク高キ屋ニ登リテ見レバ、煙タツトイ 同人出生ヨリノ次第逐一微細ニ記有之候 神勅アリ、 右大鹽一件宣録ノ一書何人カ 夫ニテ宜欤ト御尋ニ付、 民 再民

六月四日

東海先生

_

點之

玉案下拝復

・長刀・大筒・小筒テ打チリ放シ、ナンノクモナク一タイツキノ引クワタテオ先へサンジマセウ、鑓・太刀イへ~~火事テハ御座リマセン、与力引キカシデカシ大似セ~~アトベトノ、アノカネナンタカキイテクレ、

ケムリ、 キ、ンホ、ンホ、人

三九

七月十七日五両金新吹布令

真サヲタ、 オマヘハ難波ノ御奉行サマ、大塩ニモマレテオイ 堀リヤアトヘンテ山城サ、元ハ米トテソノ p カ

米ニーヲカマヘテオフサワキ、

候よし承リ候故、籠城又ハ凶年の節の為ニも可相成と 先年大隅守隠居溪山ノ咄ニ、薩州ニテハ常ニ犬ヲ食し め候てひゑ切候節、堀出腹通の皮をむき取捨、外ハ猪 クて不宜よし、打ころし候てひゑ候迄地中穴を堀うつ 承リ居候へハ、其節の咄に犬をころし直ニ食候てハ臭 由承り候へとも、此処は失念いたし候、何も序故申聞 ニても食し候よし、別て赤毛とか白毛とかハよろしき 教へ度事ニ候、薩州ニてハ常ニ士も食し候由、何毛色 と承り置候へハ、若し在町の者にて食もいたし候ハ、 鹿を製候如くニして食候由也、兼てケ様の節の為ニも 齊昭 3 リ那 上奉行並 町奉行へ与フル 親書

> 今異同有之儀ハ勿論ノ事ニ候間、悉ク最上ノ位ニ吹改 世上通用金慶長已来度々吹替ニ付テハ、自然ト金位古 之通、新規判金吹立一枚ニ付金五両通用ノ積被 候御趣意モ有之候へ共、不容易儀ニ付、此度慶長金位

滞可致通用候云云、 (十一月朔日ヨリ通用) 候間、銀銭共小判・一分判・二朱金同様之割ニ心得無

仰出

七月

古金銀其外引替方並引替所ノ儀、当酉十月迄是迄之通 三 古金銀引替布令

被差置候、去申十月(丙申))中相触候処、追々引替相(৪點月)

済候へ共、イマタ残不少有之義ハ勿論、右引替方ニ付 銀五分ツ、ノ割合ヲ以諸入用被下侯処、向後ハ道程 差出候者へ於引替所道程隔候分ハ、金百両ニ付 テハ諸雑費可相掛訳ヲ以、是迄古金並真字二分判引替 遠近ニ不拘、 古金百両ニ付十両ツ 、為御手当可被下候 里

間、古金所持ノ者ハ聊モ不貯置、当酉十月限引替可申

候也

ハ領主地頭へ急度可被申付候、沙汰候条、其段兼テ相心得候様、御料ハ御代官、私領候、若其上ニテモ貯置候者於有之ハ、厳重ノ可被及御

三二 町奉行以下褒賞ノ件

救助ノ儀骨折候ニ付御褒美町奉行、御勘定奉行同吟味役以下ノ者、米価高直ノ節御

時服二、右被下之、守右三人へ時服三ッ、、御勘定吟味役田口五郎左衞門

去申年ヨリ稀成飢饉ニテ餓死人巷ニ充ツ、

町奉行筒井伊賀守・大草安房守、御勘定奉行明樂飛彈

諸口此小屋へ入、此時商売為基手一人へ銭四百文ツ、ノ小屋取建、市中難渋ノ者共町奉行所願出、父母妻子十月下旬ニ至リ為御教、神田佐久間町へ四十四間四方

々人数相増六百人余レリ、是ヨリ同所へ小屋五ケ所取 論追テ小屋払ノ節右積銭被相渡候御主法之由也、依之追 行被下置"売殖ノ内銭五十文ツ、積銭致シ百日ノ間預置、 身諸に山小屋へ入「山時商売煮基手一人へ銀四百文ツ、 等

十一月二十日小屋入ノ人数四千六百八人、一人ニ

候分左之通、行倒死百五十八人、捨子五十二人、缺落申ノ十月(丙甲)朔日ヨリ同十九日迄、奉行所へ訴出ハ産衣一ツ被下之、此時惣人数二万余人ニ及ヘリト云、但三蔵以下ニハ不被下、此内産婦五十四人有之出生へ付米三合ツ、、此飯米一日米十三石八斗一升四合也、

雪ノニヨイ天深八)卸洩、比前米面並考此時米価銭百文ニ付二合五勺也、百八十人、盗賊百六十一軒也、

レモ難儀イタシ候ニ付、取続相成候様品々御世話有之、酉ノ二月(トトロロイ)御触、此節米価並諸色共高直ニテ何

身元宜敷者ハネタリ等不申掛候共、銘々身上相応ノ施等仕掛候者有之ニ寄リ召捕、夫々御仕置申付候へ共、黑村町ニネタリ又ハ押借イタシ、其上其所ヲ為騒口論誉有之、場末ニモ右様ノ儀数多ニテ、軽キ輩ハ心得違町人共ノ内身元相応ノ者ハ施行差出候者数多ニテ右賞

候間、心得違無之様申諭、尤困窮者へハ町会所ヨリ臨論等仕掛候者有之ニヲヒテハ、厳重ノ御仕置被 仰付行等モ差出候趣有之処、事六ヶ敷申掛ケ押借リ又ハロ

時御教モ被下、其外御救筋御世話モ有之儀ニ付、銘

々

ニ此困窮ノ中ヲヤウ~~ニ凌キ、

施米施粥モ食セス、

マタ格別交食悪食モセス、無難ニ豊作ノ秋ニイタル事

相慎取続方心掛候様可申付

田袞三新門・尹奈片三新門・山本大善卦リニテ、品川酉ノ三月(天保八)ニ至リ、猶又御代官中村八太夫、山

払、翌戌年十二月御代官三人へ御賞美金一枚ッ、被下・板橋・千住・内藤新宿へ御救小屋出来、二月下旬引田茂左衞門・伊奈半左衞門・山本大膳掛リニテ、品川

三三二 丁酉豊作記事

之云云

一丁酉ノ豊作

コトシ天保八丁酉ノ秋、天柔和順ニシテ二百十日無難

レトモ去秋ヨリ長々ノ間高価ナルユヘニ貧民餓死ノ者百卅弐文・百文、大坂ハ上米百文・八拾文トイフ、然之九月下旬ヨリ米穀追々下直ニ成、十月中旬立升ニ付州植出シ十五分又ハ廿分ノ作トテ万民雀躍鼓腹ス、依ニテ、諸国一統五穀万草十余分ノ豊熟ナリ、取ワキ江

京洛中洛外ニ於テ凡四千町ト見テ、弐拾万人余ノ餓死テ小町ノ壱丁内スラ五拾人不足ナリトイフ、是ヲ以テ轆轤町壱町内ニテ百六拾四人不足、安井マヘ月見町至京市中凡ソ壱町ニ付五十人程ツ、ノ不足トイフ、松原真ニアリカタク恐ルヘキ事ニコソ、九月人別改ニテ、

恐レテ、重ネテ餓死厄難ニアハサルヤウニスヘキモノ人、ヲフカタ当厄難ニ遭タルヲ見テ、人オノ~~慎ミ冥加ヲ弁ヘス慈悲心信心ナキ人、義理人道ヲ弁ヘサル

七八十文ニモ可相成カト、人ミナコレヲタノシミ悦ヒナリ、ナヲ追々米船入津、春ニモ成ラハ京師モ百文、

三三三 天保八年山川港ニ英艦渡来ノ事実

死、乞食ニ成タル人幾百万人トイフ事ヲ知ラス、予幸

多ク、予カ相識人ニ身上没落又ハ家出行方知レス、

餓

中タリケル、

受シュヘナリ、平生心得アシキ人、倹約ノ道ヲ知ラス、

リカタシトイフ、是皆天地ノ冥罰、神仏ノニクシミヲ

又ハ疫死ナリト、日本国々ニ於テ幾億万人ノ不足哉量

藩吏国 今回 リ、故ニ其事由ヲ詳ニスルヲ得タリト云フシタル者アリ或ハ難民ヲシテ通弁セシメタヽ 卒 代 帰参可致ト 難民等百方哀願 此時渡来且難民護送之報藩 リ帰参難叶、 達シ之趣ニ帰参ハ 前 来備前国又ハ肥後国ノ舟人ナリシ コ ル 天保八年丁 + 天竺 御 ŀ ガ ۲ 兼御家老島津但 |唐国 打払 故、 ヲ示 テ 数 国ノ内英国領 法 英国船 刻 出軍シ、 [渡海 ラテ 食料薪 シ 御法度故早 酉七月十 御達承知致シ、 因 而 ノ船ニ便船シ シ ・テ帰艦・ スト テ 水 テ国 同十二日難民 艘渡来、日本漂民ヲ護送セシ旨ヲ告 オ 苦シカラスト雖 ラ与へ 馬六千五百六十余石ヲ 英艦へ迅速ニ 法ニ 雖 Ė ノ地ニ モ 々出帆可致被仰渡、 ランダ」 人ニ依 セ 、テ慰論・ 薩摩國 依 シ メ 補賀迄送ラレ 漂着シ 素ヨリ国 リテ放撃 = 達ス ハ宜シ 「オランダ」 後 抜錨シ シ 潁 ,帰国 ١, ル ひチ法 モ、 娃 此七名 えべ 那山 法 ク 領日 ヤ 而 ý, ス置 玉 其輩カ言ニ十年 去 和 ラ如 ノ情切ニシ シ 1 郷 一蘭人ニ 禁 テ 允 タ 牛 同十一日 V 郷兒 国 ヺ 段 同国 ノ外国 ル ノ難民 IJ 後放発ス サ ク放発ス、 ・中清語ニ通・此時英人ノ 歽 = 示 隊 Þ 依嘱 願 船 ル ノ兵 ノ異 喩 I御城 船 吏員 テ、 水 立 処 ス ∄ 元 IJ ヲ タ

ル

信スル

=

足

IJ

漂民 ル事柄当時機密ニ罹レリ、故ニ知ルニ由ナシ、某モ清語ヲ以テ語リシ事アリシト云フ、其語レ 事実ヲ以テ考フレハアメリカ船ト唱 長 海 其時之考ニ ν N 出 渡 渡 = セ モ タル 申 七名ヲ リ相談之訳モアリト (リ之儀相願 行 スニハ、 湢 モ 帰参之道 カ 乗セ 知ルベカラズ、 サ 琉 ル ハ英船ナルヤ疑ナシ、考フルニ難民等ノ言ニ、ビヘタリ、何等ノ事ヨリシテ斯ク唱へタリヤ、前 琉球之大守ハ薩摩ナレ 球国 タ 渡海仕候 = IJ モ 因 IJ, 굸 可有之ト \sim 日 々之説 , 本薩摩 船将モ無致方浦 Ի 事トモ 同時英船浦賀ニ来リ 1 Ż ኑ 趣、 符合ス、 見込承候 1 支配 申 又船将謂 立タリ 其談話: 地 八 直 然 = 故、 賀 一般唱フィ編者日、 |様薩摩 畄 ラ処、 付 レ 爭 ハ 同 帆 備 国へ 同 ノ誤聞 我 致 Ė 船 前 々 渡 列 船 -

川

ケ

○高野長英カ夢物語 又同人カ鳥ノ鳴音ト云フ書ニ、 ヲ 出 キリ イ 餌 ン、長崎在留 丰 ١ ス ý シ 日本漂流人七人 国 テ交易ヲ願 ス」医 ノモリ 1 ۲ 「オランダ」 云フ ソ = ント フ 曰 ヲ乗セ江戸近海 略上 **ر**ر ∄ 如何 シ 굸 和 近来珍敷噂 ^ ル 蘭人申出 ナ 加比丹 去歳ノ モ ル 玉 ノ頭 = ∄ ーシト 秋ノ頃ニ 候哉云 = ۲ ヺ IJ 船 聞 ナ ィ ナン、 ヲ寄セ、 IJ ヶ y, テ船 Þ キリ カ ス下 アリ 抑 ラ仕 ス 是

鎮台 乗組 云々、 令ニ任セ直様御打払可然ニ衆議一決 国ノモリ テ考フレ 人ノ命可憐ト 当時機密 = タル 由 へ訴出云々、 漂民護送ヲ名トシ、 ナシ 或 船ニテ、漂民七人或ハ備前国・ ソ ハ年月日等皆符合セリ、 ン日本漂民七人ヲ召連レ江戸近海へ着船致 ト雖モ、 ナ 山川港へ渡来ノ異船へ英国ノモリソンカ 'n 雖トモ止ムコトヲ得ス、 カ故、 漂民ヲ餌ト 夢物語或ハ鳥ノ鳴音ニ記ス 今ニシテ何等之事柄 其実ハ通商願ノ心底之由長崎 スル策略不埓ナレ 船将カ申立タ セリ云々、 文政八年ノ御法 肥後国 ナリ 是ニ 「ノ 舟人 ル t ル ・ヲ知 事由 カ 因 七 如

シ奥儀ヲ伝ヘタリ、

三四四 藩士 鳥居平八兄弟 = 西洋新 式 ノ砲術 ヲ 高

島四郎太夫ニ伝習セ

シ

厶

ナ

'n

シ

ハ

明ナリ

旧来ノ技ニ比スレバ雲泥霄壌ノ別ナル 慨シ、長崎ノ人高島四郎太夫裔 齊興公、 英船渡来ノ際、 天保八丁酉七月山川郷妣時事実具申ノ為 一隊ヲ出シ タルニ実用ニ適セサル カ西洋新式ノ大小砲術、 ア開 キ、 ジタリパメ用人新 此年九 ヺ

> 後藩庁ニ請テ長崎ニ出テ高島カ門ニ入リテ、 新式ノ術ヲ学ハ 月藩士鳥居平八同平七兄弟ヲ長崎ニ 大小砲ヲ見テ、従来ノ砲器実用ニ適セ 入ラシメタリ、 ノ際砲家ノ職ヲ以テ出軍シ、 ンコト 鳥居へ元来荻野流 此時和蘭製ノ小銃式磁石機銃 一 ヲ望ミ、 異船ニ乗入リ備 嚮二 ノ砲師 Щ 遣 沠 シ、 サ 狆 ル ニシテ、 高島カ門 ヲ感慨シ、 = 日夜研究 異船渡来 フル処 西洋

量鉛 弾 稼業者也、 シ 挺ヲ購求シ、 ハ二十寸臼砲一門・十五寸忽砲一門・ 野戦砲一門・十三寸ノ忽砲一門ナリ、 初ニ鋳製セシハ十三寸ノ臼砲一門・百五十目 或ハ臼砲・忽砲・野戦砲等ヲ鋳造ス鳥居兄 五百目野戦 次ニ鋳製 砲

重砲ノ縮割ナリ 一門ヲ製シ、鉛弾量六斤野戦 一門ヲ製シ、 各砲操練ヲ開ク、齊興公之ヲ覧テ南中村ニアル別邸ノ海浜ニ セシム 其術ノ精且妙ナルヲ喜ビ一般ニ之ヲ習ハシメ於テ演習其術ノ精且妙ナルヲ喜ビ一般ニ之ヲ習ハシメ 或ハ洋式ノ銃陣或ハ新製

職 ヲ命ズ、 則チ御流儀 是ヲ本藩ニ於テ西洋新式 下唱 レフベ キヲ令シ、 , 鳥居ヲシテ師範 砲術銃陣ヲ用

ル) 権輿 ŀ ス

来大小砲術種々アリ、 則 チ天文十二癸卯 ノノ年、

旧

1

際西七月 下保八丁

隊ニ将トシテ出軍シ親シク渠ノ巨

艦

ヲ

シ

索ス

鳥居兄弟ハ辛フシ

テ免レ帰国

セシ

カト

ŧ

幕

府

其後小 道與流新蔵 門セシメ、徳丸原ニ於テ演習ノ人員ニモ加ヘラレ、 用 眞 IJ フ 或 テ 天保十二年髙島カ江戸ニ出 セ セ 長記録、 田 久馬 2時御城代兼御家老島津久風6世 サルベ (ハ海 = 高島滯府中数回藩邸ニ招キ親シク其術ヲ聞 ラ 大ニ興張セ T流 流 奏 川 源 ٤, 齊彬公ハ当時三十六年ノ御壮令天禀有為ノ器ヲ供 充ツベカ V 銃ニハ 防 シ 故 二西洋ノ事物ヲ聞カレタル御事ハ後巻ニ詳ラカナリ故 重豪公ハ開成開物ノ事業ヲ好ミ和關人「シーボルド」ト 鄉原轉等之四家、 カラサル 殊ニ曽御祖父重豪公ノ御薫陶開進ノ御志ア ノ策ヲ問ヒ、 此 田 1 種子島次郎右衞門ヲ初 ラ ン ,如ク御父子俱ニ時勢ヲ察シ、軍事 南蛮流港省• **!** サ 諸流派アリト ヲ感シ玉ヘルパ卓見ト云フベ ル カ故、 国流 或ハ其意見書ヲモ求メ ノ名称ヲ斥セラレ 「タル時、 齊興公ハ時 荻野流鳥居・ 大砲ニハ赤井流門師範タリ 雖 ŀ モ、 近習ノ輩数名ヲ入 勢ノ迫レ 僉古式ニシ Щ 天山 和 川郷ニ 田乘助 タ 流 ル タ カ 善青助山 リト 異) セ Ŧ ル テ実 ヲ 或 船 ラ 而 , 慮 変 ラ 云 シ ナ 渡

> IJ 泰 IJ 計

高島四郎太夫ナル

者

ラカ

= ヶ

依 タ

ル

ハ

僉人知

ル

カ

如

西新式ノ大小砲本邦ニ

開

n V

八、

天保五六年頃

シテ月ニ

年二

開物

ノ道進

歩ノ緒ニ就

ケリ、

見 傭ヒ製煉所ヲ創設シ製薬館或ハ人造硝石ヲ開 製煉或ハ ヒ大ニカヲ尽シタリ、此時長崎之人上野俊之丞ナル :製造或ハ洋種ノ草木栽培ノ道ヲモ シ 新 是ヲ砕 式 時辰器等ノ製造有名ナルヲ以テ、 , カン 法 ヲ 用 = ハ旧式ノ大小砲及ヒ軍制 ۲ ン 1 齊興公カ心ヲ用ヒ 開カレ ノ拙 夕 齊興公之ヲ + IJ, 玉フヲ喜 或ハ 丰 · ヲ 看 者 畤

島時堯カ小銃ヲ蛮人ヨリ伝

^

タ ル

ハ日本

ノ

「嗚矢ニ

シ

テ

メ

末

破

長崎 感 鋳造セシメ、 島 而 シテ本藩ニ於テハ同八年ノ秋、 $\overline{}$ セ 讒構 議構ニ係レル始 ラレ国流ト = 同十二年ノ春鳥居兄弟ヲ長崎ニ 遣シ高島カ門 同十三年ノ春其演習ヲ覧玉 シ、 而 ニ就カシ シ = 罹 テ尚新ヲ求メ精ヲ極 ij 門下 メ 齊興公ハ鳥居兄弟 大小砲ヲ購求シ或 輩其他 遣サレ ۲ タ 連座ノ者多 ル メシ 其精妙 = メ 捜 高 ヲ Ŧ

メタルコト往々アリタリ、此時流名モ高島ノ名唱ヲ憚リ、申シ、而テ姓名ヲ変セシ、此時流名モ高島ノ名唱ヲ憚リ、 熊本藩池邊啓太・佐賀藩鍋島某等ハ所刑セラレ 流儀 ト唱フベ 丰 ヲ令シタリ、 連座 ノ輩多キ タリ カ 中 更

帰

云フ、 海老原淸凞 カ記録ニ日、 天保八年 「アメリ カ 船 Ш

居高島 門ニ入テ荻野流ノ伝ヲ受ケ、 高島入ヲ依頼セシ故新納ト交深シ新納ニ謂テ曰、高島高島ハ町年寄職ナリ、藩邸川新納ニ謂テ曰、 高島四郎太夫新ニ蘭人ヨリ西洋兵書及ヒ砲術ヲ伝フ 十郎ヲ以テ島津但馬ニ申ス、 税帰リテ高島ノ説ヲ国老島津但馬風ニ伝フ、 玉 ヲ公ノ聞ニ達シ鳥居ヲ長崎遣テ其門ニ入ラシ ヲ与へ新鋳ノ様式ニ供セシム、 和納主税品 其備 入ラシム、 ナ 港外ニ来リ居 IJ, ナカ ノ説ヲ聞テ従前 外寇ノ備へ ルベカラサルヲ上申スベシト、 ヨシテ其事実ヲ長崎奉行ニ告シム、 鳥居平八ハ再遊シテ死ス、弟平七ヲシ ル コト幾クナフシテ去ル、 無クンハアルベカラズ、 ノ砲術拙 其蘊奥ヲ極ム、 但馬公ニ上申シテ其門 ナル 其前鳥居平八高島 ヲ 知 ル 剣銃 時ニ 貴藩ハ 益滿新 但馬之 新納主 君帰ラ 4 此時 用 カ 把 海 Ä

> シ テ伝ヲ継カシ 州流五段備ヘタルヲ廃シテ惣銃陣トス、 ヲ掌ラシム、 立鳥居ヲシテ其教ヲ掌ラシ 、姓ヲ改ム、 、別邸騎射場ノ海浜ニ見ル、 ル **熕鋳銃造年々増多、** 其門ニ入ル者多シ、 74, 爾来操練ノ法防禦ノ術日ニ習ヒ月ニ 成田正右衞門ト云、 皆但馬カ指令ニ出ツ、 亦銃薬ヲ瀧 ٨ 天保十三年公其技ヲ中村 而 軍政更革ニ及ンテ甲 テ御流儀砲術 正右衞門ヲシテ是 ノ 上鹿児島後 鳥居故アツ 鳥居業成テ ノ名ヲ 講

テ

メ ト 老水野越前守邦 ス、其時高島ハ臼砲一門料・ 武州徳丸原ニ於テ演習セシメタル 忽砲 門 栂+ 茧 • 野 ヲ初

幕府ニ於テ高島カ技術ヲ採用シタルハ、

テ製造ス云々略ス、

砲

|門度半・磯石機銃五十挺、門生数十名ヲ携ヘテ出

士下曾根金三郎・江川太郎左衞門其秘訣ヲ伝ヘシメ、 キヲ命シ、 火術ニ限ラズ凡ソ軍備ニ充ツベキモノハ尚ホ捜索スベ 演習セリ、水野侯其術ノ精且妙ナルニ感シ之ヲ褒賞シ、 白銀二百枚ヲ給リ与力ノ列ニ与フ、 此時幕

而シテ幕府ハ高島ニ命シテ曰ク、

御直参ノ内一人へ伝

シ

ヲ、此時ョリシテ大砲ハ砲台ニ備フ

コ

ナシ、

硝薬弾丸モ稍ヤ備具セリ、

故ニ旧来ニ比スレ

ハ備フル

能ク外寇ニ備フルヲ得ンヤ、 公云々、 如何幕 府ノ令スル処令書後 兒戯 ニ等シ ク

授シ其名前等可届出、 右外諸家へ猥 二伝授候儀 仕間 安ン

然リ 論 ナキナリ、 ŀ

封内沿海之守備

月六月頃ナラン

シ

4

或ハ従来兵器局御兵具所 藩庁ハ外国船ノ帆影ヲ見テ報知其他守備ノ令ヲ布 当時築造シタルヲ初メトス従来沿海ニ砲台ノ設ナシ、、 此時齊興公ハ山川・ 雖モ、悉ク旧式ノ製ニシ 佐多其他 大砲家鳥居某等担当ス、 = マテ弾量 量単 備フル処ノ大砲数十門アリ ノ沿海ニ砲台ヲ築カ 軽小三四貫目 ヲ

創設シ、 最大トシ海防ノ用ニ適セス、 新式ノ大砲ヲ鋳ンコト 茲ニ於テ大小砲製造所 ヲ令セラレ タ

ラ

或河口 沿海ノ守備ハ尤モ忽諸ニシテ、 故ニ大小砲又ハ弓槍ノ類モ威ナ番所ニノミ ノ要衝毎ニ番所ヲ設ケ、 藩吏交番シテ非常ヲ戒 封内東南西ノ沿海港湾 備 ヘタ

> 所アリト云フベ 雖 モ今 Ė 丰 シテ之ヲ見ルトキハ実用ニ適セ ハ、臼・忽砲等新式ノ器ヲ備 + タリ、 ル

(表紙) 齊興公史料 至 同 天保 十九 年年

江戸西城焼亡

種子島時昉家記抄

町触ノ件令達

江戸火災記事

節倹令 水野忠邦カ改革ノ令 於新番所前溜水野越前守殿御普請掛へ口達

小判引替令

目録

枚)」の記載あり〕 唐物商法ニ就テ幕府手当金ヲ下与ス 大野丹助報告書

尾州家士上書

〔西丸落成の件〕 (竹姫君記事)

中納言様相続ニ関スル件

家齊公仙洞御所ニ数寄屋ヲ献ス

〔澄姫君記事〕

銭相場御触書写 〔封回状〕

듣놋 江戸西城焼亡 大阪堂島蜂ノ巢之巻抄〔ฐカ〕

齊興公宰相御叙任

隠売女ノ儀布令

風刺記事

甘蔗作停止令

大御所家齊公西丸御移徙

留無恙、

御切手御門其外続塀等焼失二付、

同所続御裏

۴

モ

天保九戌年三月十日西丸炎上、 残焼亡ス、嘉永五子年迄十五年目、 御台所 ∄ リ 出火奥向不

天保十五甲辰年五月十日、 御本丸炎上九年目

嘉永五子年迄

嘉永五壬子年五月廿二日暁寅刻西丸炎上、 出火御殿向不残、 卯刻鎮火同十五辰年ヨリ九年目 坂下御門 ∄

同年十一月廿八日暁、

紅

|葉山御宝蔵御

焼失

安政六已未年十月十七日申之中刻 ヘヨリ 御本丸不残炎上

三月十日卯下刻西丸炎上 天保十五辰年五月ヨリ十六年目

御台所人下部屋二階ョリ出火、

西丸殿中向不残焼失、

大手御門涯御櫓大番所其外御持組番所等火遠ニテ無別

御書院番所櫓並大番所・同所続腰掛等咫尺トイ 岡部内膳正・永井飛彈守人数並定火消三番組

> 始内桜田下馬所辺迄相詰、 向共無御別条、 屋無別条、紅葉山堺塀焼失トイヘトモ、 上塀火気盛也トイヘトモ、右等ノ人数ヲ以消留、 御太鞁櫓等ノ組人足ニテ消留無別条、 国持外様之諸大名人数不残西丸大手ヲ 御譜代大名之人数ハ不残大 御台所前大土手 御宮・ 御霊屋 御舂

手内坂下御門内紅葉山辺へ相詰、其外御府内町火消人 大御所公斉

様辰刻御供揃ニテ山里御茶屋御庭通吹上へ被為成、 数不残御曲輪近ニ相詰ル、 巳ノ刻頃鎮火

桔橋ヨリ御本丸へ御立退御安座[詰タ]

供揃 此日御小納戸役御撰ニテ人体為御透見、 ニテ吹上へ可被為 成旨兼テ被 仰出、 今朝六半時御 御先勤並

御道具等不残吹上へ相廻シ居候事、

有之、 被為入、大奥女中内ニハ前条奥メリニテ御供致ス者モ 御見通シニ不相成様俄ニ竹簀ニテ垣ヲ取立奥メリ 夫ョリ西詰橋通御本丸御広式へ御立退御安座 又ハ御裏御門通へ立出大勢紅葉山広場へ

町火消人足消留、 御門家根へ火移候トイヘトモ、 同所大番所・ 西丸御留守居詰所其外 定火消三組並一 番組

式 夫

3

リ蓮池御門御金蔵北通り、

沙見坂御門御本丸御広

群居、

= テ

へ退去、

狼狽云フ計ナン、

西

言殿樂・尾張中納言殿樂其外在府之大小名不残登城、出火ニ付テ御本丸へ辰刻、水戸中納言殿縣・紀伊大納

昼九ツ時ヨリ打可申、一段調子高ク入念永ク可打之此時西丸時之御太鼓朝五ツ時・四ツ時流シニテ不打

旨 上意之趣水野越前守邦殿被 仰達、

西丸ヨリ御本丸へ立退候女中衆三百人程追々御飯

御料理被下之、同所部屋方召仕女凡三百五十人程へ

追々御湯漬被下、

西丸御持組番所へ握飯四百人前相廻シ、御番衆其外

へ被下、

奉行ヨリ申付郡代方ヨリ握飯ヲ相廻ス、定火消並町火消人足共へ弁当五十人前被下之御定、

礼事等都テ西丸ニテ伯耆守謁之、於御本丸同人謁之、三月十日炎上ニ依リ大御所様御本丸へ被為入候間、御

三月十日夜入西丸御膳所御台所人相澤久助・里村定五

郎一通リ尋之上召連人へ預ヶ遣ス、西丸御台所組頭山

リ尋之上差返旨、於評定所初鹿野河内守・大草安房守口正藏・同改中島伴次郎・同御台所人松坂長之助一通

池田修理立会、安房守申渡之、

三御所(解及比家慶公)樣為同御機嫌、三月十一日、西丸炎上二付

仕、

御三家方始其外惣出

服紗小袖麻上下着、

之老中へ以使者御機嫌伺、在国在邑之面々へ飛札ヲ以病気幼少之面々ハ、月番之老中西丸並 右大將樣御附

御機嫌相伺可申旨被達、

三月十一日炎上ニ付、其節格別働有之者書付差出可申旨

表方御番衆・御書院・大御番所腰掛等之内ヲ幕張ニテ御沙汰、

納戸向・御膳所向・御数寄屋向不残御本丸夫々御役所仕切、諸組当番相勤御切手番之頭組共、御裏御門・御

打込ニ相成相 勤 追々仮場所等出来 向モ 有之混雜

通

イ

,

計ナシ、

消十三日夕刻ニ至リ全ク鎮火、 御譜代大名一組、 定火消三組ツ、 大奥向・ 昼夜代々相詰、 小普請 方持! 下火 場

程ツ、入込同十五日頃迄ニ灰共焼瓦取片付相済、 方持場ハ、役人立会ニテ人足共毎日灰取片付、二千人 小普請方役人立会人足共灰取片付ヶ表向御作事 但 御

捨候、 撰出シ車ニ積、 作事方ニテハ、 小普請方ニテハ坂下冷岩土手広場へ運ヒ、 辰 焼灰御持番所脇広場へ運ヒ置、 ノロロ ーヨリ 運ヒ船ニテ深川十万坪 銅 車 鉄 ^ 取 = ヲ

銀銅 ハ 其座之鍛治方へ引渡

テ竹橋御門明屋敷

運ヒ金

· 銀

銅

鉄撰分ヶ、

焼

金

御 町 取間敷旨町触出 々火ノ元厳重且西丸御焼失跡灰片付ニ付、 焼失ニ付町火消人足トモ当分之内御城内固 焼銅 鉄等 勤番

此時御 ノ人ニ薩摩守使者公方様・御台様御機嫌伺 小納戸大橋彦太郎ナル 至リ ź 城中満面火 者、 チ 御城出 'n シ 故 坂下 火ト 門 聞 ۲ ノ為メ罷 至リ、 ラシシ

> 取次ヲ以テ御 ル ト演テ、 遂ニ御迦場紅葉山瀧見ノ御茶屋ニ至リ、 機嫌伺シニ、 御台様御 満足御言伝等 アラ 御 セ

ラレ シテ取敢へス差向御不如意ノ品数々 シニ依 Ŋ 其儘屋鋪ニ走セ帰り言上ニ及ヒ、 献上セラレシ 夫

大

IJ

以テ論シタル 加之御側近ク推参シタル不都合ナルヲ責問 御都合ナリシト、 = 依り 然ルニ後日其筋ヨ 己ムコトヲ得ス、 リ御城内ニ 大橋カ セ 粗 Ĭ, 忽 一踏入り、 成規 帰

=

閑職ニ置レ テ御小納戸職ヲ免シ至急帰国セシメ、 タリ、 大橋ナル者 ハ実直ナル 而シテ後道 人物ニテ御台様 奉 行

談ナリキ、

御安否ヲ伺ハムノ一念ニ出タリト

式

是レ当時

三月十二 Ħ 西 |丸炎上ニ付キ水戸 殿 ∄ IJ 国 産之松板壱万

枚被献、

三月十二日、 西 | 丸御膳 所御 於評定所出火御吟味 台所人相澤久助 里

 \mathbf{F}

揚屋へ

造ス、

西丸表御台所組頭同山

口 正藏

同所改

村

定五

鄎

通

IJ

所御台所人里村勇二郎・由井久平・齊藤忠三郎・窪 役中島伴三郎・板坂長之助尋之上揚屋へ差遣ス、 御膳 Ш

瀧三郎・三津玄三郎一通尋之上揚屋へ遣ス、 頭出口鐵三郎・同進上役井上平藏一通尋之上差遣方前 御中間組

三月十三日、 西丸御普請御用掛被 仰付

同断申渡之、

御老中水野越前守・若年寄林肥後守・御留守居松平内 匠頭・御勘定奉行明樂飛彈守・御作事奉行土岐丹波守 小普請奉行野田下總守・御目付三枝左兵衞・西丸御

目付松平兵庫頭·御勘定吟味鳥居八右衞門等也'

三三七 種子島時昉家記抄

宅、 御留守居半田嘉藤次同伴登城 天保九戊戌四月十五日今暁七ッ半時島津主計気 一列出

齊興公御礼被仰上、 引続於 御黒書院御太刀一 腰•紗

家慶公ニ御目見御奏者九鬼長門守、

綾二巻・御馬代銀一枚相備

丹波守、 右大將様

モ 同様献上物相備、

於橘

ノ間御奏者謁島居[鳥カ]

大御所様

右大將様へ御礼申上、退城ヨリ御老中太多備後守

様

部頭應様・ 脇坂中務太輔安様・水野越前守邦様・御大老伊井掃 土井大炊頭則 様·松平伯耆守 若年寄堀田備中守篤様・林肥後守 様・松平和泉守乗様

様 •

堀 增

川内膳正 田攝津守 山河内守 様・小笠原相模守 様・本多豐後守 様・大岡主膳正 様・永井肥前守 様・堀大和守 ·御馬代 様•森 様 •

一枚持参御礼廻勤候云云

銀一貫目

右ハ此節西丸御普請ニ付無御拠御訳合ヲ以御内願 御改革中旁不容易御時節 · 付上納金仕度願之趣云 昨年モ御金納御引続

ノ儀、

殊

種子島六郎

上御上納金被仰出、

本書ノ如ク西丸焼亡後造営費献金請願スヘキ内示ニ依リ

天

-266

様へ御太刀一腰

べ

考フル

維

新沿革ノ機、

外ニ顕ワ

レ

タ

ル

初

トモ謂

ワレ 手段ヲ以テ献金スルコトナリシ故、 三年間)、 ス藩士録高壱石ニ対シ玄米五升夥出 等積年ノ負債凡五百余万両ニ及ヒ、 大小侯我レ先ニト争フテ出願続々タリ タリ コ 1) ۲ ノ御続モアラセラル、ニ仍リ、 N (幕府へ献金ハ三ケ年間納済ノ許可ナリ)、 或ハ献金ヲ内諭シ、 ノ 際、 ナ ĺ Ŋ 俄然巨額ノ献金調達ノ途ナク、已ムヲ得 然ルニ当時藩庫窮乏、 各身代ニ応シ多少ヲ献セ 其利払モ約定通リ調 藩内上下ノ情況甚 金拾五万両献 ノ内示出願セシメ シト、 加之江戸・ 本藩ハ 如斯非常 セ 大坂 ラル 廣大 タ 1 シ

ル 鹽カ作乱ハ万民教恤ノ精神ナリト、 因ニ記ス、 人情穏ナラス、 者ナク、 ノ事情ニ対シ稍乱ヲ好ムノ人情ト 昨春大坂ニ於テ大鹽父子作乱 幕政ノ専横驕奢ヲ憤怒スル 剰へ補賀及ヒ山川港ニ外国船渡来、 ハ ナレリ、 コト実ニ甚シ、 般其挙ヲ非ト ノ後、 殊ニ大 天下 内 1

ハ 町触ノ件令達

へク候処、身分ヲモ不顧紗綾・縮緬縫模様抔之類相用共、譬ハ町人共衣類之儀ハ一体絹・紬・麻布ヲ相用ヒ渡候ハヽ、業体ニ寄候テハ差支之儀モ可有之哉ニ候得家業相続致シ事候間、一概ニ倹約質素ノミ心掛候様申家業相続致シ事候間、一概ニ倹約質素ノミ心掛候様申の分般町触之儀、名主共支配限リ精々申論、此上違失心

ナラス、貴賤之差別モナク御制度風俗ニモ拘リ候間、ハ則奢侈ニ有之、右体ニテハ無益ニ金銀ヲ費シ候ノミモ用弁ニ可成品ヲ花美風俗ニイタシ、高金之品相用候

候テハ不相応之儀ニ付、

則僭ト申者ニ有之、又何ニテ

困難ナリシ知ルヘキナリ、

右之通被仰渡奉畏候、為後日依如件、 本・可為越度候間、猶其方共ヨリ組合限り精々心付、 共・可為越度候間、猶其方共ヨリ組合限り精々心付、 で変行届心得違之モノ無之様厚世話可致候、 基ニテハ名主・町役人 は度之町触並度々申渡候趣無違失相守候様可為致、若 は度之町触が度を申渡候趣無違失相守候様可為致、若

成五月廿四日

モ 前 私共ヨリ厳敷申付、 書被仰渡候趣私共へ被仰含奉畏候、家族共召仕迄等 右御趣意被仰渡之趣急度相守可

右 町御奉行所筒井紀伊守様御白洲 オヰテ被仰渡之、

申候、

為其御請印形仕候、

以上、

三九 江戸火災記事

四月十七日

日本橋辺 3 IJ 出火、 飯 田 町辺ニテ焼留 ル

佐 町弐丁目、 家主庄平店庄吉ト申モ 四月十七日昼九半時頃ョ 屋町壱丁・安針町弐丁・瀬戸物町弐丁・同裏河岸壱 品川町三丁・本両替町壱丁・ 同裏三丁·本船丁三町程 , -リ、 宅ョ リ出火、 日本橋本小田 長濱丁壱丁 駿河町壱丁・本 同弐丁目 原町 '壱丁目 伊 · 北 勢

町壱丁目ヨリ四丁目マテ・十軒店壱丁・立閑町壱丁 元乗物町弐丁・佐柄木町弐丁 ·紺屋町弐丁· 白壁町壱

丁半計·

壱丁・三河町壱丁目ヨリ四丁目迄・同新道三丁・長冨 新 ・松田町壱丁・冨山町壱丁・北柳町弐丁・ 石町壱丁 鍛冶町弐丁片側 皆川 町弐 1 鍋町壱丁 蠟燭町

> 町弐丁・松下町壱丁・雉子町弐丁片側・要安院拝領屋 敷続町家半丁程 ・鎌倉河岸辺・ 西 丸御普請小屋類

類焼屋敷名前

遠藤但馬守 松平筑前守御側

後藤佐渡守小普請支配 寄 津 田 鐵 太郎

松平友三郎杉浦出雲守組

御小(姓)

寄 **水**合

野

彈

監 物

菛

鵜殿甚左衞 御小納戸

金森山城守

Œ

曲木又六郎御馬預り御役屋敷 大久保紀伊守組 如書院番 御書院番 奥高 今高家

御使 山使番 主 水

上總介

鷲巢伊左衞門

北村大之丞 杉浦出雲守組

西

長谷川又三郎丸御右筆組頭

新庄鹿之助

土岐豐前

奥 戸 田家

1加賀守

石川大隅守御小姓組番頭

戸田長門守

本庄伊勢守

大概

本多豐前守四万石

山田 佐渡守御使番 平岡對馬守大御所樣御側

大澤修理大夫奥高家

天野甚左衞門外留十左衛門組

土屋兵部御使番

小普 神 神 尾 佐 和之助

高城龜太郎菅谷山城守組

右ハ喜多村彥右衞門ヨリ、

右之場所土蔵造並家作共本普請見合可申

新銀町・佐柄木丁会所地南北之所

比

呼

出シ

ニ付罷出候処、

前書御書付御渡相成候!

只今早々可罷出旨夕七半時

板倉伊豫守三万石 **榊原式部大輔** 十五万石 松平紀伊守五万石

本鄉丹後守

大岡彌右衞門 **蜷川越中**海小姓番頭 大久保彦八郎火消屋敷

守

前書之町々仮家作ハ格別、

本普請ハ御沙汰有之候迄見

閨

四月十四

日

内藤大和守三万三千石

合可申候、

右行届候段明朝可申立、

尤本建致シ置候分

明朝

八、名前書付並間数書付可差出旨被申渡候之間、

左衞門方へ可被出候

迄行届候段可被仰聞候間、

半紙堅紙帳ニ御認明昼時市

住居本建致出来候分 御支配町々月行事

但

コリ

請印御取置可被成候

- 奥行何間 1間口何間

何渡世

何町誰店誰

住居本建普請中之分

同断

同 断

土蔵新規普請中之分

住居本普請出来候分

同断

横大工町

新銀町青物役所南北之所

龍閑橋川岸通り之分、

紺屋町弐丁目迄

龍閑橋通・鎌倉横丁・永冨町新カモ屋町代地両側

本銀町北側之分

可申候、

本町通り

道浄橋ヨ

IJ 両側

大橋丁通地藏橋迄類焼之分

右之場所土蔵造リ之普請不苦並家作之分本普請ハ見合

日本橋ヨリ今川橋迄両側但浮世小路迄

同断

何御支配何御用

達

地拝 面領 何之誰

住居

右之通御座候、

右町

名主 誰印

今度類焼之跡家作之儀、

随分小住居ニ致シ、

尤成丈棟

月日

不高様ニ仕、

内造作等モ専質素ニ可心掛事、

テモサン瓦ニテモ、先年被 但瓦葺之儀ハ是迄之通相心得、尤見分ニ不拘平瓦 仰出之通勝手次第可致

素成様ニ致シ可申候、 猶更一同ニ相心得可申、 右享保年中モ被 仰出候趣候、 尤葭簀垣・生垣等モ勝手次第之 並屋敷之囲等モ外見ニ不拘質 今度作事申付候面 々

八月

広ニ不相成様分限相守普請可被致候、尤葭**簀**垣·竹垣 武家町家共類焼又ハ家作建直シ候面々 年々過分ニ伐出候ニ付自然大材払底ニ成行、 ヲ経候ニ随ヒ忘却之向モ可有之哉、殊ニ近来ハ諸山共 右之通寛政四子年相触、 其後度々火災有之候処、 成丈欄高手 旁以向後 年曆

右之趣可被相触候

生垣等ハ見合可申候、

是迄仕来候分ハ不苦候、

五月

達

三四〇

於新番所前溜水野越前守殿御普請掛

П

多ク、 此度西丸御普請ニ付テハ莫大ノ御入用是迄引続御物入 右ニ准シ諸大名モ物入多ク、度々御手伝モ被

用高ニテ無拠御手伝被 仰付間敷 思召ニ被為在候へ共、 仰付事故、 前条之通莫太之御入 惣奉行始御普請掛

贈物等無用ヲ例ニ相成候迚、 柄ノ者ニハ有之間敷事ニ候へ共、未々ノ者へ至候テモ 万一心得違ノ儀モ有之間

ノ者共へ贈物等ニ不及候段申渡、

右ニ付テハ重立候役

精勤、 且二百年来ノ御高恩ヲ奉報為ニ粉骨砕身シテ相 敷トモ難申候、右ノ段ハ御為筋存込一途ニ差ハマリ致

無滯相勤候者 御用向出精相勤候様可致候、 ハ其奉行中ョリ申 立候上、 御普請中格別二出精 夫々相応

励、

場所へ御役替等モ可被

仰付、

或ハ御褒美別段ニモ被

不及沙汰候間、

少シモ不隠置差出可申候、

尤金銀座手

儀 ハ勿論ニ候、 御普請掛ノ者へ申渡候様申達、 其外都テ 一候間、 精々心得違無之様一同 公義ヨリ被下候御手当

合可被致精勤之旨、 等モ不相替被下候事ニ

三四 節倹令 水野忠邦カ改革ノ令

当年限二致、 是迄町人・百姓共心得違等ニテ所持致候分ハ別段各之 町人金銀之品無用ノ餞停止ノ旨当四月中相触候付テハ 内証ニテ拵置売買致間敷候、 通、其外モ武家ヨリ誂向ハ格別都テ金銀貝等相用候品、 類一切持申間敷候、 主人或ハ出入屋敷ヨリ貰請又ハ相伝ニ候共、金銀器之 来百姓・町人右体ノ品々ニ金銀相用候儀決テ不相成、 金銀相用並売買致候者モ有之由相聞如何ノ 櫛・笄・簪・烟管・烟草入等其外無益ナル翫物品々 櫛・ 笄・簪・烟管・烟草人等其外翫物品々金銀停 来亥年 (元亥年)ョリ可為停止候、 右ニ付テハ武家要用ノ品ハ是迄ノ 唯今迄商人共仕入ノ分ハ 事ニ候、 百姓 以 止

> 得領主・地頭ヨリ 近国奉行所或ハ御代官並御領役所へ為差出候 廻 シ 相当之代金下ヶ遣シ候筈ニ候条、 亦 泄様可被申付候 其旨相

·座方

相

六月二十

町

之事ニ 費シニ 敷候、 聊宛ニハ可有之モ候へ共、 ニ寄切金並珊瑚珠等相用或ハ四分一赤銅等相用、 簪等ヲ拵、 其筋商人共ノ内ニハ、 旨 上急度可申付候 触櫛・笄・ 当閏四月中触置候処当時其類ハ相用候者ハ有之間 相成候テハ、 真鍮・ 候、以来相止可申候、 種々手数ヲ掛金銀ノ高蒔絵等ニ致シ、 錫箔等ニテ仕立候儀ニモ可有之候へ共 簪其外無益ノ品々へ金銀相用候儀停止之 被 此節象芽・唐木等ニテ櫛 仰出候御趣意ニモ不相叶不埓 数多仕入候へハ多分ノ金銀 若違背ノ者於有之ハ吟味 尤モ 模様 笄

九月

三四二 小判引替令

遠之場所ハ領主・地頭役場ニ取集差出候様、又ハ最寄

一小判其外引替御触

九月

三四三 大阪堂島蜂之巢之巻抄

漂流人送越候ヱケレス船之次第

候趣、右へ内意商売相願候タメ江府近海へ至候風説之日本人七人乗組候モリソント申ヱケレス船漂流人送越陀新古カヒタン差出候横文字書付和解為致候、漂流之た世伊勢守相伺候書面一覧仕候処、此度入津仕候阿蘭去ル五日評議致シ可申上旨被 仰聞候、御渡ニ相成候去ル五日評議致シ可申上旨被 仰聞候、御渡ニ相成候

役等取調申上候書面ヲモ、夫々一覧之上勘弁評議仕候林大學頭並神尾山城守・水野舎人御勘定奉行・同吟味船出帆之砌可渡哉之段御内慮相伺候趣ニ御座候、此儀之候ハ、、重テ入津之節連渡候様可仕旨、当秋阿蘭陀由、右之通リ日本人異国之漂流罷在候趣ニ付手寄モ有

外国へ被対候趣意振之筋ニ付、漂流人連渡之儀ハ阿蘭求候儀ハ彼国之モノ共推考致ス間敷共難申、左候テハ

ヲ以、

右漂流人連渡候様阿蘭陀人へ申渡候ハ、漂民憐

殊ニ今般カヒタン申立候風説迄之儀

人共モ得心罷在、

処、元来異国へ漂流之日本人連渡候儀ハ、兼テ阿蘭陀

異国船打払之儀ニ付テハ、文政八酉年之書付イキリス上ハ此後エケレス船江府近海へ渡来之程難計候得共、

陀人へ申渡候ニ不及段被仰渡可然、且前書之次第ニ候

致方モ相聞難打置事ニ候、一体イキリスニ不限南蛮西ノ野牛等奪取候段、追々横行之振舞其邪宗門勧メ入候去ル年ニ至リテハ猥ニ致上陸、或ハ廻船之米穀・島方船先年於長崎及狼藉、近年ハ所々乗寄薪水食料ヲ乞、

洋之儀ハ御制禁邪教之至ニ候間、

以来何レ之浦方ニオ

及有無一円ニ打払、逃延候ハ、追船等不及差出其分ニ 差置、若押テ上陸致シ候ハ、搦捕又ハ打留候テモ不苦 ヰテモ異国船ヲ見請**侯ハ、、** 其所ニ有合候人夫ヲ以不

候、尤唐・朝鮮・琉球ナトハ船形人物モ可相分候得共、 候、本船追付候ハ、打潰候共時宜次第可取計旨被仰出

懸ヶ図ヲ不失様取計候事専要ニ有之、況交易願望シ主 打誤候トモ御察度ハ有之間敷候間、 阿蘭陀船之見分ケモ相成兼可申哉、右等之船万一見損 無二念打払候ヲ心

意ヲ含信義ヲ唱へ、漂民ヲ囮リニ致シ利ヲ計リ候段、

縦令漂民連渡候共山城守等申上候文化度長崎表へ致渡 猶更不届之仕形ニ付、大學頭申上候趣モ有之候得共、 大体蛮夷之奸賊へ対シ接待之礼可致筋ニハ有之間敷、

御書付之趣等思弁仕候テモ

来候魯西亞船日本漂流人連候節、

長崎奉行へ被仰渡候

御仁恵ヲ被施候ハ平常ニ可有之儀ニテ

君徳ヲ薄シ候道理ハ無之候間、 御国之災害ヲ被除候タメ、賤民之存亡ニ不拘御取計可 御国制之大事、一 時権変之御仕置ニ 向後弥右御書付之趣ヲ 付 |教

> 面 以無二念打払候義勿論ニ有之、 | ペニオヰテ心得罷在候上ハ、今般風説之趣別段右之 尤海岸御備之儀 八兼テ

右評議仕候趣書面之通御座候、 々 へ御沙汰ニハオヨヒ申間敷哉ト奉存候: 御渡被成候御書付五通

向

返上仕候、 以上、

戌十月

長崎奉行伺

評定所一

座

漂流日本人為乗組異国船渡来可致哉之風説書、 和蘭陀

ヤ カ 船渡来之節被 ヒタン差出候ニ付、 仰渡候御書付之趣意、 取計方之儀文化度松前表 今般評議之趣 オロ シ

付テハ不法ニ可有之哉、 取調可申上旨

右御書付写外書通共二二冊五通ト添、

越前守殿、

田

中休藏ヲ以一座へ御渡、 左衞門尉請取之、

角之儀願立之品

申渡、 已前一昨申年申渡置、 相成候ハ外誹謳物一 角之儀願立ルトイへ共於当国弁利不宜、 取入方難相願相成筋ニ候、 同積帰可申段、 猶昨年之儀モ積帰シニ可申付旨 然ル処一角取入ニ不 願之通積帰可申付 依之不差掛

間早々船積可申、 一体日本へ罷越侯テハ日本之掟可相

守筋之事ニ候、然ニ咬囓巴頭役申越候趣ヲ以申立候段 ハ、全彼国之国法相重シ可相守事ニモ相聞候間、 随分

国法ハ当国ヲ以申付候ニ付、 任其意願通り可積帰、 随テ日本国法度有之儀ニ付、 其段ハ兼テ相心得勘弁致

シ、右請書横文字ヲ以申立サセヘク旨被

仰付候事、

守

已後願ヶ間敷儀申達間敷候、

当

久新立合被 右七月廿七日御年番所ヨリ中山猶鐵罷出候処、 仰付候、 高田

角之儀ハ会所商売筋ニモ相響キ候ニ付積渡リ申間敷

之候テハ外誂物モ一同移帰候様可致、咬嵧巴頭役申付 リ可申付旨相達有之処、当年又々持渡リ、一角取入無 苦情相願候ニ付、 去々申年屹度申達置候処、昨年モ又候押テ持渡品 其節限買留、 以後持渡リ候ハ積移

出 候趣ヲ以願立候ニ付、 対当国候テハ不敬之筋ニモ存候故、 願之通聞済遣所、右請書ハ不差 誂物ハ是迄之

度段相願候儀、 二不相掛一 同積帰申付候条、仕役序早々船積可致候、 心得方等閑之至不埓之事ニ候、依テ願 通相納度、随テ誂物方無之一角其外之品々脇荷払ニ致

右八月十三日

願候得共、難聞済事ニ付、 リ申渡置候ヲ、 遠之国恩忘却不致所ョリ誂物是迄之通取入之儀再応相 会所商売筋ニ相響キ候品柄之儀ハ積渡リ間敷旨前 此度押テ持渡リ不束之儀等願 何レニモ先達テ申渡候趣相 式 猶永 々 3

右之趣得其意通詞ヲ以カヒタンヘ厳敷申渡候、 可積

帰受書取之可差出候

時々可糺明処、 々 ヲ以自談ニ及ヒ候テモ不取用、勝手自儘ノミ申立、 自儘ニ積渡リ、 募り在番中不敬之事共有之段、不埓之至リニ候、 格別之宥恕ヲ以不及其沙汰、交代帰帆 直段等之儀ニ付テハ其筋役々ヨリ 通 詞

九月十九日被 仰渡候、 申付候、

就テハ以来不可為再度者也

右末書ハ久世伊勢守・戸川播磨守列座申渡、 ン罷出候序へ、諸家之聞役抔罷出候序之由 尤カヒタ

殊ニ差留置候品

先々申渡候仕

法ニ触

候廉ニモ有之、一体積荷物品モ相劣、 阿蘭陀商売方之儀近年規則不宜、

三四四 齊興公宰相御叙任

松平大隅守(齊興)

ト唱娘又ハ女共ヲ抱置候テ、髪ノ飾・衣服等美々敷

1

以被任宰相候、勿論家格ニハ不相成旨云云、出被任宰相候、勿論家格ニハ不相成旨云云、思召ヲ当時御由緒(次ノ御続柄)を有之殊ニ 大御所(済公)当時御由緒(広大院殿御実)を有之殊ニ 大御所(済公)当時御由緒(広大院殿御実)を有之殊ニ 大御所(済(以)が、就テハ三家方始御続柄ノ面々格別ノ昇進被 仰出候、就テハ三家方始御続柄ノ面々格別ノ昇進被 仰出候、就テハ三家方始御続柄ノ面々格別ノ昇進之儀難被及御沙汰筋其方儀正四位上中將ニ付此上昇進之儀難被及御沙汰筋

十二月五日

三四五 隠売女ノ儀布令

出シ、売女同様ノ所業為致候趣相聞不埓之至ニ候、右町々ニテ娘又ハ女ヲ抱置、料理茶屋向々客有之節ハ差

年相触、尚又去ル巳年(癸巳年)相触候処、今以女芸者地主・町役人共無油断遂吟味急度可申付旨、天明七未々召捕、当人ハ不申及町役人共迄咎申付地面取上候間体売女ニ紛敷渡世為致間敷候、若右様之者於有之ハ早

ノニ准シ、一同厳重可申付候、

親類・兄等之為ニ無拠娘妹ノ内、

芸一

通ニテ茶屋向

出候儀ハ格別、尤売女同様之稼為致間敷候、

女ヲ抱芸者ニ致候義ハ一切不相成候、若是迄心得違ノ付候、付候、

者モ候ハ、早々暇遣可申候、

有之趣於相聞ハ、早速召捕可懸吟味候事、致間敷候、右之趣以来急度相守可申候、若心得違ノ者是迄髪餝・衣類等自分不相応ニ美々敷目立候儀決シテ料理茶屋・水茶屋・揚弓場等ノ者トモ働キ一通之下女、料理茶屋・水茶屋・揚弓場等ノ者トモ働キ一通之下女、

之哉ニ相聞不届ノ至ニ付、当人へ勿論地主・町役人迄七年相触候処、近来又候町中売女ニ紛敷稼致候者モ有若外ヨリ於相聞へ名主始猶更可為越度候、右之趣文政主ニ不限地主又ハ町役人成リトモ三奉行所へ可申達候治敷者無之樣可致候、万一触面不相用者於有之ハ、名者モ家ニテ一人ニ限リ可申候、人別其外念入心ヲ附ヶ町役人共モ触之趣能々相心得、娘妹無拠芸一通為致候

之ハ、地主並町役人共迄モ厳重咎申付候儀可有之候、慎、惣テ右触書之趣堅相守可申候、若触ニ背候者於有宥免ヲ以不及沙汰候間、右体如何之風聞不受様急度相モ急度吟味ニ可及候へ共、風聞迄之儀ニ付先ツ此度ハ

尤船宿等モ可為同様、

此旨町中へ可相知者也

年男色ヲモ停止セラレテ、永ク清潔ヲ鬻ク市人軒ヲ並テ此時芳町湯島八丁堀・芝七軒町等ニ有之処之形容女ノ少

繁昌ス、

三四六 大御所家齊公西丸御移徒

来ル三月十八日 大御所様 大御臺様被遊御移徙候旨

仰出候段、御三家始出仕之面々へ於席ニ老中演達、

正月十日

三四七 風刺記事

そふどう寺

いハ、ただ曲淵どふても間部ハあくしよもの、御せこおの、従うとさわぐなり、きん所の部屋(〜御目付やらめっぽうとさわぐなり、きん所の部屋(〜御目付や店のが近りとさわぐなり、さん所の部屋(〜御目付や話合い御小人目付とよはるなり、聞てさわがぬ人もな話合い御小人目付とよはるなり、聞てさわがぬ人もないれてうらみハかづ(〜ござる、戸田の首を切る時ハかねてうらみハかづ(〜ござる、戸田の首を切る時ハかねてうらみハかづ(〜ござる、戸田の首を切る時ハかねてうらみハかづ(〜ござる、戸田の首を切る時ハ

手負ハかわゆひ、

外科にもぬわせず薬もの

ませず、あしたの昼までひぼしにしたよ、むごい事だ

御張番衆ハかすか智恵しやへ、西丸にて武士も道具を にけろへ一イ二ウ三イ四ウ首をきるやらうでをきるや の尻まで切分て御かち番所へわれ先にと、これがほん よもの、こころとの本多伊織ハ至極年寄神尾五郎、三 のりでまつかで敷かへさせて、 ぬき合せずに、首とからだのいきわかれ、 跡ハ山城かへ大久保とあきれたるのかへんじやエ ちよぼくれ 勤めする身ハなんとし 部屋の畳

木もただから~~と、どふても本多ハあくしよもの、

くしらたわれて、いらてたもんなわけがある、拍子

どこへにげたかあとはからあき、其間にゆるりと外記 きみやら出来動乱如来、 それからききねへ番がも、組がも、御目付猶更うろく 三人、手負が二人にあとのやつらが丸腰びやくえで、 ねへ、今度のさわぎハ西丸お書院外記が乱心、 ハ自殺でいたかつたろうに、 やれ~~ミなさん聞てもくん かわゆひこんだよホウー 即死が

> なこんだに、うるさいこんだよホウー~ 御役が上ルかあんしんならねへ、やれやれ御役も苦労 続がすまふか、つふしてしまふか、小普請にならふか、 るやら、手負の人にハ下宿させたり、此上どふなる家 つちへ聞たり、よう~~極めて届けをするやら見分す ててもおかれず、まごつきながらもあつちへ聞たりこ よホウ/~、1やれ/~いつまでこふしておいてもす

相番即死大変切物類

益御倹使被為入当惑至極奉存候、

候間、 意様へ御吹聴御咄シ伝可被下候様偏ニ奉希候、 付左ニ奉申上候間、外ニ他言実正之処御聞競之上御得 組元手疵新ニ沢山死入深手等吟味仕、別テ下宿奉差上 御評判被成下迷惑之仕合奉存候、 安西仮療小紋八百五 多勢ニ不限御用心被 仰付可被下候、 医師三島音像 依之為亡霊当夏物類 荒増直段

神尾手負小紋千五百 本多伊織島ス百石 戸田深手負小紋アト盾石

小紋連立島音像

阿部取延小紋ニギ石 新庄うろたへ小紋 田手違宿

随テ私組之儀日増ニ

間部帯地ま千石

築地世直小紋三百俵

院殿中深手

艮土大切士ト号ス、

右之外手疵・手負沢山仕入仕候間、 親類分白地三百俵 不限多少御感心可

被下候

巤山勤役撞木木

外記、恨怨擊相番

酒井森川組頭来

不、知胸中思い嗟役

乍憚公場書ヲ以御非常奉申上ル、

于時武運勢六人未雲尽廿二死、



6

ト知ルヘシ、 又術ニ尻ヲカケテキレバ五千五百石ミデ術日、五人ヲ前ニ置壱人ニテ切ルナリ、 ル百年目トナル、イカニト問答テ曰、今爰ニ九ツノ星有、三番ニテ是ヲイヂメ

元方駒家吟味仕、

乍憚オカ目第一ト奉存、

品々種々万

今日御城西へ上ル町

大久保通三番目 山城屋六郎右衞門

種々、絡悪逆。終。無情、風。散。欲、趣:迷士。 夫・倩ッ以・「為「」山「勤」、撞ヒ木欲ヒ立」功, 五仁"小刀"並枕如心小鮥)也、 而臨:西丸座鋪 変, 塵, 中間 而依,御書

成下、 メ、吾服フト物アリヤ、物駒モノ等其外万商売相初メ、 仕合奉存候、依之右御返礼ハ、此度外記正ニ仕法相改 座凶鉞恥辱奉存候、随テ私見世之儀年来御不贔負ニ被 公所之節御座候得共、御毒意様方益御不安心ニ被成御 御陰ヲ以日増ニ変心仕、外聞実儀アタジケナキ

切付可被下候、 仕込置申候之間、御懇意様方被仰合多少ニカキラス御 則左二品書荒増奉申上候、

御ひどい物地とんだ伊織 皆々ちゞれ青面壱匁ニ付 八匁ヨリ品々壱反ニ付五十 誰モ不抜合 安西茶局ひろい物地

々

はしご段染小尾地 物職定守袋添差上申侯別て沢山仕入罷在侯、

戸田体しま三とめ

- 278

引手まかり淵品々非色苦儀隠し屛風品々

血の満のくすり首より上のくすり

は

しを晒女落馬

殿中笠の台 大巾散面々代御銀味より 品 Þ

縫も御急に御座侯ハゝ大針に致差上申侯しみぬれあらい張ハせうちうにて仕

턥 鍋類 々

よろしく工風仕侯但取はつしに仕至て弁利

り不申候又右京仕候でも至て弁へ御持参被成候でも一切かさばて敷御座候、又源十郎の御場所ひかみ火鉢ニ御かけ被成候でも

不申候 但御ひこの進ハ有合見合相用

切目立不

御しゆはん切レ ぬき身しぼり 品 々

風流五郎三仕立こうま羽織

かり門付可申侯但尻切血も附弐寸下り仕立 屋ふれ格子等皆々逃た崩し 中形

御しゆはん地死人ニロなし染

品 Þ

痛メ汁出し類型用申候 んしよ小紋地あたまか割れさ はきくーツ身しなっ 死壱 欠二付

あわれ 小紋器朝御上下地よくあさ小紋器朝御上下地

紅かけ花色之衆御給品々

御意相叶候迄仕直し差上可申侯但御気ニ入不申候節ハ幾度モ引替~

鹿皮いたつらの皮御下ケを品々いたつらして御つか糸並

至て苦敷御座侯但かわ違ニて組合ニ侯間手深

御新庄もの品々 一切不抱こわせにて引掛り次第但申口あべこべに合せ金ナ物

たんまりのもよふいつれ中形柳に

鼻乗悪口鞘品々の

脳 乱 神 × × ٥

ЕP E × 0 o

三番町通 御書院西

へ入ル 町

当日御出之御方様へ 無銘切レ味差上申候、 屋 平 内

御座敷へ目立申候別で苦き隠しハ対客之

酒 ハ本店山城屋ニテ取引仕候 うれ 申候 山

ニ付私方ニて利酒不仕侯但池田いたみ附候てたゝ毒 空泣御香具類しな~

=

ع پخہ

ų

大久保あしくほ阿部らッく より。 貴賤飛出し一件ニ付御吟味 其外銘茶沢山仕入罷在候並 五体かり 流行唄本親

其外つまらぬ地口 木沢山仕入置申候

まりうた

御用向被

仰付被下置候様偏奉希候、

已上、

見世開四月廿二日

右之外諸品々沢山仕入置申候、

めしのなて切りい神尾でこんや、間部でもにくさくへの二階のそふとふか、大さわきていないかりつよひの記、さてい二階の袖袂、しよんかひなひかりつよひの記、さてい二階の袖袂、しよんかひなひかりつよひのおさたかあした、また届にい大久保や酒井の組でたかためよふと沼間しや、いやく~本多であろふかあひてとめよふと沼間しや、いやく~本多であろふかあひてとめよふと沼間しや、いや/ 本多であるおもひい枠の外わけてよみなら御さいに、御張つもるおもひい松の外わけてよみなら御さいに、御張つもるおもひい松の外わけてよみなら御さいに、御張つもるおもひい松の外わけてよみなら御さいに、御張つもるおもひい松の外わけてよみなら御さいに、

己美寺)らっちしな思かないらつしとったであけなつ切とハそのつらさ、八組の世こに思われてヨイヤサ外初のけいこの拍子木はんきちうち、竹ハ白たけの一度

身ハしめつして、よいやな~~

こりはいわはしのあくるひ出るとかつらきの神ならぬ

とせき習じんとうとめり艮まにくてんくあんどもかまいそん〜部屋のふすまにさへられて、なかるゝ血しを晒野や、さらば手なみを見せまいらせうん、たて、のこまむすひ、長の荒川ふみこへて、二階にはじいらのこまむすひ、

めつをはやくいそかんへとなたへも~~残す書おき手にくる~~といさや自をせき留よ~~さつさ勤の根はたへて~~あれおもひ

やかて入そひ小普請へおしき首おち候、かしくぬ五人切、さわさりなからかてぬいろなき御無せいや、ア、なんとせう、目付と頭へ見やハせてはてしハつか

とへきられてにけ出すとても、うんと命のすへをまち勢子まてくさの拍子木をなま中たたきものおもひ、た

きりやす御番外記

あふのは曲淵、安西伊賀にことおこり(休かわとはおちは駒揚の拍子木を、ほんにあわすのかこちこと思ひとこのはなしもしくちって、ゆめさめかへの巓山(こ

にこころもいかり〜こよひかくこにし其時と、へんじ

るもおかし、のりを二階てふくさへ人目、このしまひ

五大力

はらをつくまのあたいちらしい\にげて此頃御組ハ、しはらくねかしておいて、とんた事たと心てあわて、

衆も御城しやぬかぬこころもちへほんにほふやれにけにさしとふしへ五人位ハなんのその、一本きめし御番

-- **280** --

か さのみ御番方さんねんなから曲淵よきうんつよき、 とへせかれて本多切とてもえりとおいとのふいたうつ 西の丸方のいしきりも、 ア、かんのしやう酒井のこころうちさわき、うわへハ て安西にたゝろそへおしきはら切候、かし~ 沼間も間部ももろひもの、 ゃ た

五人切

四組、 ハ死人、よわいうきさア、さりなからかわる部屋なき をまつ、アゝなんとせう、二階の部屋をにけ出し上に たとへ切られてねているとても、 いつまてくさいいつまても、 やかてすむそひ、かわるそひ、こまる山城組頭、 なま中手おひものおもひ かことけんしのくる

やハねっからさっ 大勢刃傷寅の間 徳平膏薬 の抜外記か、 はりきらなんた、相番なんそをよく かんしやくハあれやこれ

首 天神のうた きるそうだ

ハとふからたハ 何とて薬くれなかるらん ゎ n る夜の内に

御目付のうた

方々よろこべ御外科か御役にたつたわやい

智恵袋新庄かきりはたいても

鹿としれない先格もなし

狂歌

越中のふとくのひもかゆるんたら 又田沼等かあたまむく~

滅法蓮華経武悶品大似中

語

称感音経

如世我聞 今般西丸 大変騒動

滅多無性

切刃舞矣

於表坊主 外記憤逆

阿津癡意

手疵両人

駈阿留苦 外科雜混 薬礼無之 新庄当番

葬式無之 五人断絶 世上段 酒井迷惑 々 風説流行 翌日閉門 滅法海鳴 親父愁傷

守ハ

散

即日検使 古津癡意 即死三人

時節到来

阿無摩利陀々々々

横死撰五音絶気

番士殿中骸 矢来荷泉下 衆送帰諸方

鮮血満毛氈

-- 281 --

松平外記茶湯客組並こわい席附惣変流

客 本 多 伊 織

沼 間 右 京

間部源十郎 戸田彦之進

神尾五郎三郎

汁 駒場野拍子木

Ⅲ 肝平作り 上 肝をけし が し が

飯おしつけ評定

香ノ物ミそつけ

焼物御番所をひらき

菓子つまみよふかん

懸物 讃取扱中細六

駒とめていさ水かわん大手先

酒井筆

主をたつねて出の玉川

袋御目付の 茶椀出ぬ人の楽

こほし外科の首を曲

大坂

茶酌はり合

ふた置相番

水指高取れる 茶入片のきい 釜から物

長寿翁

松平和泉守殿領分

慶長七寅年出産スト云 三州井戸郷小泉村

有德院様御代 竹千代君様御誕生ニ付、 百姓萬平

右萬平被召出 下置候、其後

弐百廿九歳

故、復又弐百人扶持被 被為在候処、先祖ヨリ毎月朔日ヨリ灸治仕候趣奉申上 下置候事、 其外長命之儀御尋 種姫君様御入 輿之砌、萬平儀被 候テ白髪切差上候故、百五拾人扶持被

候

六日九ッ、 朔日左八 二日左十一 七日左九八 三日十六ッ、 四日左十 八日八ツ、

五日左十九

右之趣寛政八年九月十五日 御陣之砌、萬平十四歳ニテアラマシ存知罷在候 御目見御礼之節言上仕候

由言上ニ及ブ、未ダ存命ニ御座候′ 天保二卯年 萬平 弐百廿九歳

— 282 —

召出白髪切差上候

花入二重切の

花逃出して恥を

同孫 同悴 同妻 百三十歳 百八拾八歳 弐百八歳

天保十亥二月廿五日守屋大内藏子ョリ書面到来ニ付写置之、

送高多分之趣相聞候、 近頃於諸国砂糖製作追々相増シ、 右ニ付テハ自然本田畑へ甘蔗 大坂表其外国 々 積 ヲ

三四八

甘蔗作停止令

作候儀弥可為停止候

但

蔗地或ハ野山ヲ開、 米穀不熟之地へ作候儀 可為

格別候、

三月五

此布令ヲ以テ世ノ変遷、 人情ノ奈何ヲ知ルヘシ、砂糖ノ産物ハ

薩州ノ特産ナリシヲ知ルヘシ、

三四九 唐物商法ニ就テ幕府手当金ヲ下与ス

於長崎表琉球産物売捌之儀ニ付、差支之筋有之候ニ付

加

方有之候様再三申立候へトモ、 差止候処、 琉球国教扶持等手ニ兼候趣ヲ以テ、 最前モ申達候通リ於 右壳捌

意候、乍然程ナク琉球人召連参府之折柄彼是ニテ可為 公儀不容易御差支筋有之候間難相成事候条、 可被得其

候

千両ツ、年々為御手当被下之間、

難儀ト被

思召候ニ付、

別段之訳ヲ以テ三年之間金五

差支無之樣可被取計

三月十一

三五〇 大野丹助報告書

以別紙得貴意候、今朝六半時靱油懸町出火之由、 騒動仕候ニ付、早速火之元見糺ニ遣候処、 無程罷 帰申 市中

殺放火致候趣ニ相聞候、依之兼テ何之異変之儀有之候 格之助トモ、右油掛町美吉屋五郎兵衞ト申者方ニテ自

聞候ハ、追々申達置候乱妨奸賊之主謀大鹽平八郎並悴

旨御頼中之事ユヘ、 勢、 且実ニ張本御召捕ニ相成候 前文之趣承リ候ニ付不取敢可為御 相謁可申卜罷出

ハ、、東町奉行跡部山城守殿ヨリ即刻乗附御加勢可申

逢有之御心入之段厚忝次第、昨夜半過頃御城代手先ョ 候旨、公用人武善之助へ申述候之処、直様山城守殿御

リ内々訴出候儀有之、両御役所人数一同右美吉屋五郎

兵衞ト申木綿屋遠巻シテ、夜陰ハ万一誤等モ可有御座 夜明二捕可申卜極朝為乗込、 先五郎兵衞ヲ召捕

張本両人カクマヒ罷在候由、可及案内ト詰掛候之処、

如何ニモ両人罷在候旨及白状直様案内致シ候処、 同奥

庭伝へ中々人住候様ナルヶ所共不見、奥行へ案内致シ

候様平八郎咽ヲ血刀ヲ以二三刀突候処ヲ、横ヨリ右之 候物音ニ、両人小間之内ニテ刀切之音致シ、直様乗込

刀ヲ取上候ト塗炭ニ四方ヨリ燃火不得止刀取ナカラ逃

出候所、全合薬ヲ以焼立候趣、依之熊手等ニテ引出シ 人共坊主ニ相成、 両人共捕候得共、早惣身真黒ニ相成相果申候間、 右騒動平八郎懐中散乱致候間、 吟味 尤両

软 者ト相見候所、手当有之候ニ付昨夜アタリ立戻候モノ ォ ヨヒ候所、 右五郎兵衞吟味之上ハ相分可申ト被申、 僧之通似セ手形抔致所持居、全落延掛候 長々御 加

勢之義御頼申、

此御方様ハ別テ力ニ被致候旨、

江戸表

故、直様御放意有之候様ニト被申聞候付及御暇罷帰候、 等手当致置候得共、最早御手放致候方可然哉ト相伺候 様被申聞候ニ付、御安心之段相謁、左候ハ、兼テ浮勢 処、其段以御使者可申入訳ニ候得共、乍略義御逢候事 モ追々可被申達候、猶又重役方へ厚御挨拶申入呉候

弥人気モ相鎮穏便ニ可相成ト奉存候、此段為可申達如 先々奸賊之張本自殺仕候儀ニ御座候得ハ、此節市中モ

三月廿七日

大野丹助

斯御座候、以上、

二月十九日卯ノ中刻ヨリ翌廿日子上剋鎮火迄、大坂大 火ニ付、町数其外共巨細書左之通程大坂町与カョリ、

東西道法七百六十五間

焼跡間数

南北道法千十間

内

竈数壱万三千八百八十四軒

家数三千六百八拾

九軒

明家数千三百六軒

土蔵数四百十壱ヶ所

— 284 —

町

両

組

与力同心武術稽古場三ヶ所

堀組

跡

部 同 組同 Û

同堀伊賀守組与力

牢屋 蔵屋 神社 道場 御破損屋敷拾 御弓組屋 北 南 御鉄炮組屋敷拾軒 御代官屋 神 西 Ш 屋 穴蔵百三ヶ所 町 町 町屋鋪弐拾九軒 崎屋鋪弐拾 敷 主屋鋪拾軒 屋 屋 鋪 鋪 鋪四 三ヶ所 鋪四十六軒 拾四ヶ寺 弐十弐ヶ所 **凭百三十**種 量鋪壱 鋪十. 干 **弐** 壱ヶ所 九軒 九軒 軒 七

弐ヶ所 ア所

> 奉御 行鉄 炮 御代官

屋敷ナリー地田岩之丞御役宅

軒 奉御 行破 損 行御 弓奉 鈴木次左衛! 榊原太郎右衞門組 同心森左十郎 奉行跡部城山守組与力 門組 同 1D

数百拾弐町 内町名之分

テ家数/壱万八千弐百四拾七軒

橋

五

膳

郷外六ヶ所公儀御普請所

弐膳

葭原橋

三膳トモ町掛け 一 今橋 平野

唐崎町 本靱町 天神筋 今井町 うす屋 魚屋町 市之町 東堀新築地 長柄町 鈴鹿町 絁 同骨屋町 綿 山町 町 町 町 管原町 宮前 鳴 金屋 松尾町 高島町 板橋町 内平野町 内両替町 瀧 上魚屋町 信 左衛門 保町 尾 Ш 町 ĦŢ 町 町 町 岩井町 壺屋 南革屋 近江町 古反町 船越 初鏡 折屋町 椋橋 龍 地下町 川 又二郎町 崎 田 町 Ŀ 町 町 村 町 町 町 平野 安土 北新 北革屋 天 高麗橋 御鉄炮元屋鋪 錦 島 今 内 谷 備後 淡 Ħr 町 路 町 町 町 町 町 町 式丁目迄 二丁目 丁目 シリ 二丁目 造丁目ョリ 三丁目迄り 十一丁目迄 二丁目迄り 弐丁目 きり - 三丁目迄7- 一一三丁目 ラリ 弐壱丁目 1 四七丁目 ヨリ

典藥町 東樽町 松江町 河内町 大鏡寺前 植井町 攝津國 天神社 しん町 石 町 町 地 東寺町 大津町 彌兵衞 大澤町 北濱壱丁 前 町 Ħ 内本町 道修町 淡路町 瓦 京 弐丁目 芝丁目 ヨリ 三丁目ョリ 弐丁目ョリ 六丁目迄 弐丁目ョリ 二丁目 きり 弐丁目迄:

方へ返書之写 大坂御蔵奉行鳥田三郎左衞門方ヨ Į, 二条御番久保某

太郎左

滴門町

上略、 御座候、 相知兼候趣故今以安心不相成、 無異少々安心仕候得共、今以御聞及之大鹽平八郎行 舞足ノ踏所ヲ失ヒ候程之儀ニ御座候、 御細書忝仕合ニ御座候、 先以御礼申上候、 何レヨリ火失放シ可申哉不相知故、 如仰何分不慮之出火変事 当地大変ニ付早速御尋ト 諸方御手当不容易事ニ 御役宅近辺先 出火ニハ 手 シ 衛 テ

> 相成、 帰リ直ニ御城内 天仕候中、 最早高麗橋ヨリ川内へ火参候之間、 右大鹽火失ニテ所 罷出候処、 何欤一向不相知上ヲ下へ 々 打出候 由 風筋違却仰 承 ij 急キ

御 混雜仕候迄其内 :城内手配火失防等誠ニ大乱、 生涯如此事可有之ト

談ノミ、 今以本意相知不申候、 大将被召捕候上ナラテ

聢ト致シ候事相知申間敷、中々急ニ筆ニ認カネ候共、

程ユ

へ、万事御察可被下候、

不存、

最早無程甲胄ト覚悟、

古具足取出シ追手

Ē

リ

渾

為込候計ニ御座候、

既ニ東町奉行ハ小具足ニ采配持候

右悪事企候始末ハ虚説空

御城代へ罷出、 夜八時頃御春屋西手ニテ全火鎮、 **抔仕候得共、** 向ニ前後タラケ其夜翌日、一日、 先罷帰申候、 其外兵粮之手当 老体足 廿日

思召寄御尋被下候間千分之一申上候、

私共十九日昼後

ハ

御地へ追々御手当有之ヨシ、 勢等左如々荒増絵図申上候得共、 嘸々御心配奉察候、 是モ何ヤラ聢ト人 当方

私義ハ十九日難波御蔵納払ニテ罷出候所、

天満辺出火

加

申事ニ候得共、

遠方故御用取掛候之内以之外大火ニ

人足等三四十人モ駈付候間、

間遠ニ御座候得共、

家内立退之手筈仕御蔵方出入之町

腰

モ抜候程ニ弱リ心配仕候、

此上静謐二仕度奉存候、

立退之手筈ハ宜御座候、

被 候 安中納言様へ御家御相続被仰出、 五五 去月廿六日御大変御弘被 仰渡候段、 付、 取交候おこれを受験に対して 今般中納言様 参考 尾州家士上 乍恐 ||侯玉造口ト同断、是モ加番並御番頭ノ同切故外トへハ組与力同心ニタシカ加番人 御奉公、 書 仰出候処、 唯今迄之通相勤候様 御遺領無御相違被進 即日夕以上使田

右の行動

申旨奉承知候へ共上様トモ被 仰合候上被

仰出候御筋合ニ

モ

相当居

天下泰平格別ニ御大徳諸国人民一般ニ奉蒙大御所様ハ賴朝卿以来古今未曽有五十年来將軍

御在

御恩沢従

数人山郡

一同切大縄以不過人数凡

掛腰

自,上大事八大简件掛

羽織

教人 た 夷道

追手

候、左候テハ全御老中方之内邪智奸曲之私心ヲ以篤ト候テハ、御趣意不相貫、御意味柄齟齬仕候様ニモ奉存奉仰者モ無御座候処、今般被 仰渡候趣深恩慮仕相考天子御褒美相国ニ御昇進被為在候程ノ御仁徳之段、不

高聴シテ被取計候儀ト奉存、全ク

不及

水戸御国家来中奉承知、即刻三十余騎早馬ニテ馳登リ、之砌、御三卿様方ヨリ御相続之御内意モ被為在候趣、哉ニ乍恐奉推察候、其訳ハ先年水戸当中納言様御家督大御所様御始 上様ノ思召ヨリ出候訳ニハ御座有間敷

大學頭様御屋鋪へ相詰、

敬三郎浴昭 樣御家督ニ不相成

— 287 —

相成、 候テハ、 水戸中納言様御家督被 御国人民一 御三卿方ヨリ御相続之御内意被相止、当時之 統不奉承知候段申上以之外騒動 仰出候由風説奉承知候、

儀御老中方[マミ]

右ハ今般尾張御家中ハ腰抜侍ニテ武威モ無之、

遠路罷

続被 言様へ御申上ハ不行届筋ニ付、 下勢モ有之間敷ト侮被申義ニモ候哉、 仰出候儀、 御触書日限ヲ以相考候テハ、前大納 全 即日以上使御相

智奸曲 公辺計 ノ筋 ノ御目論見ニ相当リ、左候テハ御老中方 ヨリ御大国ヲ纂奪ノ姿ニ相見、浅智ノ謀計 ノ内邪

元来

居家督等有之ハ、 院様御舎兄之御続柄ニテ被為在、 東照宮之御血筋 土貢申上候筋ニハ無御座候ヘトモ、譬ヲ以申上候 町人・百姓軽キ身分ニテモ本家差図ヲ以、 并家来・召仕共へ沙汰モ不仕、 公儀御分国之義、当中納言様 御名君カハ不奉存 別家隠 ハ源 本家 僖

之子供ヲ以押テ家督為致候テハ、

仮令一旦ハ相済候テ

家治リ不申、終ニハ自然ト相乱候期モ出来可仕哉

頂戴御奉公相勤候冥加ニ奉存候間、

愚案ノ趣申上候

相続押領纂奪ノ姿ニテハ、日本国中始ト諸大名ノ人気 況当御家ハ日本諸大名ノ目当ト ・モ可相 成、 御大国 且又

不穏、 乍恐乱世之基トモ可相成候、 歎敷奉存候、

近例モ無之田安ヨリ御家老御用人等ヲ始御附人数多有

御国無勤ノ御家中夥敷有之、常々迚モ増方ノ儀

間、 当時御勘考モ被為在候哉ト、 是マテモ御勝手向御不如意ノ上、去年(戊戌年) 御時節柄弥数多相増申候 西

御家中ヨリ上ヶ金被 丸炎上二付御献米御上金以来、今般之御入用莫太二付、 仰出、 町人・百姓トモヨリ ・モ年

宛行並諸雜費モ相増可申、 取上ニ相成候上之儀、 又候数多ノ御家中増候テハ、 左候テハ百万石トモ可申御 御

者

八勿論、

後家・嬢等ニ至ルマテ、少々ノ基金迄モ御

々引続上ヶ金御用金被

仰出、

別テ去年ハ町人富有之

領国 位不謀其政トノ聖人ノ戒モ有之、 差迫ニ相成候テハ、是又御国乱之基ト奉存候、 上候段、 ノ御取稼大造ト 不敬ニ相当可申哉ト奉存候へトモ、累代知行 ハ乍申、 且操合出来兼御勝手向御〔繰ヵ〕 無私ノ私共不顧恐申 不在其

喜色松筠茂歓声燕雀嬉

具瞻輪奐美佳気満城滋

週歳工初竣新成仰:|旧規| 巍峩凌|碧漢|焜耀映:|紅曦

西城殿閣新成恭賦陳賀

林緯

歓声i

瑞旭懸;,朱棟,晴烟罩;,翠薨, 竹苞松茂頌満殿沸;,

子来良力集功就速,於,期 高棟含:|晴靄|層薨映:|晩曦 民ニ至ルマテ帰服不奉申上哉ニ付、此段別段ノ御勘解 涓吉開,|崇構,週年始告,成 階馴千載鶴窓接万年枝 趣申上候、以上、 ヲ以テ、御家治リ方被 何分ニモ前顕ノ御仕向ニテハ、惣御家中始御領分中万 恭賀 西殿新成賦此恭賀 亥四月 〔西丸落成の件〕 西殿新成 仰看::新営美;聊陳;燕雀私 仰出候方トモ候半哉ト了簡之 御馬廻 規模遵:|旧制|気象属:|新 大學頭林皩草 大内記林衡草 大橋善之丞

> 西殿告竣 大駕再遷恭賦奉賀

新城輪奐美迎」駕幾衣冠 雲籠;;玉戸;祥日映;珠欄; 画壁皆呉子雕梁是魯般 天意人心合可、知万国歓

慶

奉賀経営新就駕徙 西城

成島司直上

接、空樓閣起縹緲類、蓬瀛

連檐金碧耀満壁画図明 輪奐施||新構||規模拓||田

天保十年四月

逾承繁祉長伝ニ再造名 成島讓謹上

御移徙させ賜ひけるに御よろこひ申て読奉る 西城の御殿造り改められて卯月廿七日

月も日も光りのとけき門を明けて

季文

祝ひうた

君まちえたる殿うつりかな

いとはやも成し台の例とて

湖南

よそへて祝ふとの造りかな

み池の清水庭の立石

住そむるけふより千代の友鏡

五月十三日於御右筆部屋

- 289 -

巻物弐

再昌院季文

御老中列座、 越前守殿被仰渡之、

於躑躅之間

一巻物弐

右、林肥後守申渡之、

御造営の御時献納の歌合の内

御機嫌六歌仙

中納言常陸

松板の一万枚ハ気取もの

おもちひになる松の大材

盛岡の城主

かこひ山の檜延鉄いつれかも お遣ひかたに南部よろしく

大造の石をあけたる誉れこそ

仙丸

名に大久保の城の石すえ

右京大夫秋田

神木にかけし願も水のあわ

御用にならぬ松の一ト本

湖南

金箔を買ふて上ますうへからは

河越の少將

光りをねかふこころなるらん

内に撰れん事を乞しかとも、歴々をうらやむ詞あ 此時、石方八損の手明の君にておハして、歌仙の

献納のいしハ商買いゝかたき

てよミ人不知として後撰に加へられしとて

りとて、除かれける心を何なるものか、あはれと

お買上ケにハならぬものかハ

此城をやいて御膳所味噌をつけ 御尋によりて或人即時に下の字を読直しける

又或人の直して

このしろをやいて尾州のミそをつけ

後藤の御間にとふか鉦銅

御屋根むき初度のおまにはあわすとも

周防の武士

— 290 –

願相叶ハス、今年

大御所様御七回忌ニ付、御老中方

ニ御願遊サレ

文昭公ノ御霊屋へ石鉢ニテモ御進献遊

本方西城丸 役味

黄金 才覚 武士 困窮

此薬第一上を補ひ下を冷し、おり/~金銀をつりあく

る事妙也

何とてしもハくるしかるらむ金ハ取る御趣意ハたさぬ世の中に

老若御側加増「奉行役人褒美金、後世様々上金困、親玉よろこべ普請ハ家来かたつたハやい

蓋

是久助遠流影、歳々年々御金新、難渋弥増在町人、

三五三 竹姫君記事

竹姫君様石燈籠御献上之御願、松平右近將監御挨

拶之事、

摩守御簾中竹姫君様ヨリ公儀へ御願被遊候ハ、先年大御所有徳院殿御七回忌ニ付、去ル寶曆七年六月、薩

度旨御願之通不相叶、往古ヨリ御霊屋へ御女儀方ノ御有徳公御他界之砌ヨリ、石燈籠・石手水鉢御進献被遊

御宮有之節、紀州和歌山ノ城主淺野左京大夫幸長之内へ竹姫君様ヨリ被仰入候ハ、往昔淺草寺ニ 東照宮ノ

至「東照宮ノ御女ニテ手水鉢進献ノ事アリ、右様先例『宮本12覧』糸州禾駅山ノ坂主発蟹左京大夫幸長之内

モ候間何卒御奉納被成度達テ御願有ケレハ、

松平右近

候、先例モ御引被遊候故、イカニモ左様ニ被遊候様ニテ申入ケルハ、兼テ御願被遊候御進献之儀御尤ニ奉存將監右返答ノ為、竹姫様御守殿へ参リ、御年寄女中マ

ハ、、外ノ例ニ龍成、後ニ御女中方之進献物多ク相成、申上度奉存候ヘトモ、竹姫君様へ此旨御ユルシ申上候

御霊屋モ如何ト奉存候へハ、先御無用ニ被遊候様ニ乍

候、只御内証ニテ御仁心施サレ献ハ畢竟御名声之儀ニテ、御心実ノ御礼義トモ

憚右近將監へ御異見申上候、凡手水鉢・燈籠

ノ類御進

難申上

候ヘシ、其上

有徳公ノ御恩御忘却ナク御慎社御孝行ノ第一ニテ御座

御実父君ハ―文昭院様ニテ御座候得ハ―大御所様御代有徳公御機嫌能内ニ何トテ御願ヒ不被遊候ヤ、

サ レ 候 御尤ト奉存候、 是厚ヲアツクスル ŀ 申 物

テ聖賢之心ニモ叶ヒ可申、 ハ未有之ト孔子モ申賜フ、 尤 ウスキ所 大御所様モ御父分ニテ ノ物ヲ厚 クス ル事

御座候得共

御実父様ハ文昭公ニテ渡ラセ賜フ、

文昭

御異見申上ケルユへ、竹姫君ニモ右近將監申上候ヲ尤 納之儀御願之儀ハ御礼義ニアラス御見合遊サレ候へト 公ノ御霊屋へ進献之儀ハ不被遊 有徳公ノ尊前へ計奉

感シサ セ賜ヒ ケルト ナリ、

三五四 中 納言様相続 三関 スル 件

山城守殿自筆ヲ以テ御城代衆始へ被

仰渡之趣

今般中納言様御儀御相 意之趣申出候儀ハ御為ヲ存候儀ニ候間、 :続被 仰出候儀二付、 尤ノ筋ニ存候 何レ モ 存

御方々様ニテ現在

大御所様御実子ニテ、 殊ニ御孝心モ深ク被為在、

乍恐

筋ニ候、

御出来モ宜敷御方ニテ

且又御分国之御儀、 大御所様厚御内慮モ被為在御相続被 仮令万一前様思召品等被為在候共 仰出候儀ニ候、

> 決シテ御違背難被為遊、 伺候上ニテ 無之難有被思召候筋ニ候、 直様御請被 併御大変 ニ付前様御内意相 仰上候ヨ

リ外

公辺へ御請被 達テ 仰上候儀ハ勿論之儀、

且再応申達候

候段ハ、乍恐年寄トモヨリ前様へ奉対恐入候次第ニ候、 大御所様格別御急之御内慮不被得止不及通用御請 軍上

尤御国家之御為御家中之為不宜儀、 万々一被 仰出又

候へハ、縦令

御子息方等マテ御相続被

仰出、

不可然筋之儀被仰出

御流方之御係末之

ハ御続モ無之諸大名子息ハ不及申、

大御所様如何様之厳命タリト モ 此方トモ生テ有之候

御国家中之為ニ悪カ 限リハ、 決シテ御請ヶ不申上儀勿論之事、 ル 間敷被 仰

ョリ外無之候へ共、 右御内慮御承知之上ハ、 各共

捨テ前様へ奉恐入候儀ニテ、 無通行御請申上候段 御同所様へ御詑等之儀此 唯

方ニ於テ心得可有之義ニ侯、

右之趣意ニ候へハ、

直様御請被 岜 難有被 聊此度之義 仰上候 思召候

専振我威国政ヲ行ヒ候族有之候故ト奉存候、

右之者ト

乍恐差置候ハ、、

遂ニハ此上如何様ナル悪逆仕候程

騒立候儀御座有間敷候、

ヶ様相成候儀ハ何レ侫臣擅権

中之輩、 ・納言様へ相勤、 此趣篤ト相弁心得違無之安堵仕御奉公 諸事穏和ニ可被有之候事、

中

被遊候事ニ候間可被在心得候事! 無之、御手元御用ノミニテ、此上御不都合ノ儀無之様 御附御用人之儀例無之候へ共、 ノ儀ハ、此方共厚相含罷在、 御政事向ニ拘り候儀ニ 乍恐前様ニモ 御安堵

四月十二日

子争臣有十人、 何共難差上、編ニ御恥辱之至御国害之基ニ奉存候、『編ク』 相続之儀ニ付、議上ケー遺恨不少、且又於天下誹謗[ママ] テ一同騒立申、 今般御相続之儀ニ付、 無道不失其国、 ハ相成間敷、 其国争臣忠義ヲ尽シ申上候、 雖無道不失天下、 誠ニ一文不通之民百姓・町人ニ至迄御 且預天下之嘲哢御国中 御国民ハ本来世上之風評区々ニ 諸侯争従有五人、 同 人気相 今般之儀 乱 雖 天

> 共 召ヲ以御附添被 有之由、微臣ノ私共ニヲイテモ怒気難堪奉存候、 モ無覚束候間、 成瀬隼人正殿先代ヨリ更ニ御為不宜邪逆之儀追々 片時モ難差置奉存候、 仰付置候、 御家柄之儀其段恐多候 其旨 神君様思 此者

当隼人正義御為不宜、擅権横道自身取計方不忠奸侫之 社誠ニ不義不忠邪曲之臣、 今般之御一条ニ付テハ猶又

隼人正事急度御糺明退身可被仰付、 至奉存候、 人以令言、古人之金言有之通、 隼人正殿ヲ恨世上取々悪評仕候者、 実ニ積悪爰ニ至候欤、 左モ 無之候テハ益 天無口

ニ可相成、 且又 々御国政相乱レ、殊ニ人民之心ヲ失ヒ、

大御所様御儀御内慮被為 在、 御火急ニ御相続押付被

仰出候方仰奉接候処、 恐多モ

大御所様御儀、

御在職之砌ョリ万民ニ御徳風豪御仁政

世挙テ奉仰候 条 御賢明之君ニテ被為在、 然処今般之御

公義ニテモ御老中方之内不忠侫奸之族有之恐レ 大御所様御賢慮ヲ奉掠奉負御内慮候儀ト奉察歎息仕候 多クモ

御国乱之一

四ッ谷秀之助様御義早行御養子相成候様仕度、 右様相

成侯へハ 瑞龍院様御代以思召被 立置候御分家

モ相立、

御家中之輩一統望モ相叶、 此上忠孝相励御奉

恵可申、 公無油断誠勤可仕、御国民ニ至ルマテ化御徳盛懐御仁 左候へハ弥以御世静謐ニ相治可申ト奉存候、

御座候ニ付、厚被巡 御思惟右様相成候様奉願候、左

何卒秀之助様御養子之儀ハ、偏ニ御国家御保上之御為

唱可申奉存候、依之愚昧之私不顧不敬之恐奉再達候、 候へハ天下之誹謗漸々相解ヶ、且人民安堵仕万世ヲ相

大御

殿實法幻鑑大禪童女、

七月一日(同日トス)、澄姫君芝邸ニ夭ス、

法謚蓮相院

大圓寺ニ葬ル、

三五六

(澄姫君記事)

三五七 〔封回状〕

天保十亥年八月十六日

封廻状

其方儀兄杉浦玄徳取計ニ随ヒ候儀トハ乍申、横山町七

杉浦玄泉叔母小普請組夏目日向守支配

しま三十一

城守妾ほの附相勤候節、山城守儀病後時々不相勝手元

織田近江守先代出雲守へ奉公致シ、追テ近江守養父山

神田冨山町七右衞門養女之趣ニ身分ヲ偽、

差下候ヲ、 ニほの不罷在不自由ニ付、在所へ罷越候様申付迎之者 在所諸家老生駒主鈴存含有之取計候儀トほ

又ハ心得違ヒ致シ候ほのへ実意ヲ以教訓ニオヨヒ候家 の俱々疑惑致シ、同人出立不致ヲ如何之儀共不心附、

-294

大御所様、仙洞御所(天皇)〈御数寄屋被為造進候、

三五五

家齊公仙洞御所ニ数寄屋ヲ献ス

郎兵衞娘、

坪数惣計四十坪九分ニリ

皇(篇)モ茶事御好遊サレシモ、四季共御風炉ニテ被遊 禁中ニテハ畳ヲ切(ストルヲ云)候事 禁忌之由也、霊元法 禁中ニテ御数寄屋別造有之ハ是ヲ始トス

御畳ヲ切ラレシハ今度ヲ初トス、

候ヨシ、

天保十亥年八月十六日

織田近江守家来

続合有之、御老中方へ伺之上ナラテハ何共難及答旨事

髙声ニ猶予難成段申断、

敬象ト同様申付受候処、

主人

テ主鈴等ヲ憎候心底ヨリ、 候ハ巧有之候儀ト弥相疑、 駈込訴致シ、其上近江守家来へ身分引渡有之後、 衞門等日限ヲ定出立申渡候ヲ、 老代岡田五郎左衞門 様七右衞門品々用弁イタシ、 務大輔方へ可申立ト及内意ニ候節、 ほの窮屈之体ヲ気之毒ニ存、 ハ病身之儀別テ倶々難渋致シ候由、 出呉候様頼遣候段不東ナル次第、不埓之至ニ候、 同長屋へ被押込候ヲ不快ニ存、食物等麁略ニテほの 其外品々不取留儀ヲ訴状ニ認、 ほ 時々菜之モノ其外取寄候ニ付、同人並女房かよ等、 の出立之儀ハ存モ不寄体ニ付不得止事、 仰付者ナリ、 ・佐々敬象モ主鈴同腹之モ 山城守モ於在所難義致シ候 ほの身分気遣敷存候迚、 近江守家来共之取計方中 迷惑ニオヨヒ候趣ヲ以願 右体強テ可差立ト仕 脇坂中務大輔宅 右七右衞門方へ申 申合候儀ト不相聞 五郎右 依之 ほ þ 兼 成 の

> 家 老 岡代 田 五郎右衛門四十一

同 佐 敬

申付候程之儀:付、此上何様之儀:付此上何様之沙汰 立出立不致、 其方共儀主人隠居山城守義手元妾ほの不罷在不自由 病気ニテモ可召連、万一罷登ラスナラハ暇ヲ可差出旨 家老共ヨリモ度々可差出旨申越ナレ共、 心配致シ、ほの心得違之段ハ種々教諭ニ及ナレ共不取 モ可有之モ難計、品ニ寄近江守妻やす等歎ニモ可及旨 在所へ罷登候様申付、 九里八郎右衞門出席之節ハ、既山城守憤 両度迎之モノ差下シ、 ほの病気ヲ申 象六十二 又

付

候節、 儀次第ニアレハ、右体山城守厳敷申付候義ヲ、 郎右衞門ハやす呼出ヲ遅席致シ、 為致トやす世話致ハ不宜迚、 家中取締ニモ差響不得止事、 ほの出立差延候様申付ヲモ不取用ノミナラスい 同人へほの面会差留、 厳敷出立申渡ハ無余 追テ同人手元へ罷出 猶予可 五

甩

居しま義御老中方へ駈込訴致候ニ付、 六ヶ敷申聞、 又ハ杉浦玄泉叔母ニテ、 主家之浮沈: 其比ほの附相

勤 =

齟齬致、

同人越度可相成ト存、

追テ吟味ニ可任義トモ

のモしま馴合ニテ仕成義ニ可有之抔噂致シ候ヲ承リ、 モ可抱ト心痛致シ、家中之者共同道ニテ人気不穏、[キック] ほ

是以無謂義ニモ無之間、再訴有之ナラハ不容易儀

重之取扱無之、是迄之通為相勤候様御沙汰モ有之処、 の慎申付長屋へ押込番之者附置、しまハ御引渡之砌厳 五郎右衞門一同心得難手放置迚、近江守へモ不申聞ほ

旦取昇候様子有之ヲ幸ニ致シ、其儘差置又ハ右様之

屋ニオヰテ保養為致段右御老中方へ相伺、其節御差図 義仕出候テハ恐入、且ハ気分不揃之事モ有之候間、長

付、

難被旨ニ付、ほの手広ノ長屋へ為引移、同人ト一所ニ〔ママ〕 致迄ニテ、ほの一同番之者附置、 殊ニ食物等之申付方

不行届故、 等之趣しま不審ニ存、 賄方須佐美茂一郎等麁末之取扱等致シ、 宿七右衞門方へ申遣 コリ同

込訴致シ、既吟味ニ相成候処、 右ハ山城守内意ニモ有之ナラバ、 江戸表ニ居候様給人菅谷格馬 ほのヲ呼山城守存意無 ヨリ 兼テ之申付ト 申 越候 曲 13 右 の

之旨、

不心付、 立帰り之積リニ有之共御届可差出処、用事不相済追テ 書取寄、其上山城守四男瀬之助先達テ出府致候ナラハ、 ヲ以両端之差図及ス段申披可致旨彼地へ申遺、同人自 山城守内意及儀無之ナラハ其段書付申受、 右

所通手形申請、家中旅行之姿ヲ以為差登候始末不届 すか在所へ罷越節、同人之組頭役津田勘兵衞養女ニ可 出立延引ニ及ナレ共、其心附モ無之打過或ハ山城守娘 遣近江守内存有之迚物入ヲ厭ヒ、勘兵衞娘之積リニ 両人共武家奉公構主人方暇差出申付ル、 関

三五八 銭相場御触書写

町 Þ 両替屋

銭相場之義、去ル寅年一両ニ付六貫五百文ニ定相場相

然気配之励無之漸々売高差支候趣相聞候ニ付、 立候処、相場高下之活用無之故両替屋共利潤薄 去ル酉 ク、 É

相心得、当時有来リ候両替屋ノ外ニテモ銭売買令停止 年 (天保八丁) 天然之相場ニ 一復シ、 相場之義モ以前之通

畢竟定相場相立候テ、 差支ヲ厭 限リ其余難売渡抔、相断候両替屋共モ有之哉ニ相聞候、 就中暮ニ至リ候テハ格別引上ヶ所ニ寄候テハ金二朱 之、六貫三百文以下ニテ年々十月下旬ヨリ高直ニ相成、 士 候様致候 立渡世可致之所、 殊更組 候義ト 方モ不致候ニ付、 次第ニ致候義ニ付、 相 成謂、 八夫々之職役有之、 モ 相響候故ヲ以テ被 相成、 其上問屋組合停止ニ相成、 相聞候、 合再興ニ相成候上ハ、 右ハ全ク両替屋共義定相場ニテハ渡世利 ۲ 右ニ付外工商ヲ始家家・寺院等ニ至迄日用 以之外不埓之至ニ候、総テ士農工商之内、 然 般ニ買進※候人気ニ傾 右悪弊ニ泥ミ払底ヲ唱へ相場相進 手前ニ有銭少ク不売渡故世上之差支 ル 気配薄ク入用之時節別段出精買入 処前々之如ク天然之相場ニ復シ、 百姓ハ四時寒暑 仰出候義之所、 其頃銭相場ノ下落イタシ物之価 旁冥加ニ存実直 素人ニテモ銭売買勝手 其後俄二払底可 キ、 ノ厭ヒナク農業 自 = 然融通滞 相 場相 徳薄 ヲ

成シ、

候、 平穏ニ渡世致候ハ、偏ニ太平ノ 悉ク営ミ有之候処、 ニ辛苦致シ、職人共ハ聊之賃銭ヲ取リ世上ノ用ヲ足シ、 (江戸)ニ住居致、 然ルヲ別段ノ御奉公筋ハ不致候テモ、 別段之勤ト申モ無之、暖衣飽食シテ 商人共ニヲイテハ代 御徳沢ニ 浴シ候故 セ 御城下 メテハ 家

候旨、

其外品

々触示置、

度々御払銭等モ有之上ハ、

右

其後モ更ニ下落候義

無

定相場引上ヶ候義ハ致間敷所、

場之儀ハ米穀ト違イ豊凶ニ不拘勿論、 右様之取計抔イタシ候ハ何レ共不相済次第ニテ、 業筋正路ニ致シ、

上ョリ之御世話無之様可心付候所

銭相

唱候者共ニ仕出之由、 有之候へ共、 其実ハ人作ニテ、 天下通用ノ国宝ヲ払底之趣 其方共之内取引組 天然相場抔ノ唱 申

哉 ニテ、 イテ御支配致ス町人ハ子ノ如ク思ヒナシ、 相成候節ニ至後悔致ス共其詮有間敷、 至リ可申候、 其身重キ罪科ニ被行、 第一 不直之相場立方致ニヲイテ 万一 御威光ニモ拘リ候義ニ付、 此 上厳重 身上ヲ失ヒ妻子離散致候様 ノ吟味ヲ受候節 ハ上へ対シ不軽不届 都 難捨置場合 テ奉行所ニ 成丈罪科 如何致候

ル ヲ イテ 不堕樣

幾度

モ 教へ

導キ候義ニ

候、 然

ル

ニ其教ヲ守ラサ

、H.S.W.W. こ、1「・・こ、ほこり ここ、 ここばて御大法ニ背候モノニ付、無拠夫々御仕置不申付候テハ

へハ、其方共ヨリ右申渡之趣巨細ニ可申聞候、ニ付、得其意聊不直之義致間敷候、尤今般不罷出者共ヨリ一人別ニ申論、銭不貯置売出シ候様世話致シ候筈論候間、是迄之心得違ハ更ニ相改、夫々相場引下ケ候論候間、是迄之心得違ハ更ニ相改、夫々相場引下ケ候不相成候義ニテ、如何ニモ敷ケ敷次第ニ付、右之趣申不相成候義ニテ、如何ニモ敷ケ敷次第ニ付、右之趣申

右 世話掛リ

諸色掛リ

十二月八日

名主

同承知奉畏候、依之為後日御請印形差上置申候、以上、右、去八日北 御奉行御白洲御教諭之趣猶被 仰聞一